
ライク・クロニクル

如月シロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライク・クロニクル

【Nコード】

N1793S

【作者名】

如月シロ

【あらすじ】

狩猟を軸とした彼らの世界では…後世へ影響を与える程のキーマンの一人とまで異端の敵に語られた程の彼だったが、そんなものは彼にとってはどうでもいいことだった

オッドアイ・デビルス

恐るべき武勇とある程度の事ならこなせてしまう才覚があった英雄は純粹な人間とは違い異端種である
ハイ・イブリットと呼ばれた太古の“英雄”は“英雄”との因縁に最後の戦いへと迫られた時、歴史の闇へと消え去られ彼を打ち破った“英雄”も何処かへと姿を暗ました

この話は、その先の新たなクロニクル内一つの可能性であったとき

プロローグ

俺は……何を視ている？

いや、…何も見えていない？

辺りは暗く…しかし、人の気配も騒音も何もかもが無くなっていた。
他人の感性も感じられない

彼がその事に気がついたのはすぐだった

だが、本当に“すぐ”…なのか？

時間の感覚がまるで無い、空気も自身が呼吸しているのも分からない

だが、今のこの感覚は嫌だ

ああ…、
少しだけ頭が回っているみたいだ

そうか…

これは“あの時と同じだ”

最も古い記憶が呼び起こされる
口づるさくギヤーギヤーと吠えてばかりの女と仕方なくコンビを組
まされ、島の中央火山にて脅威となった巨龍の排除

後にそれは一説の話となってしまうたらしいがそんな事はどうでも
いい

あの時のその後の感覚…若干違う気もするが、恐らくそれ近い

俺は“また死んだのだ”

段々と記憶が蘇ってきた…

そうだ、間違いはない

俺は戦場の最前線に居た。あれだ戦争に近いものだ
最後の戦場で、俺は闘いに負けたのだ。敗れてしまったのだ

そうだ、互いの命を掛けた一騎打ち、譲らない闘い。奴に、強い意志を持った人間に負けちゃった

ならば納得だ。…だったら、ここはあの世で良いんだよな？

全てが何も無い此処をそれと判断しても別に構わんだろう。誰も居やしない。孤独で、神経も、何も感じられなくて、ただ…あの時、あの頃の記憶が呼び起こされる

(まるで走馬灯だな…)

身振りも素振りもしているのかは判らないが、俺はフツと知らぬ間に笑っていた

自身が死んだ事に対してやましい事など無い

自分は好きなように生き、そして見事なまでに風来坊とまで突っ込まれ、揺らぎはあつたが最後は自分勝手と言つてもいい程の信念を貫いた。

“今頃、彼らからしてみれば残念だとか何故降伏しなかつた!?”
…俺が予想するならばこの辺りだろう。怒声を込められているという事もありうる…

だが、力ある者の結末は死に急ぎやすい事。誰かが言った言葉だ。自惚れする気はないが、まさにピッタリかもしれん

もう何も無い。しかしふと、思う

正直、我ながら丸くなったな…と

少なくとも、以前は他人の心配など全く気に掛けはしなかったし、それどころか奴には依頼で人殺しや抹殺など常にあった

簡単に

非情な人柄だったと

奴は二つの時代を生きた

俺はハンターとして生きた時代から。そして俺がハンターとして生きる前の時代、尊敬する奴の記憶には人を相手に殺しなど、それが当たり前のようにあった

（ うん？ ）

また何か引つ掛かった。今頃になって気がついたそれは、彼の中
でおかしい

（何故？奴とのリンクが途切れている？）

自身は一つの肉体に二人、だが魂は二人分を持ち合わせていた…少
なくとも自分自身の事を特異体質にして純粹に人と呼ぶよりバケモ
ノと呼んだ方が判りやすい。いや、バケモノで良い。自覚はしている
だが常にリンクされているはずのオーナーである奴とのリンクが途
切れている？

本当に一人だと…？

それを理解した時、この世の心理的、生理的には理解できない。

なにか “光が見えてきた感覚に陥った”

1 (前書き)

背景は以前のイメージ優先の為にこのまま

2008年に書いたものほぼそのままなのでバランスは考えません以降の前書き、あとがきは書かないつもり。 気まぐれな投稿でやっっていくつもりなので期待はしないでね)・・(・・(それでも宜しければお進み下さいませ)・・(・・(

「お疲れさん」

局員「お疲れさま、お掃除頑張ってるね」

通路でモップを引きながら局員に軽く挨拶

既に一週間となってしまうたが、粗方自身の今の状況とその心が落ち着いてきた事だ

現在、…俺は保護と言う形で“時空管理局”というやたら大規模っぽい組織の中での内一艦戦艦という“クラウドディア”にて身を預けなければならぬ…そういう立場となった

…いや、俺が何かをした訳ではなく寧ろ被害者という立場にあるら

しい（管理局の人が言っていた）

しかしそれはただの口実だろう

状況が状況だっただけに、我ながらよくもまあ…その口実に乗ったものだ

全ては一週間前の事だ

話は断片的にしか覚えていないが、とある任務を受け持ったクラウドディアの方々が管理世界“ノーズ”という世界にて突き止めた何かの研究施設とやら

その研究施設では儀式魔法とも呼ばれる難易度とリスクが高い“召喚”と呼ばれる魔法というものによる危険な実験が日々行なわれていた

限度を知らない研究者は埋まらない探求心をひたすら輝かした。それが遂に管理局に知れ渡り、非合法なその用途と危険性から逮捕へと発展。現場へ出航したそうだ

そんな今にも危機感晒された研究者は管理局の来訪を待ち望んでいたかのように自分の研究成果を試そうとしたそうだ

そう…なにか含みのある“召喚”での成果

地下の薬品染みた臭いはあまり心地よいわけでなく、寧ろ趣味が悪い

三人一組と三つの隊に編成された局員が入り込んでいた

局員「繰り返し返す！投降せよ！他世界に影響を及ぼす魔法は違法。重罪に当たる！おとなしく術式を解き投降するんだ！」

部隊長らしき人物が警告を兼ねていた
しかし、それは決して届く訳が無い

研究者「それは大変だろうね。しかしながら既に儀式は終演を迎える。だからそれは叶わない！私が長年少しずつ組み上げた機器と“オルゴン”による魔神の召喚儀式！“サイクロプス”がお前達管理局に制裁を下すのだ！！」

ビリビリと機械周囲を揺るがす“ズレ”が生じり、現場の管理局員でもこの状況は不味いと思っっているぐらいだ

室内の中央にはカプセルのような機器：中には水が貯まっているおり、最も中心には綺麗な石：いや？宝玉のようなものがあった

その室内には物凄く堅い障壁が展開されているのか、小隊は突破どころかそれを未だ破壊できない

「「ギギギギギ！」「」

一際大きく機械が高鳴った

何とも情けない様子かもしれないが相手は犯罪に手を染めた研究者、簡単にはいかなかったのだ

更に、深い地下の一室に反響させるスピーカーに研究者は恨みを込めて確かにこう言った

「お前達、時空管理局が私を追い出したからいけないんだ」

そう吐きながら視線は強力な障壁に被われた機器に釘づけだ

少し、いや…クラウディア内では慌ただしくなっていた

局員「中央機具から魔力反応増大！」

クロノ「くっ…！」

ここで指揮を取らなければならない立場に苛立ちを覚える人が居た
何度あっただろうか？けれど、手の施し様がなかったのは明白だった…

キイイイイイン！！

咄嗟の判断で局員は身を伏せると画面は光一杯になり、衝撃が走る

そう…それは誰の悪戯なのか彼には突然の事だった

眩しい光が納まると爆発でも起きたかのように周囲は盛大に崩れ、
中央にはなにかが“居た”

クロノ「　　っ！状況を！」

局員「反応消失！モニター出ます」

研究員「クククク…ハハハハ……………は？」

研究員は啞然としている

先程までの余裕が、何処かへ行ってしまったかのように

対するクラウディアの局員もモニターを見て一瞬思考が飛んだ

中央に居るのはぶっ壊れた機械が台座となり、姿勢を崩した男性だ

…それも18〜20歳くらいの、…いやとにかく“若い男”が召喚されたのだ

しばらく沈黙が続き、あまり時間は経っていないのだろうが、すぐに局員は再び動きだす

どうやら障壁は先の衝動で解除されたらしい

ふとクロノが中央にて未だ動きを見せない人に疑問が浮かんだが、とにかく先に研究員は逮捕しなくてはならない

その広い一室には彼以外誰もおらず、男のその身なりは明らかにロボロポロだが彼の格好は管理局とはまた違った服装、そしてその体に釣り合わない程の幾つかの武装、ひどいものだ

中でも彼の身長を上回る大型銃器の銃口からは煙が吹き上がっている

武装した局員がそのエリアへしていく中、研究員は啞然としていた

研究員「馬鹿な…なんだアレは？」

狂ったマッドサイエンティストが望んだものとは時空管理局に一泡吹かせる魔神。期待を大きく削ぎ取られた感覚に気が気で仕方がないその視線の的となっている本人は全く気がつかず、ただ身に覚えもない一室を見渡すだけだった

と同時に人が視界に入った

武装した管理局だ

局員「その君！我々は時空管理局の者だ。抵抗さえしなければ危害は加えない」

「……………」

通じるか判らないが、言葉は伝えた

だが、黙りしたまま入ってきた音声に身を向けゆっくりと顔を上げる

研究員「それは頂けないね」

室内のスピーカー越しからだが、一際大きい声が響く。それは主犯である研究員からだ

研究員「私は君を召喚した。解るかい？」

私は言わばお前のご主人様だ。

カタッ！

局員「動くな！」

だが召喚された男は研究員の言葉に気がついたのか立ち上がり反響していたにも関わらず一点のスピーカーをじっと見つめる

男は訳が分からないか、局員に取っては判別し難い反応を
首を傾げた

局員「止むをえん…！ 小隊からクロノ提督へ、彼を拘束します」

「 待て」

声主は召喚された男からだ

喋らないから戸惑い、勝手に話が進んでいたが、彼が言葉を理解し
ている事が解ると自然と局員は警戒する

「何もしないさ。今の会話からある程度の状況は判った。
だが、俺と…交戦したいのなら相手をしてやるよ」

局員「何を…！」

状況はある程度判っている癖にして、掛けた言葉はなんとも挑発的

だが、判断は下された

クロノ『いや、小隊はそこで待機だ。、小隊は引き続き任務を遂行してくれ』

局員「くっくクロノ提督!？」

「……………む？なんだ…？」

空中に人の姿が浮き出ていることに男は不思議な物を見ていると言ったほうが正しいか、通信モニターと呼ばれるそれに釘づけだ

クロノ』どうやら彼には召喚された覚えがないらしいみたいだ。おそらく突然の事でそこまで状況が見えていないだろう』

だからこそその対応だろうからこれは好機だ。スムーズに進めたい。二小隊は引き続き違反者を追ってくれ。彼についてはこちらが引き受ける

彼は選択肢を作らせた

少し腹が立つ言い様だが、喚びだされた人間なのだ。何かあるか分からない以上無駄な戦闘は避けたいのが本音だった

、
、
小隊長「了解」

少しのやり取りで動きだす彼らはいま迅速な行動に見える

少なくとも男にとっては助かる事だ。今指示を出した男の配慮に感謝しよう

そう思い、会話が出来るらしいので
となく話し掛ける

男がそれ

「心境を見定めた判断に感謝するよ」

クロノ『いいえ、貴方の落ち着いた対応が、事を最小限に収めたんですよ』

ある意味運が良かったらしい

そもそも現状だけの問題だけではなく、自身についての疑問もあったからこそその場への警戒心だけであつたようなもの

どうするかなど見定めてからでも問題はなかつた

小隊長「では、彼を連れて一度撤退します。」

君、名前は

「名前か…」

少し曇ったような雰囲気のみられたが、同時だった

ガシャ！

「おい…なんだあれは？」

理解しがたい無機物らしき物体を見るなり男は怪訝そうに離れていく
局員へ問い掛けた

局員「“ガジェット”だとー！」

「ガジェット？」

七機程、ちょうど“彼を”三方向から挟むようにして仕込まれた専用出入口からその姿を現わす

局員が驚きと少し後ずりさっている辺り、あれが脅威的な印象を与えているようだった

小隊長「いかん！君！ここに逃げるんだ！」

ターゲットを狙い定める赤外線が彼の体に照射され、すぐに感づいた

「！」

レーザーが放たれると同時にそれをぎりぎりの動きで躲す

その避け方は慌てるどころかやけに落ち着いていたが男はその塊を睨んだ

明らかな敵対意識

そうなんだと理解した男は、自然とガジェットを見ていたのだ

「全く持って厄日か」

当時、管理局の局員達はAMFの効果範囲ではこちらの攻撃はあまり通じない。戦闘も一方的に攻撃されて話にならない

だからだ

「遠慮はいらないな！」

局員からしてみればまさかの無謀を連想させるその一言、だが想像を遙かに裏切る形となる

当の本人は的確な殺意を持っているかのように目を細める。初めて見る形、卵みたいな塊は同系の形以外無差別な攻撃、それに加えなげか浮遊している事から以前までの非常識を、ここでは常識なんだと一気に切り替える

局員達は啞然とした

クロノは驚いた

彼はさっきの言葉通りにソレを実行

彼の様子見ていた限りではガジェットへの知識など、あるわけがない

更に彼はガジェットからレーザーを放たれているにも関わらずゆっくりと……いや、しかし丁寧な回避行動をやったのける。あまりにも冷静だ

通り抜けたレーザーは壁を破壊し、ワンテンポ見計らって男は“動いた”

早い！その速度は常人が出せるものではなく、簡単に真っ先に仕掛

けたガジェットの間合いへ詰め寄っていた。

「警告はしてるんだ」

ガキヤ！！

局員

「なっなんと…！？」

さらに、次に見たのは“素手”によるガジェットのボディの一部を
抉るように破壊した後だった

するとどうだろう。そのガジェットは動力系でもイカれたのか勢い
に流されたか意もなくなったように地に転がる

「硬い、面倒だな」

ならば仕方ない。紅服の男は背中に背負っていた明らかに武器と
いえる物に手を掛け、複数のガジェットからの攻撃の中…それを展

開した

局員達が数機のカジエツトにてござっている時、彼らの目にはそれは大きく映っていたかもしれない

紅服の男のそれを目の当たりにする

小隊長「なつなんだ！？戦い慣れている？」

カジエツトからの触手みたいな攻撃から回避しながらも展開されたそれは、局員の使う“デバイス”とはまるで違う

かなり使い込まれた古びた形状からは大型の銃、それも人の扱えるものではないと分類しかねない類に系統する武器だと判別できる。

ガアツ！！！！

それから放たれる一撃は、高音に比例してカジエツトの装甲を軽々と貫いていく

同員「ぶっ武器が違います！自分はそのような物を知りません！」

同員は驚きを隠せない

当たり前だ

ガジェットのアMFなど簡単に凌駕した強力な“実弾”による射撃を前に、それらはあるという間にガラクタへ変わったのだから…

新造艦クラウディア

少しばかりいざこざがあったが彼は航海船へ案内された

トンデモ急展開からあつという間に事件は終止符に向かいつつある中、…クラウディア艦内では少し前に帰還してきた戦闘員を含め、調査隊メンバーの構成に入っていた

帰ってきた部隊には一時の休息もやりたいのだが、現場を放っておく訳にはいかない。…すまない、何せ人手が足りないのだ

クロノ「…全く、頭が痛いよ」

モニターには、あの施設に研究されていたらしい局員がなんとか倒した大型の龍に、事件の黒幕…無残な肉塊にされた研究員、名はエリリック・ノア、彼だった者が映る

この洒落にならない龍が何やら切り札っぽい雰囲気の間違ったが、哀れな事になった

いや、自業自得だろう

狂喜に狂ったエルリック・ノア、龍をペットの様に扱い、それが気に障ったのか威嚇され…長い尾で小動物を払うように吹き飛ばされて無惨な肉片だけへと変わった

その場にいた武装隊も問答無用で龍に襲われた

まるで恨みでもあるかのように…

局員もそのドラゴンの暴走により、2名が重傷…4人が軽傷

何とか倒す事は出来たが被害は大きかった。パワーなら明らかにドラゴンの方が上だ

資料によるとあの研究員は管理局に勤めていた。生態の研究者としてかなりの実力を持っており、管理外世界においてもそれは発揮され彼から提供される資料はその世界においての説明をするのに為になるものだった

そんな彼が突如として、4年程前に管理局から姿を消し独自のパイプを持っていたのか、今に至る。

不意にこの言葉が脳裏を過る

「お前達、時空管理局が私を追い出したからいけないんだ。」

研究員がそう言っていた

思わず頭が思考の海へダイブする

いやダメだ、今は目の前の事に集中しなければ…

研究員の事は仕方がない。亡き人に追求なんて出来はしない

本部への連絡とそう指示を出すと局員はせつせと仕事に取り掛かり自身は話し合いをする為に現場に出動させた武装隊の残りの局員を待機させてある室内へ向かう

無論その事に反論は出た

艦長自らだとあんな動きを取れる彼は十分に危険なのだが、あれ以降、おとなしい。総合的な判断から融通は利きそうだった。

少しぎこちなかったが、たった少しの間で法に引つ掛かる荷物まで押収させてもらっている。

逆にここで行かなければ不信感を持たせてしまう可能性がある。間違いの無いようにしっかりと説明をし、納得してもらわなければならない

本来の任務は一応残念な形だがまもなく終了するが、新たな問題になったのが

“結果的に残ってしまった彼”

こちらの呼び掛けに答えながらも、自らは正当防衛の対応を取った自衛の為にミッドチルダでは違法に引つ掛かる実弾の使用という問題な事を当たり前のように起こした。想像が当たりなら少しだけ同情はするが、結局…保護した際に彼は被害者であり押収しない限り違反者だ。

ある程度考えはまとまった。…話し合いが出来る相手ならやはり自ら出向くべきだ

クロノ「全く持って厄日だよ」

独り言のように「はあ……」っとため息をついた

それからしばらくだ

室内に入り、保護した男性の来室を待つ。よくわからないが、彼は怪我を負っていた。それも目で見て明らかだと分かるぐらいに。簡単な治療をさせてからいよいよ対面

そこで、一本の通信が入る

現場にいた局員達との話の要点をまとめ終わるとどっつやちよっど良い頃合いになったようだ

付き添いの局員に、彼が室内に入ってきた

服装も患者用のに変えているようで真っ白なソレ、彼の様子は周りが気になっているのか所々視線が動く

っと、一緒に付いていた局員がこちらに丁寧に報告すると敬礼し下がっていった

視線が合う、「さっきの…?」とぼやいた所で始めさせてもらおう

クロノ「改めまして、僕はクロノ・ハラオウン。このクラウディアの艦長と提督をやっている。…名前を聞いても良いかい?」

「ああ…そうだな」

少し口を紡ぐと少し間があった。それからだ

ストラ「ストラ・イクザムだ。先程からここまでの扱いに一応感謝します」

…ふむ?

クロノ「いえ、畏まらなくてもいい。こちら側としてはご協力して

もらった上に部下も助けられている。それで…怪我の方は大丈夫なのか？」

ストラ「ええ、尋問ぐらいなら問題はありませんよ？」

…やはり来て良かったかもしれない。丁寧な言い方にして分かりやすく毒を吐いている

言葉を選んでいるということだ。それも疑いを含めて

クロノ「別に尋問というわけじゃないさ。」

ストラ「それは言い方を変えているだけ。　　が、事情徴収ということにしておこうか。やる事自体は構わないんでな。まずは何を？」

ひどく疑われているが、この際気にしないでおこう

彼を対面にセットされたソファへ座らせ局員も周りの席へついた

膝に手を掛け、堂々とした身なりで此方を待った

では、始めようか

クロノ「…そうだな、君の出身世界を教えてください」

ストラ「知らん」

少しの間、^{ストラ}彼以外の人の表情が固まった

僕も少し、血圧が上がったような気がするよ

この人は馬鹿にしているのか？

まさか速答で言われると思わなかった

内心想いつつも、彼は何か考え始めた様子で手を顎に当てている

ストラ「地方大陸都市海域などならばともかく、…世界に名など聞いたことがないな」

クロノ「いやそれは……、そうか。…なるほど」

彼の言い方は世界という単語は確かに知っているようだが、彼の居た世界の名称そのものを知らないと言っているようだ

クロノ（ということとは…文化レベルが低い管理外世界から喚びだされたのか？）

いや、わざと惚けてそう言っている可能性がある

この男に油断はしてはいけない

ストラ「なるほど、此処は想像以上に文明というのが発展している

らしい。さつき窓から外を見たが、外は真っ暗なのに蒼い。星が大きく見えた以上雲よりも遙か高い空に上がった所なんだろうな」

クロノ「…その通りですよ」

ストラ「それぞれの星に生体の文明がある。だから世界…といったところか。生憎、此処を見るまでは陸海を渡るだけで文化が違大地を探求するのがまだ一般的だった。空よりも遙か高い暗い空なんて上がれないからな」

宇宙へは上がれない… 局員は要点を押さえてメモを取る

しかしいきなり“知らん”とは…

見事な不意打ち、恐らく二度と忘れないだろう

局員に投げ掛ける質問に対し、上下に頷いて応答している局員もそう言っているような気がした

クロノ「一応、一通りの説明をさせてもらっよ」

疑ってばかりでは埒が飽かない

先の状況から彼がどうしてここにいるのかを理解してもらわないと
事件の事から管理局のこの艦は次元犯罪者を居所を突き止めた

自分達は犯罪者を捕らえる為に部隊を派遣、だが犯罪者は召喚と呼ばれる特殊な魔法の儀式で君を呼び寄せた。

後はストラさんが見たままですって簡単な説明を入れていくとクロノがあくまでも僕が思うに…という。

君の対応ぶりを見た限り、召喚の呼び掛けに応じて呼び出された訳ではなさそうだ。無理矢理巻き込まれたんじゃないかと判断をしているという

二時間ぐらい経ったのだろうか？他にも何度も同じ話をしたり、説明を加えられる。やはりこういった話は長い

ストラ「クロノさん、質問しても構わないか？」

クロノ「ええ、…言ってください」

ストラ「あんだ、苦勞人だろ？」

場違いな発言だが、的を得ていたからこめかみを押さええそうだ

ストラはフツと笑みが表れる。想像していた事態よりもだいぶ斜め上を通り過ぎているなっと

もう、正直どうでもいいのだが…言えない事があるのは確かな訳で…どうやってこの場を切り抜けるか？

どうやら波瀾万丈な人生もいよいよキャパシティを超えたようだ
俺の凶運スキルに磨きが掛かってしまっている事は認めざるを得ない

ストラ「俺個人への詳細は問いにもよるが、お答えする気はない。
だが…、それ以外なら受けつける」

クロノ「それでは困る」

ストラ「俺は故意に人に危害を加える気はない。あなた方が聞きたいのは、俺をどうするかという決定付ける為の材料」

ならば俺は俺の居た世界という情報を言っつてしまえば互いに余計な事態にはならない

クロノ（なるほど、理解はしているが…）

ストラ「クロノさん、さっきから話を聞いている限り俺の居た世界は、あなた方が知らない世界なのだ俺は思っている」

要点は理解したつもりだ。こちらの世界を教えよう
そう言った

……
……
……

実に簡単で深い話だ

予想通り、彼は見るもの全て訳が分からないという。時空管理局という組織も初めて聞いた言葉ばかり。極め付けは次元というもの、そういった所に世界が複数とあることすら知らなかったとの前置きがある。クロノが一つさり気なく誘導的に問い掛けた魔法という単語を口にしたが、彼は何を言っているかさっぱりな様子だった。

彼から幾つか地名などを上げられる。ウォルスという大陸と、ドンドルマなど地方大陸都市と名を上げると、局員がせつせと執筆している

後で局のデータベースに問い合わせる為だ

クロノ「大丈夫か？」

ストラ「そう思つのなら、そろそろ休ませて欲しいんだが…？」

クロノ「…そうだな。調査も明日にならないと結果が出ない。一度区切ろう」

局員に退室の指示を出し重い空気が抜けていく中、彼は席を外さない

局員「クロノ艦長？」

クロノ「君達は先に休むといい。戦い疲れただろう？」

「別のスタッフを呼ぶから後は任せてくれ」
すみませんと申し訳なさそうに退室する
そういつと

ストラ「あーあ…、だりい」

クロノ「そう言わないでくれ」

ゴロンと座っていた姿勢から横になる。気を緩めている辺り、こつちが素なんだろう

先程までの真面目な姿勢が早変わり

ストラ「あんたも少し横になれば？」

クロノ「馬鹿を言わないでくれ、これでも艦長だ」

ふん…と素っ気なくそれだけ言つと視界から電灯の光を遮断する為、手を目の上に当てる

ストラ「真面目だねえ…。けど、結局…俺は戻れないんだろ？」

「元の世界に」

クロノ「……………」

今のは本音なんだろう

眩しそうにその手は遮ろうとしているのに、五本の指の間隔は開きっぱなし

情報というものを当てられた所で…。何を意味する？

何故だか分からない。だが、彼は想像よりも深く思考しているに違いない。クロノにはそのように見えた

クロノ「君は中々勘が良いな。…穏便には済ませたいが、正直判らないといった所だ」

ストラ「だろうな。あんなところにいた前は戦場のご真ん中に居たんだ。まっ…今は休ませてもらうよ」

クロノ「さっき言ってたな…。だからといっても…そこまでボロボロになる程だったのか？」

ストラ「そっ、かなり大事な局面だった」

召喚に呼び出される前は何をしていたか、彼は戦場に居ただけ言
った

その世界も事情があるのだろうと割ったが

彼が不意に姿勢を元に戻す

そしてちょうど頃合いとばかりに扉越しの機器から同員の声が聞こえるとクロノが呼び掛けに応じている最中

ストラ「優秀な艦長殿に一つ言っておこう」

クロノ「なんだ？」

ストラ「管理局に人は無し。隠し事をするならば、あなたは少し自重するべきだ」

キャラ紹介

ストラ・イクザム

推定年齢

18〜20歳ぐらい

身長

179?

体重

68?

魔力の量はC+

詳細

犯罪者の手による召喚によって強制的に喚びだされた男。出身世界は詳細不明。しかし身なりや彼の証言などから、恐らく文化レベルは低く魔法は一切関与がなかった世界からだと推定される

魔導士として素質は大したものではないが、それ以外の能力は非常に高い

特に身体能力はミッドチルダの人間からしてみれば異常を乗り越している

人柄はクールで無愛想。冷静な部分が多いが時折冷めている印象がある。人を観察したり知らないものを見ることが面白いらしく相手を選ばない

何かと戦い慣れており、経歴を話そうとしないのが怪しい

話の限り、彼のこれからの事については難しい

一通り話をして、調査の結果は明日になりそうなので、とりあえずこの話はまた後日ということ、幸いにも開いていた部屋を用意し彼にはそこで休んでもらっている

彼からしてみれば、頭がパンクになりかねないな（こちらもだが）

しかしながら事情はともかく粗方把握出来た

彼の世界では、昔からモンスターと呼ばれる様々な生態と常に対峙しているとの事。生きるか死ぬか、狩猟という事がその世界の中心

51

ひよつとすると、同員を襲ったあのドラゴンにも心当たりがあるかもしれない

…明日聞いてみよう

同員「お疲れさまです」

クロノ「待たせたね。早速頼む」

ブリッジに入るなりクロノは各機関の報告を受ける

艦長室で雑務を削りながらだったが、調査隊が帰還したと通信越しの会話でブリッジに向かう事にした

彼に休憩など殆ど無い

優秀で真面目と言うやつだろう。移動の際にも考察するばかりだ

局員「現場の方からの報告なんです…」

その様子だと得られる情報は少なそうだった

視界一杯に映るモニターを前に話を聞いていくが、ありきたりの報告だ

ただ…

ガジェットの出現は予想外だった

アンチ・マギリンク・フィールド、通称AMFなんて展開されたらウチの魔導士でまともに戦えるのは限りなく少ない

エルリック・ノアの背後に誰か機械に精通した人物がいる、これは

確定だろう

裏があると睨む訳だが…結局の所尻尾が掴めない

局員「保護した彼の持ち物についてですが構いませんか？」

クロノ「ああ、頼む」

局員「はい。技術スタッフに問い合わせた所、彼が戦闘で使われたのは“アンチ・マテリアル・ライフル”ともいう対物狙撃銃に近いものかという報告がありました」

ストラの銃とその狙撃銃がモニターに映し出される

クロノ「形状が全然違くないか？」

いや、明らかに彼の銃の方が大きすぎる

局員「クロノ艦長が訪ねた第97管理外世界、地球の軍隊などが利用するような武器に形状が近いんですよ」

最も、古い名称もあるみたいですけどねっという

クロノ「そっそうか…」

(また、地球なのか：！?)

平然を装ってはいるが、内心は嫌な予感がしてままならない

「次元を移動する航海船はありませんが、あの世界の兵器レベルは中々のバリエーションがありますからね」と追記されているが、：そんな事よりも、その地球という世界での事件を思い出していた

管理外世界ということなのに、あの世界からは局の魔導士を凌駕する程の才能。魔法の才能が非常に優れた人材が見つかるし、そこで起きた事件は並大抵の事ではない。大事件だ

ククロノ・ハラオウンもそのトンデモ事件に関わっていた。二度と忘れられない

その事件からだいぶ年数が経った今現在、事件に関わったその世界の出身者達は局に勤めている。今では彼女達を知らない局員は少ないだろう

彼の銃が対物狙撃銃と認識されたのは形状の大きさからだが、初速と貫通力など威力が高い。銃から発射される弾の持つ運動エネルギーが多大なもので、つまりの所ハイパワーな武器と判断される。

局員「彼のライフルはガジェットを破壊できる程の火力に加え、連射までも実施している事から高性能に違いありませんが、此処のスタッフでは詳しい事まではわからないんです」

クロノ「わからない？」

局員「分解は疎か、引き金が全く動作しないとかで…威力を測れないんです」

クロノ「そうか。しかし…アレは危険だな」

基本的な性能が根本的に高くあつたという間に敵を圧倒する制圧力、
…それに加え彼自身に戦闘技術もありそうだった

「続けてくれ」つと話を継続させる

検証結果から彼を喚びだした機器（残骸）に詳細など残っていないか
った

また、彼からは微々たるものだが魔力反応を感知、聞いた時は驚いた
ものだが…こちらは大した程ではないということ

何故か安心はした

局員が言うには施設で保護をして教育プログラムでも実施したほうが…
というのだが、…それでは彼が納得しないだろう。周りも同じ
意見か、頷いた様子がある

局員「…以上が調査隊からの報告です」

クロノ「そうか…わかった」

だいぶ中間を略かせてもらったが、話をまとめてしまうとエルリック・ノアの行なっていた研究は強力な生態を喚びだす実験。背後関係が分からないがそれらとの繋がりにはやはりあると思う

そして、どうやら暴走した龍は彼を喚びだした機器から同様に喚びだされたらしいのだが、肝心のその機械が消し飛んでいる部分が多過ぎるので復元も出来ずストラ・イクザムという人間を元の世界へ帰すという最も安全な手段が無くなった

……

……

…

局員「…あの人はこれからどうなってしまうんですか？」

クロノ「そうだな…」

ここから先は艦長が判断しなければならない訳だ

モニターを通し、浮かんでくる映像を確認しながらクロノは深く物事を考えていた

時間は既に次の日時を切り始め、ブリッジには殆どの人がサイクルで人員が入れ替わっていた中、艦長の補佐をして、最も状況を聞いている女性の局員が少しばかり浮かない様子で聞いてくる

いや、心配をしているといえはそれもだが、…そういった人物かわからないだけあって不安なのだ

言いたい事はわからなくはないけれど、なるようになるしかない

クロノ「常に最善の選択を取らなければならないのが…管理局さ」

クロノは敢えて具体的には答えなかった

時間には余裕がある

いや、…愚問だ

使命は果たした身だ。船から降ろされようが、特にやる事も何もない

ふかふか過ぎて気分も良くなりそうなベットに寝転がり、部屋にあった書物を次々と目を通していている彼がいた

「ダイエットするならこれが一番 “バナナ ダイエット”」

ストラ「なんじゃこりゃ？」

ちやっかり読書にハマっていた

他にも管理局の人が移った雑誌などがあつたが、まあそんなのはど

うでもいい

そんな事より

どうやら今居る此処は、根本的な概念といふのだらうか？とてつもなく環境が違う気がする

そんな中、今の俺に必要なのは冷静を保つ事と常識という思考のほとんどを切り替える事だ

作りも素材も未知の世界へと招待とは驚きを通り越す
正直困ったものだ

唯一助かっているのは、ある程度の言葉は通じる事とこの船の人達の善意か

知らないといえ今は感謝するべきだらう。不意に召喚される前の事を思い出していたのだ

なにはともあれ“あの場に居たなら死は確実だった”

それは確かな事だ。読書を終えてベットに寝そべる…

そう…あの時、
確かにあの世の中から生を“絶ったはず”なのだ

最後は、戦争という中で終わりだった。しかし…命を掛けて後悔も惜しみも無くやりきった事だ。悔いはない

だからこそ、ここにきてこれからどうしようかその事に迷っていたりもする

だがふと思う…あいつらは無事だろうか？

いや、今頃世間的には死んだ事になっているはずだから…どちらかといえば俺がそこに居ない事でやりきれない事になっているか？

何にせよ、あの世界での俺の存在は死んだも同然

種違いではあるが、割り切ってもらわなければならない

そこまで頭が回ると少しばかり余裕が溢れてきた

恐らく元の世界へ還される可能性はない

その時の気分で良いだろう

ストラ「もう朝だな」

いや、電気というもので天井が照らされているが、彼のそれは元の世界での時間の感覚が覚えているのだろう

あの世界と此処では若干ながら時間がずれている

と本当に小さいものだが足音が聞こえる

呼び寄せ音なのかブザーが鳴る

用があるのだろう。扉を開けると社員が待っていた

ストラ「おはようと言っても良いのか?…この時間帯は」

社員「そうですね、おはようございます。…ストラさんの世界には、こちらと共通するものがありますね」

ストラ「全く以て助かるな。何か御用か?」

社員「朝食の時間帯なのでもし良ければ食堂へと案内をと、クロノ提督から指示されましたので…」

ストラ「それは助かるな。しかしながら、気を効かせてもらってすまない」

社員「あっいえ、けど…話の分かる方で良かったです」

ストラ「それはお互い様という奴だ。
頼む」

んじゃ、宜しく

社員「はい、ではご案内します」

食堂へと着いた先、出された料理は見たことないものですがえ美味
かったりする

その後CICやブリッジとも呼ばれる主に戦闘情報などを中心にと
いった場所か？そこに呼ばれるとクロノ提督やスタッフが待ってい
たようだ

クロノ「来たか、
では話をしているか？」

ストラ「ああ、大事な話なんだろう？」

見れば分かる…。何かを操作している社員の手より視線が集まっ
ているようだ

クロノ「そうだ、まずは昨日の件だが…すまない。これまでの段階

で元の世界へ還すべきだと判断していたが、君の帰る手掛かりは何一つ得られなかった」

一通り分かりやすくモニターを表示させその反応は曖昧だった

ストラ「……………」

だが、映し出される映像の一端にストラの目に引っ掛かるものがあった

この艦はいつまでも同じ場所にいるわけにもいかないから一度本局へ戻らなければならぬ

そう聞くと、…まあそりゃあ仕方ないだろうなと吐くストラ

ストラ「ということは俺はあそこに降ろされるといふ事でいいんだな？」

クロノ「いや話はここからなんだ」

ストラ「…なにか他にあるのか？」

この時、少し間があった訳だがストラの観察眼からはやはりということもなんと話にくいと…何となく予想出来た

クロノ「君の持ち物も少しばかり調べさせてもらっていたが、各機関の報告によると確かに昨日の話の信用性にはとりあえず十分な物

だと判定された…だから、君を降ろすことは出来ない」

ストラ「いや、…そいつは随分と勝手な話だよ」

クロノ「時空管理局は次元世界の平和を守る為に古代遺産“ロスト
ロギア”の回収、そして管理をしなくてはならないのが主だ。」

ストラ「それで？」

クロノ「君をこのまま放置出来ない」

なんとも言えない間があった

イレギュラーな出現に加え、おそらく君は“ガジェットと渡り合えるほどの力が有る”

そんな人間は何かしら世界に影響を及ぼす可能性が高くてね

時空管理局としては君をほっておく訳にはいかないんでね

そっとう解説が追加される

ストラ「…それで、このまま拉致りたいと？」

クロノ「嫌な表現だが、仕方がないんだ。
のまま一緒に来てもらうよ」

悪いけど、こ

ストラ「はいはい」

「……………」

皮肉を言っているくせにやけにあっさりしている彼の返事に局長は不思議に思う。それぞれが顔を見合わせたりしている様がある
それもそのはず

クロノ「……反論を建てる気もないんだな」

この男は真面目に話を聞いているのか？

何かしらの文句を想定していたのだが、この男はよくわからない

ストラ「組織に何を言おうが結局、正当化されるからな」

クロノ「そういう訳じゃない」

ストラ「いや、貴方は根本的な管理局の概念という奴に添った組織の人間さ」

クロノ「だからどうしたんだ？」

ストラ「俺を放置する事が出来ない。なら…どうするんだ？」

クロノ「…君を保護施設に入れようかと思っている」

ストラ「驚異的で放置出来ない奴を？あんだ、確かにそういったよな」

この場合は、保護じゃないだろ？と思わせる言い様

クロノ「…何が言いたいんだ？」

(…まさか)

周りの局員が何を言っているのかわからない様子だが、ストラだけが一人笑みを見せる

ストラ「艦長殿は、」

「俺をどうしたいのかな？」

当て付けられたその問い

まるで意図を察していたようだった

賢い奴だ

クロノは本当にそう思った

彼を自室に戻らせた後、今後の為に“少し前から始めていた”手続きを済ませておく必要がある

ふう……と一息つける。少しだけ気が楽になったようで、とりあえずまだマシな展開になった事に安心感を持ったようだった

局員「まさか勧誘なんて意外でした」

艦長としての判断かもしれないが、クロノ・ハラオウンは提督でもあるのだ

言ってしまうえば簡単かもしれないが、それ相応に威厳を損なうかもしれない。

生半可な判断で言うべき事ではないはずだ

クロノ「僕は言ったろ？最善の選択をしなければならぬ」と

間違っただつもりはない

半分は直感混じりだが、信用しても良いと思っっているし、彼の能力とは想像以上かもしれない期待がある

動向を探ったような質問をさせてもらったが、意外にも判りやすくかつ啞然もするような返事なのだが…

これまでの対応から怪しさは十分だったが…察しは何となくだ

何とも呆気にも正気か？と思わざるをえない返事だった

「なら今後の事だが、仮に艦からこのまま降ろされたら君はどうするつもりなんだ？」

だが、その返事は本気で言っているようにしか聞こえなかった

「適当に狩猟生活」

…どうやら後の人生を適当に終わらせたい言う

此方としては魔導士相手でも戦えそうな実力が有りそうなのが目の前にいる、だからこれは物凄く勿体ない個人的な感情があった（しかも一体何処でそれをするつもりなんだ？）

呆気になりそうだが、その後

基本的に彼は管理局に対し危害を加える事も邪魔する気もないと言
つてきている

しかし既に彼の中では管理局に対しての印象は態度でわかる通り良
いとは思っていないだろう

そこを疑ってもいい

だけど、彼は一言に

ただ、管理局が何かをしてきた時は話は“別だ”

重みある一言。そこには、グットきた

バトルセンスだけの意味ではなく、この男は根本的に“強い”

人材としては刺こそあるが、確かな能力を持っていると確信を得ていた

また、絶対に放置してはならないとクロノの直感にはあった

クロノ「一つ、聞いても良いかい？」

なので、聞いてみよう

ストラ「なんだ？」

クロノ「それは保護をしたのが“管理局だから”こそ言っているのかい？」

フツと彼は笑んだ

ストラ「安全策は元の世界へ返す事。これが出来ないなら俺は別の組織でも同じ事を言っているだろうな。…貴方はこれが聞きたいのだろう?」

やはり…！下手に出来ない

それなら誘う決心をするのには十分だったが、流石に何を言いだすかは察しられていたようだった

ただ、契約をしたというのだろうか？

言ってしまうえば約束事を作った

主に約束事を破る時は約束を破られた時だ

ストラは管理局に入る。そして法通りルールに習い世を学ぶ…つまりこの間なら監視も出来るし彼の能力にも期待は出来る

クロノは、管理局にいる間ストラの生活保障。そして限度の過ぎない可能な要望は応えてもらえるか検証する

主に生活面での事だ。少しクロノの方に負担があるかもしれないが、彼は事件に巻き込まれ帰る場所さえもないし

先の話でストラの方が優位に回ってしまったからだ

こればかりはどうしようもないのだが、限度ならちゃんと考えてくれるそうだ

クロノ「それじゃ後を頼む」

少し思考に更けていたが、やがてブリッジから出ていく

色々考えさせられたもんだ

例えば…

…そもそも彼は管理局を全く知らない世界からの出身に違いないので、身寄りがない彼は何かと不都合

施設に入ればそれも解消されるがあの様子だ。まともに過ごし、期間を過ごす選択肢を確実に取る

僕としてはそっちの方が困ってしまう

施設に入った所で管理局としてはあまり意味がない

問題さえなければ何かと素直に応じてる彼ならば確かに危害は出さないだろう

しかし、何を考えているのかわからない

悪意はおそらくないだろう。そう信じたいが、どうもあの男は
“組織”というものに詳しくすぎる

今だにだが、クロノはここに引っ掛かっているのだ

あの男の発言は一辺皮肉にも聞こえかねないが、複雑な内容の中、
しっかりと見極めている

それを何故か誤魔化しているのだ

おそらく彼は元の世界で組織絡みに関わっていたか実際入っていた
か、そう考えられるのだが

それを踏まえるなら、彼の行動は現実を受け入れたかなり慎重なも
のだと思う

組織に反抗してみる

たった一人の人間の力など底が知れる

だから下手に手は出さなかった

そして、あくまでも素生を話す気はないと現状もそう言っている

意外と…面白い事を言っているかもしれない

ここも違う見方をしたら

少なくとも

彼は嘘をつく気はない

知らない世界からの来訪者だ。管理局がわからないなら嘘を偽造するのにも有りな話だ

その気になれば嘘でもつけばいい。

だが、話すつもりがない。嘘をつく気もない

彼なりにこちらの事はある程度理解しているにも関わらず、はっきりと言った

思えばここがキーかもしれない

管理局という組織を嫌っている訳ではなさそうだ

管理局の問いに答える必要は本来ならば何もない。だが、それではいつ切られても仕方ない。だからある程度を話す事によってそれを回避しようとした

俺の事については検証するな

これが本音だろう

理由がわからないが、人の素性を調べ挙げられるのは嫌らしい

僕の都合の良い解釈の仕方なのだが、彼はそういう人間なのだと
思う

だが最低限のルールは持っているようだった

決して悪い人間というわけではない。そう言う意味でだ

だから僕は彼を信用する方針で彼を誘ってみた

中々勝手な解釈かもしれない

艦長室に戻るとクロノは作業を再開しながらまだ考えに更けていた

しかしながら驚いた。まさか、読心術でも心得ている訳じゃあないよな？

端末を弄りながら本当に気になっている様子だった

ストラは話の動向を読んだかのようにこちらの言いたい事を見事に理解し、的確にこちらのその意図を突いてきた

彼が“管理局に入れてくれ”ならこちらとしては都合が良かったのだ

それなら管理局は彼から色々と思つように聞き出せる事も可能となつたはずだから

しかし、彼は思わぬ先手を打った

いや、侮っていたかもしれない。こちらが下手に喋り過ぎた

あのナリで決して話を聞き逃してはいなかった。…それだけだいが状況を把握していたのだ

急遽“管理局に入らないか？”という形に成らざるをえなかった

まあ…少し惜しい事をしたが、管理局にいるなら何れはわかる

彼が了承してくれたなら報告関係は少し重いが後の事を考えるなら何かと都合は良い

本局で彼の発言から出身世界が掌握出来なかつたら本当に管理局を知らないということが良いと思う

管理局は毎年人材不足だ。少しでも能力が高いと見え安全面を通すなら誘ってみる価値がある

今の彼は何もする事、したいことはおそらくない。このような形になっただが局に入ってもらえるなら話は別に出来る

そもそも彼は事件に巻き込まれた被害者なのだ

とはいえ…何もかも思い通りにはならなかったのだが…

ストラはやたら印象強い

クロノはかつては執務官に就いていたが徐々に個人に対し物事を考えていた

直感的な所もあるのだがそれだけの価値がある男のような気がして仕方ない

本当に直感混じりだ

クロノ」をてて…どうしたもんかな？」

視点 ストラ

アレから…あっという間な日時だった。今では色々と学ばせてもらっている

同員に一声かけられた後、せっせと地味に幕でお掃除

掃除を終わらせると、勧められて通うようになった資料室へと移動

する

ペラ…

静かにただ独特の臭いが漂うこの資料室にて彼は勉学に励んでいた

ストラ「……………」

今は局員が2人カタカタとボードを鳴らしているが、様子も兼ねて

だろう

時間が経つ毎に局員が1人入れ替わっているのだ

定期的に様子見なのかさりげなく局員が近くに居る

だが、…そんな事は知った事じゃない

ペラ…

20:00前と言った所か？一息つけると槩を挟み本を閉じる

そろそろ此処は閉まるはずだ

読み終わった物は元に戻し、それとは別に腕に抱える物があった

最初に来たとき一通りご丁寧に説明されたのだ

部屋で読む分の資料を抱えて局員の前に持っていく

ストラ「十冊、借りるぞ？」

局員「そんなに読むんですか？」

ストラ「興味深いからな」

とはいえ、何も全てが気難しい物ではない

表紙に初めての…や、素人でも分かる…が書かれたものばかり

…少し胡散臭い

クロノ艦長から一般的な局員の仕事を聞いてみたら主にデスクワークと聞き、おそらくは自分が前にいた世界の中心の組織が一般的雑務を行なうようなものなんだろうと…資料室を紹介され今に至る

すれ違う局員に「お疲れさまです」と軽く頭を下げながら一声掛けていくとやたら嬉しそうに返事をされる…

…なにか良い事でもあったのだろうか？

自室に戻ると再び読書に励む事にした

…中々どうしてか、世界が違うだけでこつも変わるの面白い

そういえば…

魔導士試験という

実力をランク事に分別する為の試験を受ける事が決まった

とはいえ…魔導士としての適性は大したことがないらしく、武器も法で使えない事を伝えたら、…Cランクを受けてみてくれと

何かと魔導士ランクは持っていないと危険とも判断されかねないし、出世とかにも関わるとか…

…激しくどうでもいい事なのだが、断るわけにもいかない

与えられた課題をクリアすれば良いわけだが…万全ではないということとは変わらないだろう

それと一度武器のオーバーホールをする必要がある

中でも対物狙撃銃とよくわからん名称で呼ばれた

Hボウガン“ミラーージュ”（ヘビーボウガン）

こいつは一度バラさないと使い物にならなくなってしまっ

手持ちの武装は完全なカスタムタイプにデリケートな作りばかりなので替えの代物があれば良いのだが…

あの時のままなので、随分と無理をさせ過ぎた。元の世界へ帰れない以上先を踏まえて、また新たな武器でも考えてみるか？

幸いにも借りた本の中にはデバイスという物の作り方が書かれた本がある

タイトルは

素人でも簡単に作れるデバイス

この世界でデバイスというものは広い幅で使用されやすいと聞いた
そうだ

折角だから返してもらったポウガンにデバイスの機能を付けられる
か検証しよう

ポウガンの設計、改造が出来るのだ。本を参考にすれば最低限…、
非殺傷設定というものぐらいはなんとかしてみようと思う

やれやれ…細かい所をチェックしていると限りがない

何かと忙しかったその身、今では少しのゆとりが持てそうだ

一段落ついた今なら…

ゆっくりと、時間を掛けられる

ストラ「……ベルカ式カートリッジシステム？」

本を見たところ杖や近接武器に薬莢？

当たり前だがわからん事が多いな

だが、分からなければ聞けば良いし調べれば済む事だ

これから先の暇つぶしには何かと困りそうにない

見知らぬ環境は発見が多い少しの間、時間が必要だ

5・5 新規文

永遠と続きそうな宇宙空間を航海している戦艦クラウディアの旅は
そろそろ目的地へと到着するらしい

未だ地に足がついた感じがしないが、粗方の基礎知識は学んだはずだ

読み書き、簡単にだが用語の意味は勿論：局内で用いられそうな所
まで頭の中にたたき込む

艦内で会う局員とはそれとなく会話をしたり、書物を読みわからん
ところは尋ねた事もあった

主に情報が必要だった

それだけに艦に置かれた不動の時間を情報と知識に絞っていた

知識に関しての記憶力ならそこまで問題はないはずだ。何故なら此
処は必至

必要な知識を覚えるという工程に当てはまり、理解も何も初見が殆んどな上に死活問題にまで影響しかねない面がひよっとしたら心理的に僅かでも揺さ振っているのかもしれない

此処だと今まで以上に勝手に判らない事から今までに得ている知識（記憶力）を元に更に学ぶ

…、思った以上に定められた法という面倒なルールが多い

更に拍子を掛けるがの如く、印象付いた

この管理内世界に関わっている中、局内には安全と保護に関わってくる内率も多々数

ロストログア（オーバーテクノロジー）という危険物の回収し封印、管理をするという役割を兼ねた国家公務員紛いな管理局たる組織は中々に腹黒い定めを内に潜め、“正しい”としている

やはり確かな力、組織力というものがあつたようだ

幾ら影で管理局のこれを叩こうとも、人心や金も得り管理局にはそれを為すだけの力（戦力）というものがあり、他世界へ対する抑止力又は強制力が非常に強く弾圧が可能な事であればあるほどこれほど厄介な組織はそうはないだろう

特に文化に差がある世界が良い

自分達の特権と均衡を保たせ強固なものとする“魔法”というもの
“実力” “人心” に“金”

魔法というものが希少らしく、また便利で強力な潜在能力らしく管理局は管理下の他世界よりも魔導士という、優れた猛者を保有して可能性が高い。他世界へ強い顔が出来るのもやはり、強さと人心技術力。拳げ句の果てには管理外世界へと接触を禁じているとのあるが例外も然り、魔法を公には出さない。しかしながらロストロギアなどが関連する場合は極秘密裏に介入、接触した場合には圧力を掛けるなど…

管理局のルールには何処か腑に落ちない矛盾が生じ、それが管理局という組織を強め、その定義が彼らの中で当たり前になっている

自分たちは正しい事をしている

心酔している輩も少なからずいる。主に図としてはこの辺りが妥当なラインだろう

おっと、いかんせんどうでもいい事に思考していた

正直それが俺に対して障害をもたらさなければどうでも良いのである

完全に他者に間違いない俺という存在でも、それだけの管理局のルールという奴を守ればその監視下の中でも問題なくやっていけると
いう事を理解したと持ち上げておこう

案の定クロノ・ハラオウンが承諾した契約というものは此方が優位に妥当だった、であり不審に思っていた管理局の内情には人手不足という言葉が当て嵌まっていたのにも裏付けが“情報収集で取れた訳だ”

そういう管理外、管理内世界などがある以上多くの人手を費やさなければならぬ事情という奴だ

俺個人についてそんな契約が通ったのもそれも一部ある現状も少なからずあるのだろう

元の世界ならそうはいかなかっただろうに

自室の驚くほどフカフカなベッドの上で寝転がりながら手にしていた書物を側の棚に置く

実は暇で仕方なかったのだ

何故ならば、この艦は簡易的なトレーニングルームというものはあったのだが、精密な機器が多く、知らぬ内に動き回る事は馬鹿みただと思っていた

少なからず一応は救助？保護？されている身分故に面倒事になりかねない運動は控えていた

“運動”を誘われた事もあるが控えていたぐらいだ

常に見られている視線というものへ見せつけるといふ事をするのは後先、良い事にはならないということを経験していたからだ

そして…漸くもこの戦艦での暮らしに終止符が打たれる時がやってきていたのだった

彼らの星、ミッドチルダへの経由衛星ポート、或いはは宇宙警備軍とでもいったら良いのか？

まもなくだが中継地点へ到着したらこの艦内での暮らしは終わる

放送も時折発せられているから窮屈だった今は、今よりマシな環境へ移動させられるだろう

軽く背伸びをしたら身なりを軽く整え、借りていた書物を返しにオートドアが勝手に開き部屋から出る

足は下に付くが宇宙は重力が軽い空間らしく通路も影響している。

手すりのベルトコンベアに引っ張って貰いながら資料室を目指した
のだった

艦は中継地点なる宇宙での本部へ到着し、ドッキング

クロノ・ハラオウンに呼ばれて艦から共に降りて、彼の提督の執務室へと一緒に行くこととなる

無論、魔導士試験や此処への就職関係、生活 e t c だろうが、試験の方だろうな

クロノ

「さて、ストラには前もって伝えていた魔導士試験を此処の施設で受けて貰おうと思っていたんだが…」

ストラ

「確か武力の総合力を測る H R 試験みたいな奴の事だったな」

クロノ

「まあ…試験なんだが…、少し艦の到着が遅かったんでね。此処での試験関連は既に終わってる。到着早々で悪いんだが…その、な

んだ」

ストラ

「予定通りにいかないのはよくある、気にはしない。…で、…なんだ？」

クロノ

「ああ、地上即ちミッドチルダで魔導士試験、適正な試験を受けて欲しいんだ」

既に試験は受けさせる根回しはしてはいるが、これが又地上と宇宙で一悶着あってね…

ああ…関係悪いのか

察したつもりだが、多分当たりだろう

ストラ

「それはどう回れば良い？」

クロノ

「それについては案内を頼んであるが何しろ地上は僕の管轄外だ。ひよっとしたら人事的な問題で君は地上勤務になるかもしれない」

ストラ

「おやおや？提督ともあろう方が、お気に掛けていらして……。特別、俺は大したことなど出来る訳がないとは思っているんだがね？」

クロノ

「君は口は達者らしいな」

ストラ

「そりゃあザル並みにイケる口だ」

クロノ

「フツ…まあ聞くの良い。僕が思う限り、君がクラウドディアで資料を元にこの世界の事に触れていても、この環境に君は少々浮き出るだろう」

だろうな、しかもやはりかつてない程に

クロノ

「一刻も早い魔導士ランクの確保を優先したいというのは此方側の都合といえ…正直なところ、大丈夫か？」

いきなり放り出すかのような状況に詰まっているのかは知らん

だから言ってる

ストラ

「全然？ いきなり総務を任されるより遙かに気楽な身分だよ」

クロノ

「何処までが冗談やら…」

ならばよし、クロノが纏めたファイルをストラへ渡す

クロノ

「君ならCランク試験を合格出来るものだと思っているが、とにかく受かっておくと良い。今後の為になる」

ファイル一式を受諾した

ストラ

「礼は言わんが配慮どうも。これは一つの恩として借りておこう。何れは返すつもりだから覚えておけよ？」

クロノ

「ああ、覚えておこう。此処まで礼儀のなっていない局員はそうはいないからね」

ストラ

「管理局員の証明を貰えば、相応な態度はしっかり分けるさ」

クロノ

「ああ、成る程：確かにそうだろうが、公の場でなければそのままで良いさ。君は中々面白い」

退室しながら吐き捨てられたのが“面白い”か

どいつもこいつも同じ事を考えるんだな

ストラ

「考えておこっ」

ミッドチルダの朝は今日も快適な晴れ

無事に局入りしてから2カ月程経っただろうか？

階級は二等陸士

配属された先は研修として地上部隊へ

魔導士ランクはC

少しばかり気の効く一般的な局員

これが俺の肩書きだった

だいぶミッドチルダでの寮生活に慣れた頃だ。正直言っつたらまらない

毎日が雑務、デスクワークばかりで椅子に座っているほうが長い時がある

つまりは非戦闘員としての日常を過ごしている

地味だ…平和なんだろうが、毎日が雑務

言葉を借りるなら…

かったりい？

時々クラウディアのクロノ艦長から通信を掛けられた事もあったが、最近ではそれもない

茶を頂いて、またパソコンと面を向くと不意に窓へと視線を移す

ここは一階、外は演習場
小隊で訓練しているのが見えるのだ

時折魔法を使っている様子が見られるが、その事に深い意味は特
ない

何か思うならやはり俺も丸くなったものだ…

普通ならCランクの魔導士でも訓練に入れられるのだが、どうやら
雑務の方で気に入られていたり当初からこちらの方で徹底的に

指導をされていたりする

まあ…組織は違えどこういった事は融通が効いていたのが幸いだ

自立したという表現は微々たるところかもしれないが、たったそれだけの一言で仕事をしている方には分かってはもらえるかと

つまりはそれに似ていると

まあ…前科がだいぶ通用している事があっての今現在だ

何故ならば……いや、やめておじう

そついう気分ではない

案外、今の生活には結構ブルーだったりする

そろそろ暖かい季節になるらしい

しかし、充実感には欠ける。なんだか寒い日常だと思った

仕事の方は？

いや、今では時間が余るから特に問題はない

大事な書類をまわされる立場ではない訳だから

気楽なもんだ

我ながらなんといい順応性の良さなのだろうと思っていたぐらいだ

ストラ「…うし、出来た」

後はバックアップに完了届けを出して…

先日起きた小規模程度な犯罪に關したやつだ。他の局員から貰った報告書をまとめた

局員『ストラさん、失礼します。部隊長がお呼びです』

不意に目の前に簡易モニターが映し出される

よくある事なので今では見慣れたもんだ

映像有りのモニター通信って奴だな

ストラ「了解、すぐに行きます。ついでにこの間の課題も持ってきてきますとお伝えしてください」

社員「わかりました。お伝えしておきます」

モニターがプツンと目の前から消えるのを確認すると、軽く背伸びをしてから今さっき終えたデータ、そして書類を封筒に入れて室内から出る

ストラ「失礼します」

ガラリと中に入ると思わぬ人が居た

部隊長「おお、待っていたよ」

…さすがに敬語にもなるのか？

この部隊長はいつもは豪言、威勢が良いんだが、この時は違った

まっ、最初だけだろう

それよりも…

クロノ「やあ、元気にしてたかい？」

何故か、何か話をしていたのかソファーに座りながら優雅に珈琲を啜っていた艦長殿が居た

いやクロノ提督とお呼びしたほうが良いのかな…？

ストラ「あんだ、忙しいんじゃないのか？」

部長長が何やら失礼だぞつと注意をしたようだったが、「彼とは面識があるんです。構いませんよ」と紳士的な対応をする提督殿

実の所、クラウディアに厄介になっていた頃、ちょっとした事から話し相手（愚痴やら他視点的な意見など）になっていたりする

クロノ「君に用があったね。わざわざ直に出向いた所さ」

「おっと、まずはCランク試験の合格、おめでとつ」

と皮肉にも聞こえかねない事を言われた

その時はコミュニケーションを兼ねてもだったのだが今はフレンドリーらしき傾向に傾いているようだ、

ストラ「ああ、お陰様で…予想外だったがなんとかなったよ」

あの時は杖を借りて試験に出たが、ひどい有様だった

素人が使おうなら思っようにならないのが当たり前

そもそも杖など使い方が判らん

試験官から有効なアドバイスを聞き、結局は総合力を測る為だと思っていた為に油断があった

射撃が出来るらしいが魔力というものが今一分からなかったが故に纏わせる事は出来た

その時に気がついた

ククロノ艦長殿の言うとおりだ

杖を鈍器へ運用するも、そこには微々たるだが確かに見せたはずの技量を評価されなかった

最終的にはスフィア相手に接近戦に持ち込み、ぶん殴ったり周りの障害物で攻略

制限時間をフルに使い、戦闘を楽しんでいた事も原因だが、これも周りからしてみればかなり苦戦してるように見えたのだろう

そうではなかったのだが、課題はギリギリのラインで必要最低限は達成してるとの評価で留まった

試験官の、魔法の使い方が最もマイナスイメージらしく評価は最初からどん底だったのは口頭で直に説明された時は内心冷めていたぐらいだった

…本当にひでえ

お陰様で、此処に移動となつてからは。そういつたデータが送られていたようで…デスクワークばかりにまわされていた始末だ

思考を切り替え先に封筒を部隊長に手渡し、仕事が早いなどそう言われる

ストラ「それで…部隊長は、何か御用で？」

部隊長「いや、クロノ提督が君に用があるんだよ」

際ですか…

やはりあんたか…

クロノ「僕は先に言いましたよ？君に用があつてねつと」

ストラ（ああ…さっきも聞いたさ）

第一貴方を見た時点で何かあるとは思つたさ

じゃあ……後の事は

ええ……特に問題はありませんよ

さりげなく打合せていたようで、簡単に短縮化された会話だけが見られる

言う前に…何をしたいのか、よく“解った”

ストラ「

“込み入った用ですか”」

クロノ「ご名答。早速で悪いけど移動しようか」

ストラ「…了解。」

たかが一般的局員扱いの俺に何用だ？

部隊長「詳しくはわからないが、頑張れよ！デスクワーカー！」

グッと親指を立てているのが様になった部隊長

すげえ意味のわからない呼び名だな

内心でしらけた

少しばかり惜しいな…と退室際に見た顔つきが印象的だったが、
…やれやれ

中タイカスな乗り物だ

世間では地上を走る車と呼ばれるものだ

前を見ながら運転しているクロノに対し、その隣では端末を操作しているストラ

何をしているのかという数日前に手作りで作ったデバイスの設計図を見直し、編集しているのだ

クロノ「たった数ヶ月でよくそこまで順応出来るな？」

ストラ「別に、ただ持ってきた武器にアームドデバイスとしての機能を付けようと見積もっているだけさ」

インテリジェンスデバイスというAI機能が付いた種類もあるらしいが、あまり必要だとは思えない

だが、今やっていることは無駄かもしれん。デバイスは正直精密機械過ぎて無理があるだろうなと思っていた

それよりも給料をもらってからは暇さえあれば調べ物が多い

街へ買い物をするようにもなったし、何軒も回った事もある

当然、徒歩で

おかげでなんとか自作の方のデバイスはなんとか出来た（ついでに所持金もだいぶ減少）

まだ本格的な起動テストはしていないが、杖を使うより遥かにマシだ

ストラ「そんな事より随分と強引な手際だな」

クロノ「まっ、それ相応な用件だよ」

決して暇じゃないんでねっとかクロノが言ってしまうとあっそ…っとか
適当に流す

ストラ「わざわざ場所を変える程の用件か？」

クロノ「いや、お昼を済ませてなくてね。そろそろ頃合いだろうっ？」

街のレストランで用件を話す事にしよう。そう言い出した

……

……

…

そんな人事は全く持って疲れるレストランでの会食近いものとなった

クラシックな音楽だけが響く中、ストラは視界を閉じながらこう思う

ストラ「だからって特別席にするなよ……」

クロノ「ん？僕はてっきり慣れていると思っていたんだが？中々上手じゃないか」

食事マナーをより一層強いられる環境

ガッツは似合わない

着いた先はたかが定食なのだが高級が付くところだった

ストラ「…それで、話は？」

少し強引な様子だが、話題を変えさせてもらおう

食も中々な美味しさだが、本題に入ってもらわないと完食してしまう

クロノ「用件というより頼みごとかな」

箸を置くと両手を目の前で合わせ、真剣な風格が現れる

クロノ「近々、新生の部隊が配置されるんだが…コンセプトの条件下、人手が限られていてね」

エキスパートを取り揃え且つ事件への迅速な対応、そして解決。少数による実働部隊の配備

これまでの経緯と俺自身、これからについての話だ

畜生な提督殿は“ヤガミハヤテ”という人物からの要請

もうすぐ“機動六課”という特例の部隊が新設で2日後、新しく立ち上げられる。そういう事でそれに伴い人手を（特に目に掛かった人材）揃えているとの事

本人である部隊長が戦技教導官といった方などと共に人手を揃えようと様々な所に掛け合ったりしていると聞いた。提督とはパイプがあったのか、先に知っていたかどうかは知らないが、関わっていたらしい

相次ぐようにそれを聞いていた

クロノ「どうだろう?」

行ってみないかい？

そう言ってきた

ストラ「意図がわからないな。矛盾にならないか？俺は魔導士ラン
クCの一般局員なんだが…」

背もたれにかかって、両腕を組み始める

…なんとなくだ

クロノ「君がこちらの世界へやってきた時、交戦した機械…あれは
ガジェットというんだ」

機動六課が最も対応するだろう障害でね。厄介な能力を持っている
せいで、大抵の武装隊では有効な手段を持っていないんだ

クロノ「そもそも、魔導士ランクCが倒せる相手じゃなくてね。
君みたいに」

ストラ「ふん…まっ、いいさ」

「どうせ断ったところで、既に話は粗方通してあるんだろう？」

クロノ「ふっ、そういふ事さ」

ストラ「馬鹿真面目な奴め」

クロノ「君も結構真面目に働いているそうじゃないか？」

ふふふふ…

少し怪しい笑みを晒し合っている中、ストラはウインナーを…フォ

ークでブスリと刺す

ストラ「飯が美味けりゃ…構わんさ」

ストラは頬張りながら食事を再開した

ストラ「普通そこは命令だろう？」

クロノ「本意を聞きたくてね。その様子だとあまり関心が湧かないらしいね」

ストラ「事件性はあるんだろう？ “その様子” だと」

食事をしていたクロノの手が止まる

ストラ「なに、考察だけに止めておくさ」

少し間を置いてからだ

クロノ「やはり優秀な人物らしいね。君は」

ストラ「さあ？それは貴方の価値観によるものですから」

クロノ「なら六課の部隊長にも判断してもらったか」

ストラ「？」

「なに、いつも通りにしてくれればいいわ」

それだけ言った

今は列車という交通機関を利用して移動している

外を大きい窓ガラスから眺めると、どうやら森林を抜けたようだ

これだけの長い物体がよくもまあここまでの速度を出せるもんだ

内心、ミッドチルダの技術力に感心した

荷物等はすぐに後日六課に届くだろう

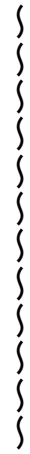
快適な乗り物ばかりだ。どうも最近はそう思っただけ

以前は徒歩か、引き車が主だったからな…

まっいいさ

六課に着けば、おそろく忙しいだろうに

機動六課本部隊舎のロビー



そんなロビーに集まる機動六課部隊員にスタッフ達

挨拶ともいえる式が始まった

はやて「機動六課課長、そしてこの本部隊舎の総部隊長の八神はやてです」

視線が集まる中、淡々と言葉を告げる

はやて「平和と法の守護者。時空管理局の部隊として事件に立ち向かい、人々を守っていく事が私達の使命であり、やるべき事です。実績と実力に溢れた指揮官陣、若く可能性に溢れたフォワード陣。それぞれ優れた専門技術の持ち主のメカニックやバックヤードスタッフ。全員が一丸となって事件に立ち向かっていけると信じています」

「まっ長い挨拶は嫌われるで以上ここまで。機動六課課長及び、部

隊長八神はやてでした」

そしてロビーは拍手に包まれ部隊員及びスタッフは、はやてに、そして部隊に拍手を送る

そんな中、出口から近いスタッフの中に（後方）紛れてストラもゆつくり拍手を送っていたが…その様子は六課へ来たばかりの頃と比べて気分は下がり気味

いや、そうなってしまうのも仕方ない

つくづく自身の必然とも言わざるをえないトラブル體質を呪った

いや、恨むなら鬼畜クロノ提督にしておこう

つかさ…寧ろ三十分前にはちゃんと六課に着いていたさ…（しかも駅という交通機関まで使って）

だが、いざ着いてみるものの、チェックにストラ・イクザムの名前自体がないと言われると困る訳だ

元からなかったようなので再確認と口論していた所に、一人の女性がやってきて事情を聞いてきた矢先、こちらの話を全く聞いていない上に怪しがられた。

その若い女性の方に

「少しこちらに付いてきてください」

妙に鈍りのある言い方が印象だった

一般的に身振り手振りですべていくつもりが、いきなりやってきて
そう強制連行された時には焦り（困る）を覚えた

しかし彼女が部隊長の八神はやてだったことには連れていかれた後、
わかった

式が始まる前に部屋へ連れられると彼女が席へ着く。それでクロノ

提督殿から聞いていないのか？と更に要点を言ったら急に慌てて確認を取り始め、そこで漸く事態を把握したらしい

そう、確認をした彼女が

“八神はやて”

本当に驚いた様子だった

とにかく話は後でしますから、ロビーに移動して下さいとその場で半分謝り気味で解放された訳だが…

ロビーに着くなり

視線が物凄く痛かった…！

いせ、いじつまでまじつじつ思考は止めよう

らしくない

と

ふと、それぞれに並んだ人達へと視線を移す

……あれ？おかしくね？

部隊の八割ぐらいが皆女性のような気がするんだが

全体的に男を数えた方が明らかに早いという事について何なんだ？
この部隊は？

柄じゃないが、突っ込みたかった

ふと周りから視線が刺さる

つか疑惑擬いに発展しているようだ

おい…ちょっと待て

俺は悪くないはずなんだが！

なぜか浮き出てしまった

そもそも以前にも似たような事があったような気がする

やはり奴だ。こんな不十分な手配をしたクロノ・ハラオウンの不手
際が今回を起こした

それから式はあっという間に部隊長が終わりを告げたのだ

クロノ…いつか」

~~~~~

部隊長室

はやて「本当にゴメンなあ」

ストラ「いえ、構いません」



はやて「そやかて…突然ああいう扱いを受けて驚いたんじゃあ…」  
ストラ「不意ながら多々ある事なので、あまり気になさらないで  
ください」

先程の話の通りに伺いに行くなり入るなり、部隊長“八神はやて”  
は至って年頃の女性、喋り方に特徴があるのが印象的だった

はやて「リイン軍曹、クロノ提督に通信を入れてくれへんか？」

リイン「了解です」

ストラ「…」

小さいな…何の種族だ？

などと思っていると通信相手、  
督殿がモニターに映る

またもやクロノ提

クロノ『やあ、はやて。式の挨拶は無事に終わったかい？』

清々しく何事もなかったかのような口調だった

はやて「うん！式は無事に終わったんやけど。クロノ提督、…スト  
ラさんの事だけどウチで預かってもええの？」

クロノ「ああ、彼の場合は特に形としては問題はないだろう。…た  
だ、彼はまだ世界観に馴染んでいないから色々教えてやってくれ。  
詳しい事は送った資料と彼から聞いたら聞いてくれればいい』

後、素でも良いからな？とついでに言っていた

はやて「うん。…でも、クロノ君が推薦まで出すのも珍しいんやね」

クロノ「僕も六課には期待している。…彼は管理局に入ってからまだ数  
カ月程度だが、ポテンシャルは高い。そっちに置いといた方が何か  
と良いと思ってね…こき使ってやってくれ』

はやて「わかった、でも人出が増えるのは嬉しいんやけど…ほんま  
にええの？」

それを聞いたクロノはこう返しやがった

クロノ『フツ、君と僕の仲さ。気にするなはやて』

はやて「あっありがとうな／＼クロノ君」

ストラ「そういう事は二人っきりの時に言ってやるべき告白だと思  
いますけどねえ…クロノ提督？」

クロノ『なっ居たのか！？べっ別にそういうつもりで言ったつもり  
では…！』

ストラ「なら慌てない事ですね。もろに肯定しているようなもんで  
すし」

慌てた様子のクロノに対し、冷めた口調で的確に突くストラ

はやては真っ赤っかだ

『そつそれじゃ僕は失礼するよ』と動揺したように言い残すと■よ  
うに通信は切られる…

疑いは晴れた事だろう

わざわざと狙ってやったようにしか思えんが、あの提督も中々狸だな

147

ストラ「では…改めますが」

はっ！とはやてが持ち直す

迅速な切り替えはさすが若くてもその位置に就いた部隊長だけある  
なと思った

踵を揃え、姿勢を正す

ストラ「本日より機動六課へ出向となります、ストラ・イクザム二等陸士です。宜しくお願いします」

敬礼と、何だか似合わない事をしているな…性に合わん

はやて「これから宜しくな　それでストラさんには…」

( 〽 )

少し考え中

はやて「…そやな、急遽だけどロングアーチっていうウチが部隊長の小隊に入ってもらおうと思っとるんやけど、…平気？」

ストラ「貴女の部隊です。」指示とあれば従いますよ」

だからその上目遣いは別に必要ない…

はやて「そんな堅苦しい言い方はええよ。                   それじゃあ…」

そこでちょうど呼ばうと思っていた人がやってくる

グリフィス「失礼します」

リイン「呼んでおいたですよ」

いつの間にかリインが呼んでいたようだ

はやて「ありがとな、リイン」

そういつてリインの頭を撫でてやる

リイン「えへへ」

ストラが邪魔にならないよう少し下がる

見かけない方：ですね？という様子だったが、場の空気は察したようだった

グリフィス「申し訳ありません。お話し中でしたか」

はやて「ううん、ちょうど今終わったさかい。こちらはストラ・イクザム二等陸士。クロノ提督からの増員や」

グリフィス「それはまた…あつと、私はグリフィス・ロウランと申します」

堅苦しいような感じはしたが、落ち着きがありそうだ

はやて「グリフィス君は私が不在の時の間、部隊を指揮してもらおう私の副官なんやで」

グリフィス「お手間を掛けるかもしれませんが宜しくお願いします」

ストラ「此方こそまだ日が浅い故に宜しくお願い致します」

後、すっかり空気になりがちだが、リインフォース？曹長も紹介された

ストラは退出する際頭を下げながら室内から出ていく

つと、間もない頃に一人、女性が迎えにきた様子で室内に入ってきた



はやて」「…ちてよ、それじゃ行ってくるね」

グリフィス「はい！お気をつけて」

~~~~~

その後

グリフィスが隊員に呼び掛け、簡単な説明会から早速軽い手作業に入っていた

ストラは器材運び
主に医務室や屋上に配置されたストームレイダーという乗り物に
関した備品などを運んでいた

…屋上は虚しい風が吹いた

もぬけの殻だった

医務室に配置される設備は本局のおさがりなようで、まだまだ使えるらしい

そのシャマル先生という方のやる気満々な様子は印象良かったと思う

粗方片した所で端末で呼び掛けてきたグリフィス副隊長から、また一仕事を受ける

ストラ（人使いが荒くね…？）

それは仕方ない。予想以上に仕事の進み具合が早かったからだ

しかも初日なのか、一同に気合いが入っている

実は彼にそんなつもりはないのだが、何度かに分けて運ぶような物資も軽々そうにまとめて持っていくその様子に周りが感化したのが主な原因だったりする

後日談では移動する際には何かと目立っていたという話があったが
うだ

そんな他人からの気もせず、また一人で違う場所へと向かう

今度は外へ出て、訓練場に物資を運ぶ程度

それで休憩に入っているとの事

…
…
…

すぐに終わるとやはり気になったか、ストラは訓練場の近くまで移動する

彼は、主軸になってもらう前線メンバーが如何なるものか気になっていた

擬似空間なる市街地が形成されており、中の訓練の様子を眺めている人を見かける

ストラ「へえ…、便利な時代なもんだ」

シグナム「ん？」

何か用なのか？」

そこに居たのはライトニング隊の副隊長

ストラ「いえ、一息ついたんで様子を見に…シグナム副隊長ですね？」

シグナム「ああ、そうだ。ご苦労だったな」

奥に一人、端末を弄っているようだが今は話し掛けるのを止めておこう

忙しそうだ

シグナム「ところで貴方は？」

ストラ「ロングアーチ所属のストラ・イクザム二等陸士です。魔導士ランクはC。此処には…まあ興味があったもので」

シグナム「主はやての所か。なるほど…魔導士ランクも持っているなら訓練に参加するの？」

ストラ「さあ？部隊長次第ですね」

此処に来た際に配属の話が伝わっていなかったようでしたので、これからの話ですね

付け足すようにそう言うとストラも端末を開き訓練の様子をモニターで見る

シグナム「…ふむ」

少し気になった

あれつきり黙りしたままだったが時間がきたようで、一声掛けてくると施設へ戻っていった

しかし、二等陸士にしてその風格は中々のものだ
あそこにいるFW達とは異なって一段と落ち着きを持っている

…さて、そろそろ仕事に戻らねばな

例えるなら、顔合わせ程度な内容でその日を終える

075年4月は快適？な始まりだった

ストラ「訓練に参加…ですか？」

キョトンとした反応がどういう意味なのか、彼のそれは捉えにくいと思わせる

はやて「そや、一度しっかりと力量を測つとかんといざという時に動きにくくなりますから」

部隊長室に呼ばれると早速本題に入った内容

あれから数日経った程度だが、ストラに関するデータは少ないが関心は持っているようだった

資料に目を通したはやては、それを視野に入れた上で仕事の合間に呼び出したという所だ

はやて「クロノ提督から貰った資料によるとストラさんって、ガジエイトと交戦した記録があるみたいやから」

これが今一番気になる事

実は貰った資料に目を通してから六課にとって有力な事柄が書かれていたのは彼がガジエイトと交戦して撃破していた事だった

どうやら報告書は簡単に整理された程度のモノだったが、彼女の関心に留まるようだ

ストラ「それは構いません。…ですが訓練に参加する分、雑務に取り組む時間は限られますが？」

はやて「確かにそんなんやけど…」

やや口籠もったようではあったが、そりゃそうだ

仕事の立ち位置は全然変わる

それは確実だ

はやて「そこは臨機応変ってな感じで……ダメ？」

そう言つと様子を伺つようにじつと見つめてくる

ストラ「いえ、それで良いです。やってみない事には変わりありませんから」

はやて「ほんまですか」

それを聞くとダメ元から言つてみたんだな…

要は上手くやつて欲しいと任されたようだ

しかしながら…もう少し公共の場を考えてもらつても良いのではないのか？

だが、おおきにや〜　つと言つて喜んでいるのを見てその空気に乗るようにストラはフツと笑つた

それが彼女の素なのだろうと

はやて「それじゃあお昼頃にでもスターズの高町隊長もとい教導官から指示を受けてください。連絡はしておきますんで」

ストラ「わかりました」

ではそろそろ失礼しますと言いながら部隊長室から出ていった

はやて「あっ……まあええか」

少し喋りたかったが、まだ仕事だ。

またの機会が良いだろう

.....

ストラ「.....」

カタカタカタカタ...

本来ならば周りは騒がしいのだが、今はキーボードだけがテンポ良く響いているだけだ

仕事がかどっている為に、早めのお昼休みらしい

まだまだ交流も浅い中で、そういった機会は人材不足の事もあり、中々無いものなのだが…
意気込みが良い周りの連中は至って優秀なもんだ。特に最初は慣れない環境なはずなのだが…

意外な事にその引き金を引いた本人が全く気付いていなかったりする

自身だけしか居ない室内でストラはただ今一人で目の前の画面と戦っている

それは何を意味するか

連日続きでこの交流を深める機会はさっきもあったのだが、彼はみんな潰していた

理由は簡単

彼にその気はないのだ

興味がない

いや友好的な関係を築こうとする素振りすらない

「……………」

そんな一人黙々と作業を続けている様子を目を込み入った事もあつて彼女が扉の方から眺めていた

ストラ「……何か御用ですか？」

「えっ？」

ストラ「そっ…貴方の事ですね」

画面をずっと見ているのにも関わらず、振り向いた様子もない

彼女は少しばかり意表を突かれたような気分だった

なのは「あっ、スターズ隊長の高町なのはです」

聞いた途端にすぐにストラは失礼じみた素振りを正そうと彼女に向き直った

ストラ「失礼しました。自分はストラ・イクザム二等陸士です」

敬礼も兼ねて慌てた様子はないが、落ち着きのある立ち直りだった

開き直った訳でもなさそう…「うううのに慣れているようだった

なのは「ううん、はやてちゃんから話は聞いていると思うけど…お仕事の邪魔をしちゃったかな？」

そう言いながら歩み寄ってくる

公私は…総隊長があれなら致し方ないのだろうか？

ストラ「いいえ、それよりも連絡を下さればお伺いしましたのに」

なのは「さつき、グリフィス君からこっちに居るって聞いたからきちやった」

フツと可愛らしい笑みが人懐っこさを醸し出しているのは一部の男性達いわく、魅力という意味での脳殺スマイルだったりする

といってもそういう事に関しては全くの無二な反応だったのだが

なのは「訓練についての話をしようと思って。お昼ご飯も兼ねて食堂でも良いかな？」

構いませんよつと彼がそういうとまた満面笑みで

「じゃあ行こう」
と言った

なのは「訓練は早朝から夜遅くまできつちり。あつお辱と飯に何回かに分けて休憩はちゃんと取っているよ」

食堂に移動して、皿にスパゲティを盛って席に着く。食事をしながら主な確認を取りつつ話を進めていく

適当な相づちをしながら聞いているが、今は基礎体力作りを重視しているとの事

ああ、そういう此処は機動部隊でも少数精鋭って奴だったな

体力作りには感心するが、果たして俺はそれに混ざる必要があるのか？

なのは「雑務と訓練、両方受け持って大変だと聞いたんだけど、とりあえずこの後はどうかな？」

ストラ「少々お時間を」

そういうとホルダーに掛けていた共通用端末で雑務の同僚を呼び出す

ストラ「休息中失礼。ああ、実はな……………そうだ。一応ノルマは済ませているからまだ有りそうなら俺の机に…そつ。…なら頼むでは」

十分に聞こえる程度の会話だったけど私もだけど相手の反応が最も驚いていたようだったので新鮮だった

なのは「ひよっとして、さっき一人でお仕事してたのは…」

まさか、大変だから仕事の前押し？と思ったが間髪入れずにすぐに答えた

ストラ「いえ？仕事は上々でしたからあの時間は早めの休息时间。賑やかなのを好まない性分です」

そこまで言えば確かに、この人の持つ空気はそれとなく賑やかを好まなそうだ

なのはストラへ大しての第一印象は至って冷静

ただグリフィス君とは異なって温厚という訳じゃなく無愛想ってところ

なのは「じゃあストラさんの実力を知っておきたいから今日は軽く

腕試してもしよっか」

ストラ「…わかりました。それで高町さん、いつ頃に参加したら良いですか？」

なのは「いつでも良いけど…なのはさんで良いよ？皆はそれで呼ぶから」

ストラ「……」

一瞬だが、考えた

ストラ「好きに呼んでいるつもりですが、嫌でした？」

なのは「え？…えっとそういう訳じゃないけど…」

思いもよらず、これには詰まった

ストラ「取り敢えず、珈琲と紅茶かお茶、何にします？」

席から立つと何事もなさそうに取ってきますよと言っ

はぐらかされたような気がしてならない彼女は仕方なしに紅茶を頼んだ

ストラ（やれやれ…）

ええ、ぶっちゃけそんな事はどうでもいいわけだ

仮面を被ったかのようなその偽りは決して他人の為ではない

孤独を望む己が為

しかし彼は、望んで此処へやってきた

なぜかって？

自身に聞かせる…単純な解答

“暇潰し程度”にはなるだろうという慢心から

なのは（うーん…）

そんな彼の行動に高町なのはは困惑したようだった

難しい人

お話はしやすい。だけど何処か雲を掴めないような…

遠慮や配慮な雰囲気でもないし、かといってフレンドリーな感じもしない

一見冷たそうな見解になりそうだが、決して柄が悪いというわけではない

なのは（なんでだろう？）

もっといろんな話をして彼の事をもっと知りたいのが本音なのに、
どうもテンポが狂う

ふとドリンクバーの方を見るとストラさんが両手に飲み物を持って
やってきていた

ストラ「どうぞ」

なのは「あつ、ありがとう」

ストラさんが席に着き、持ってきた飲み物を一口飲む

不味いと感想を洩らした

なのは「ところで…少し聞いても良いかな？」

間を開けるのも気まずいのもあったが、彼を少し知った事で気になる場所があった

ストラ「なにか？」

なのは「ストラさんってあのクロノ提督から推薦を受けているみたいだけど、どういった関係なのかなあって…」

はやてから資料を送られてきた際に第一に印象付けられたのはあの提督からの推薦

彼の事を知っている人からしてみれば驚きものだ

良い人だけど、…堅い人

大雑把に片付けるならこんな所だろう

そんな彼が一枚咬んでいるからなにかあるのだろうとなのははそう思っていた

ストラ「今はつまりらぬ愚痴話相手ってところですかね？」

なのは「えっ？そんなの？」

そんなお偉いさんが彼とそういった話をするのも変なような気がするが、そこは置いておこう

ストラ「一応あの提督から機動六課の事なども含めて、ある程度必要な話は聞いてましたから」

なのは「あはは ……じゃあ私の事も知ってたんだ」

そうですね。っと、確か聞いた限りの話しでは…と、続けるストラ

ストラ「確か、管理局の“白い悪魔”にして、対峙した相手が血相青色へ変えて逃げ出す程の魔王振りだとか」

ストラ「？」

(ん？圧力？温度差…だと？)
その間にすぐに気が付く

寧ろそれは良い異名だと思ったから言ったのだが…彼女、高町なのはからは…爽やか過ぎて、逆に殺気を感じ取れるくらいの怒気が自然と散布されているのがわかる

それほどの異名なら清々しくも受け取れる言われようだと思つのだが、どうやら気に障ったようだ

なのは「いま、何か言ったかな？」

ストラ「ええ、ですが気に障ったのなら流して下さい。…いえ、すみません。誤認だったようですね」

提督は確かにそう仰ってらしたので…と苦し紛れにとはつきり言うておく

なんとなくに脳内でアラームが鳴っているので早々に「か話を変えられるか、何かしら策を打たねばならない

そんな気がした

なのは「そうなんだ　じゃあしょうがないよね」

その後：嫌という程、その辺りの話に適当に付き合わされた

まあエース・オブ・エースと出始めに聞いたような気もするが、白い悪魔というほうが記憶に残っていたというのが真まことの話

怒っているのはあからさまなので、敢えて言葉には出さないが…

しかしシュガースティックでそんなに速く紅茶をかき回したら溢すぞ？

適度に相づちを取りながら、ふと…最もな都合を思い出した

ストラ「それはそうと…そろそろ午後の訓練が始まるのでは？」

なのは」「あっ！」

忘れていたようで、その慌てっぷりは中々面白い

俺はまだ余裕があるから他人事のように見ているが、後でとばっちりをくらう羽目になるとは思いもしなかった

実際、近くに着いてみると改めて此処の訓練用シミュレーターは凄く良質なもんだと思ってしまう

雑務に一息ついたので今は愛称シャーリーこと、デバイスマイスターのシャリオ・フィニーノさんと一緒にまだ若いFW達の訓練を眺めていた

つといても…シャーリーさんは手渡した自作のストレージデバイスの方に目が逝ってしまっているが…

インテリジェントデバイスではない…つまりAIが無い分、それに添った複雑な精密調整は必要ない。俺のデバイスは都合上待機状態という形態がなく銃型、簡易的な調整が可能なデバイスになっている事からその場でデータを取るためのチップを入れているらしいのだが

…時々「うふふ…」と一定のヶ所からそれが響く

不気味だ

まさか眼鏡を光らせたあの怪しいシチュエーションになっていないだろうか？

何やら自作というモノに興味があったのか、機能性に湧く要素でもあったのかわからんが、正直向くに向きたくはない

しつこそうだ

訓練を見ている限りでは、デバイスを振り回したり立ち回りといった動作のシミュレーションを取り組んでいる

ストラ（スパルタらしいな…？）

観た感想がそれだった

まだ少年少女ぐらいの年頃達は、肩と口で呼吸をするように息が乱れていて、しかしそれでも進んで取り組むようにスフィアを相手にトレーニングを続けている

また、必ずといって良い程四人一組、又は二人一組らしき動きから個人技より協力を強いた訓練なのだろう

だからといってもそれ以前として問題外な光景である

自身よりもあんなに若い奴らが戦場に出向くのかつと

ストラ（頭が痛い話だな…）

畜生な提督殿もいう。管理局の精鋭の無さをしみじみと直視した現実
実に頷かざるをえなかった

いや、機動六課は特に才能と協力性を重視している。それはストラがよく分かっていた

大人の局員はいても好き好んで戦場に行こうとする奴はきっと多くはない

しかしながら間接的にといえ勢力拡大への増強の工程に対し、子供に戦いを教えるのはナンセンスだ

シャーリー「ストラさん。終わりましたよ」

それを聞いたストラは後ろを向く

満足感に満たされたようなシャーリー技師は満面の笑みで俺のデバイスを渡しに来る

どうも…っという一言だけ返すが、彼女はそれに精通した技師だ。尋ねたい事はあるみたいだった

シャーリー「実弾と魔力のカートリッジを使い分けた作りになっているみたいですけど、面白いですね」

製作に入ってから最初に目についたのはカートリッジシステム

今持ったデバイスの形状はそこらの銃と変わらないが薬莖に魔力を込めて、いざ使用した際にストック分の補助を受ける事が可能なこのシステムをストレージデバイスに取り入れた

無論、非殺傷設定導入という奴の為でも有り特定の形状物はコストが非常に高いとされる。支給される杖ではとてもじゃないが使わない方がマシだという結論と俺の経済的、給料という資産の理由から自作した方が安いコストで済むと同時にデバイスの技術に触れる事が出来る

…その為にも下調べに知識や出費を必要とされるのだが、これが許容範囲内だったから行動に移したのだ

これは事件遭難者となんら変わらない魔法を知らず、他世界の低文化レベルの人が短期間で作ったと改めて気付かされたら製作者を天才だと言っていただろう

だが、彼を詳しく知る者はこの場にはいない

この世界において介入出来る関係者もとい当事者は彼の知る限りクロ

ノ・ハラオウンぐらいだが、ストラの不幸な事故はそのまま公開すれば管理局の闇に繋がってしまう

犯罪者の経歴もストラの存在も実は管理局に取って悪い知らせ

片方は既に無くなった身だが、もう片方は生きているどころかよりもよってクロノに保護されたのが彼らの不幸だろう

クロノは良くも悪くも典型的な管理局の人間で高官である

指示とあらば致し方ない彼だが、正義感と責任感あるクロノはルールにより保護するという形を取っていた

上層部からしたら何とも面倒な話である

だが、管理局にも立場と面子があった以上、一手生じる必要があった。主な詳細は実は彼の事件内容に隠蔽工作が交じっている

大雑把に訳せば、本人に了解を得てその事故にはストラは存在しない事になっている

犯人も多少だが決定的に工作されていた

言わば取り引きが生じた

その結果

ストラは管理局が経営する施設で育った。親族を亡くしたミッドチルダ出身者としてだ。非合法にも籍を設定されて口止めにも多額に金が回った。今年度管理局へ入社したばかりとも肩書きがあるが上層部にとっても彼を監視出来る範囲に留まらせたクロノの交渉は幸いだった

しかしクロノは頭痛さえも覚えた

まさかあの事件が此処まで大事になってしまったのは思いもしなかったのである

結局、あの事件は半分真実に半分嘘が混じった資料である以上これは関わった人物しか判らない

管理局としての立場もあつた以上クロノも致し方ない同意の主旨面があつたがこういった工作も今までに無かつた訳じゃない

寧ろ頭痛の原因はストラの能力の高さにあつた

これを担当しなくてはならなくなったクロノや一部関係者は初め何処から案件を出すか悩んだが、先の方法を偶々クロノの側にいたストラが有耶無耶だが意見しており、多少の修正があったがその概要が殆んど通ってしまったのである

悪知恵とも言えよう。だがしかし、管理局内の管理を少々弄る事で留まる辺り管理局にとっては決して悪くはない案件だったが故にそれが通ったのである

いや、違う。この男、それが無難に隠せる方法だと分かっている判らないようにだがクロノは彼が誘導したかのようにも見えていた。法と警察に消防、軍隊等という奴をまとめたような感じが管理局だからこそ可能なチートであるということをこれまで得た知識だけで理解していたのだ

話を戻すがその提督でさえ既にデバイスが出来上がっていた事実は知らない

何故ならクロノが彼の作成してた設計図と此処にあるデバイスは異なる物だったからだ

これを知るのもっと先の話しになるかもしれないが、クロノがこれを先に知っていたらはやてに対して今現在とは違ったストラに關したデータを送っていたに違いない

彼が狙ってやっていたのかは定かではないが、クロノでさえ彼を持って余しているのだ

そんな事はいざ知らず、自作したとはいえ使える物なのか不安が彼にはあつた

大した魔力も持ち合わせもないから、撃てる弾数が増やせる力
ートリッジシステムやは単純に助かる…が強度も問題だ

ストラ「まだ試運転もやっていませんが」

シャーリー「整備は良さそうだから大丈夫ですよ」

まあ

実弾で撃つ

魔力弾で撃つ

そして実弾に魔力を纏わせて少ない魔力で効率性を上げる方法が取れるようになるのは有り難いしオマケに非殺傷設定も付いている

戦闘型として使えないがシャーリー技師の好印象から悪くはないのだらう

ところで、非殺傷設定というなんとも都合的なデフォルトが当然のように適応されているが、この世界に突っ込みは入れてはならない

非殺傷設定でも攻撃を食らいすぎたら殺傷にもなるだらうが、魔力に直接ダメージとは…ひよっとしたら魔力が低い魔導士かなり不味いのではないかと思った

シャーリー「あっ、ちょうど一区切りに入ったみたいですね」

再び視野を戻すと、こっちに向かって一同がぞろぞろとやってくる

なのは「あつ、いたいた」

そういうとFW達に少し休みを兼ねて待っててもらい、当の本人はとてとつとやってくる

少年少女達はあの人誰？つといった様子だ

ストラ「模擬戦…ですか？」

なのは「うん、ストラさんさえ良ければあの子達と相手をしてもらえないかな？っと思って」

「違った相手との戦闘訓練も為になると思っているんだけど、もちろん良いよね」「
っと思ってくる

あなるほど

仕返しですね？
判ります

俺は前戦メンバーの詳しい詳細は多少動きの良い子供程度の印象で細かい事など全然知らないし、正直どうでも良い

魔導士ランクで強さが分けられているがどっちみち知っていたとしても、彼らに対しての印象は に違いない

だが、…多少の顔は作っておくか

あんまりぶっきらぼうでは一応恩返し兼暇潰しも全て雑務だけで終わってしまう可能性がある

少し逸れたが詳細の判らないアンノウンの戦いとは、慣れた戦いと違って全く別物

ストラ「いいですよ」

確か彼らはBランクだったはずだ。良くも悪くも強い部類の方には当てはめてもいいと今の同室の相方がそう言っていた

それに魔導士ランクの基準がいまいち把握しづらいとは思っていたのでこれはちょうど良い

より実戦向きに今もなお訓練している彼ら相手に断る理由がない

なのは「えと……本当にいいの？」

ストラ「持ちかけた話を蹴る理由がありませんから」

確かに話を持ちかけておいてなんだけど、慌ただしい所も困った様子もない

さっきの仕返し（魔王発言）にもならないようで、まあやる気はあるみたい

都合は良かったので先に中へ入ってもらうことにした

皆も興味があるみたい

FWメンバーに寄っていき、彼女が発した言葉とは

なのは「じゃあ…本日最後の締め括りは…！」

一段だけのランクの差を、疲労しきった中だからこそ彼も全力で戦えるかもしれない…

誤った認識をしていたのはこの時からだったかもしれない

なのは「勝敗条件はどちらかがクリーンヒットを入れるか、戦闘を
続行出来ないと私が判断したらにしようか」

空中から彼らを監督する教導官がそう言った

ストラ「了解」

スバル「はい！」

ティアナ「はい！」

相手は高町なのはが隊長のスターズ二人

しかし容赦ない…

一応Cランク名義はあるはずなのだが？

上を見上げていたが、やがて前方の二人へと視野を変える

二人は既にバリアジャケットという防護服も備えて準備万端だったようだ

ストラ「……………」

で…いつ始めるんだ？

なのは「えと…ストラさん？」

そう思っていたら高町さんが困惑した様子で上から話し掛けてくる

ストラ「なにか？」

俺の疑問をすぐに解消してくれた

なのは「その…バリアジャケットは？」

…なるほどねえ

…それを待っていたのか

ストラ「使いませんから始めていいですよ」

9 (追加版)

ティアナ「それ！どういう意味ですか」

前方にいる割と強きな女の子が口を挟むようにそう言ってきた
端からみれば彼は当たり前な準備をしないのだ

ストラ「そのままの意味」

ティアナ「！」

スバル「てい…ティアナ落ち着いて…！」

なだめるように相方のスバル・ナカジマは言ったが

ティアナ「あーそうですか。…私達では役不足だと？」

…ほう

ガキがそれを言うか

そして挙げ句の果てに

ストラ「高町教導官、いつでもどうぞ」「

ティアナ「……」！

こいつは私を無視した

なのは「…うん、わかった」

ティアナ「なのはさん！？いつ良いんですか！？」

バリアジャケットは未着用…教導官としては見過ごしたくない所だが、余程自信があるのだろうか？

なのは（危険なら、私が止めに入ればいい…か）

…なら、そのままやらせる方がこの場は良いだろうと思った

スバルとティアナを念話でなだめ、けど納得はしていないようだったが…思考を切り替えたようだ

勿論、後で厳しく問い詰めよう

そう考えていた

見た限りあいつのデバイスはモーゼルをイメージしているのだろうか？それに近い形状の銃型

あの弾丸は恐らくカートリッジシステムを搭載したその為の薬莖…

スバル『この場合って間合いを詰めた方が有利だよね？』

ティアナ『そうね、あいつの持っているデバイスは私のと似たような銃型みたいだし…ランクもくだなのはさんが言ってたから。早い話し弾切れ、リロードの合間を狙うかスバルが白兵戦にさえ持ち込めば隙は十分にあるわ』

スバル『ティアナならどう狙う？』

ティアナ『弾を補充する瞬間よ。…両手を使うもの』

念話で簡単な確認を取り合っている中、外野陣はその様子をずっと見ている

スバルが改めて前方を見る

やっぱりバリアジャケットを身につけていないのは気掛かりだった

このままりボルバーナックルで攻撃しても良いのだろうか？

いや、きつと対処出来るだろうけれど直撃したら骨が折れてしまいかもしれない

けれども、あのストラさんという人はなのはさんの合図をただ待っているようだった

なのは「それじゃあ…初め！」

ストラ「…へえ」

合図と同時、すぐに前方の二人はそれぞれ駆け出した

青髪の娘の足は早い

いや、あれ…ブーツが滑っているよな？

妙な足音だと思えばあれは滑るのか

魔力を推進力代わりに利用し、移動しているといったところか？

勉強というより興味単位からこの世界の学問を多少かじった程度

あの頃にはなかった理解力は、ここでは物凄く汎用されている事に嬉しく思った

あの足自体は地に付かなければあの車というもの同様タイヤが空回りするようなものなんだと…

後退しながらあれが早さの要因なんだなと解釈していると思わずクスリと笑みが溢れる

確かスバル・ナカジマという娘だったはずだ

加速を続け、腕の武装のスピナーが高い音を立てている

周りを見渡す…

もう一人は…まあ今はいいか

人気のない都市街は擬似空間…建物同士で間の空いた手頃な狭い通路を見掛けると、そこへ入る

スバル「よし！行くよ、マツハキヤリバー！」

いや、マツハキヤリバーが警告した…が、スバルが「えっ？」と移動しながら声を上げた時

丁度入口手前、追撃するかのうな素振りそのままカーブをしようとした通路の奥が視界に入った途端

目の前に魔力弾が既に放たれていた

スバル「っ！？」

ストラ「迂闊な奴め」

デバイスを当然のように片手構えていたストラは既に待ち伏せていた。照準がピタリと重なっていた銃口の先に弾を更に生成し始めていた

スバルは咄嗟に腕のスピナーを使い前で抱えるように弾くと、その第二波を目の当たりにする

先程より大きい

弾いたモーシヨンのせいで、出遅れる

それはもう一発弾が放たれるということだった

ストラ「…」

スバルが遅れて迎撃に対し構え

スバル「リボルバー…！」

ストラ（ちっ…向こうも早いな）
スバル「シユート！」

ドオオオオン　　！

煙りと軽い衝撃も生じた中…

黙々と彼は

“把握していた”

ストラ（相殺…か）

こっちの方が出が早かったのだが、威力は五分と五分

まあ悪くない

うむ、把握把握…と思うなら俺も魔法という不確定なものを少々舐めているな

上乗せ2割りといったところか

魔法という奴のおかげで…だ

このまま立ち止まっているのは何かと宜しくない

後退するようにその場からすぐ離れながらそんな余裕を考えていた

…自作したデバイスに魔力を扱うなどと慣れない実戦事をしている
のだから、当たり前だから良いも悪くもない

案の定、煙った中からローラーやスピナーの音が鳴り響く

~~~~~

なのは「うん、良い判断力は持つてる」

その様子を端末を開きながらバツチリ監督していたなのは、少し  
嬉しそうでも真剣にもやり取りを客観的に見ていた

しかしながら若干疑問が

気のせいではなかったらストラさんの魔力弾のコントロールが良くない気がする

二発目は弾の生成に時間を食っていたからこそスバルは相殺で済んでいるとも思うが、あれはどういう事なのかいまいちだった

自身の感想を密かに洩らすとスバルの姿も見えてきたやはり相殺だ。詰めが甘いと言えばまさにそれだけど……ならストラさんは確認をせずにすぐ離脱している

距離感を保つ名目もあるがその割に随分と余裕があるようにも見えるから判別し難い

なのは「でもね…詰まれそうだよ？」

っと彼女がそう言った途端の事だ

広い表通りに出たストラ・イクザムにティアナ・ランスターが噛み付いた

~~~~~

ストラ「おっ！」

（ガンナーかぁ…）

不意に建物の上から銃を構えたティアナを見かけたと思ったら銃口が光っていた

ティアナ「油断大敵よ！」

放たれていた複数の弾は彼女の何かしらの必殺技という奴だろう。やたら目立つ色に染まり、複数の弾道が目に見えて直接本命狙いで曲がってきていたのだ

ストラ（…それが当たればな…）

完全にもらった！といった様子にも気のせいではなければそう見えるのだが

当の本人は誘導された弾に対し一ヶ所にまとまってくる迄見つめていた

それ即ち、どういうことなのか

弾速は当然の如く早いにも関わらず

スッ

なのは「！」

ティアナ「！？」

複数の弾は彼の横を“抜けた”

ご丁寧にも彼はティアナを見ていなかった。その通り過ぎる弾をのんびり“見ていながら”だ

ガアアアン！！

着弾先は的を通りすぎた地面

ストラ「残念だったな」

ティアナ「うそ!？」

外した!!!？」

えっ?　　なんで…?とギリギリのところ躲されている
…弾は見事に地面を大きく破壊し、埃や破片は少々被っても彼にダメージを与えたなどと程遠かった

なのは「違う…既に避けて…いた?」

疑問

ティアナが「くっ」と悔しそうに撃ち込んだ

同時に動いていた

なのは（こっこの人！？）

今度のは誘導と直接狙った分かりにくい射撃

やはり抜けていたが、今度はなのにも判った

ティアナの連射は虚しく。ストラは弾をギリギリまで引き寄せ、途端にステップも混ぜて左右に振るう

やはりティアナの弾をよく観察していた

一歩間違えばその避け方は直撃するはずが…それは決してまぐれじやなかった

誘導弾がどれかなのか把握しつつ軌道を完全に読んだ上での回避行動なのだと、第三者のなのはの視点からそうだとしか思えなかった

ティアナ「っ！なんで!？」

次第に彼女に軽い戦慄が走る

ストラ「若いねえ」

その様子は明らかに余裕の有る笑み

満足感を持っていたようだったがそれが更にティアナを刺激した

諦めが悪いのだが攻撃する意識は大したものだ

今度は自身の持つそのデバイス、ハウンドを素早く向けて放つと魔力弾がティアナの放った魔力弾を直撃する

無論複数だ。それを同じ分直撃させた

クイツク・ドロウという奴か

ティアナの弾の方が強弾のはずだが…、しかし軌道が逸れた。これでは当たらない

何をどうしたらこうなった？

なのは（…CでもBランクどころの技量じゃない！）

攻め方にやや違和感有りありのアクションだったが、それ以外の動作は驚かされた。明らかにレベルが違いすぎる

違う、この人に宛てられた魔導士ランクがおかしい

それほど格が違い過ぎたのだ

何かのレアスキルだったとしても、相当な実力者にしか見えなかったのだ

スバル「うわっ！ すっ凄っ！！」

視線だけ振り替ってみるとスバルがさっきのを目の当たりにしていたようだ

なのはがそう考えさせられるように、スバルもまたその一人。この人が確かな実力派だということを実感していた

あれらは直撃コースだと思っていた

しかし、彼はなんでもなさそうに対処した

スバル「ティアナの攻撃を当てるなんて…」

ストラ「……………」

しかし今度は広い表通り

回避をしやすい面ならまだ動きやすいはずだ

黙りながらも振り向いた彼にはその事に関心がなさそうだった
スバルはそう考え改めて拳をぎっしりと構える

スバル「いきます！」

なぜ敬語なのかがよくわからなかったが、威勢が良いのは嫌いじゃない

ストラは返事の代わりに肩よりティアナのデバイスより一回り大きいモーゼルタイプを立てる

そしてスバルの方へ向かい合った

二人は念話で連携を確認しながら追い詰めようと様々と試みる

しかし…擦りもしない

寧ろ状況が一変しかけているぐらいだった

ティアナなんて心が折れそうな気分にもなっていた

始めの頃に比べると、ストラの魔力弾の生成が早くなっている

いや、最初が遅かったぐらいだ。ずっとその様子を見兼ねたなのは
の表情は真剣そのものだった

ストラはティアナに背後を晒した時だつてスバルから連打されてい
ても機を良く捌き、躲す…肩より高くハウンドだけを後方に背面撃
ちまで入れてきた。見てもいないのにそれがしっかり攻撃を阻止し
ているから質が悪い悪夢だ

ふと、ティアナの弾から逃れたストラの背後からスバルが踏み込んでいた

スバル「はぁあぁー!!」

リボルバーナックルは唸ると同時にストラからみて横から拳が入ってくる

ストラ「……」

振り向き際

懸命に仕掛けた時に彼は何を思ったのだろうか？

ガッー!!

スバル「うっ…うそ？」

洒落にならない

リボルバーナックルは確かに何故か手応えを感じ取っていた

それもそのはず

ストラ「お見事、クリーンヒットだ」

自身でもびっくりするぐらいかなりの魔力ダメージを持っていかれてはいるが、ナツクルはストラの素手に受け止められたと云った所だった

まさかこのリボルバーナックルの一撃を“素手で”受け止めるなんて……かなりショックを受けた

更に驚いたのは…今の一撃、ガジェットを粉碎出来る程破壊力だったはず　でも、押し込んだ感覚が全くせず…吹っ飛ばす事ならしなかった

魔力を精一杯込めた渾身一撃…それをあろうことか、この人はその掌をヒラヒラと振るい…確かに痛そうにしているが、、“それだけ”だ

障壁すら全くも張らず…

魔法を使ったようにも見えない

コノ人ハ一体ナニ？

ストラ

「迷いが無い良い一撃だった。……ほら、あんた一本取ったろう？」

スバル

「はっ！ すつストラさん！ 大丈夫ですか！？」

声を掛けられハッと気付く。気が動転してた

自分よりも歳も身長も上の人だが、スバルは心配してたかストラの身を案じた

ストラ

「これくらい訳ないさ……。ただ……精神的なモノに近い何かが減った

感覚を覚えるが、これが所謂魔力ダメージという奴だろう」

スバル

「へっ？…えっ？」

物理的には打撃だった分流して物理ダメージをほぼ回避したから大した痛みがなかったが…。

魔力ダメージというのは意識を汚染されたっという感覚に近い。これはきつと威力にもよるだろうが、受け続けたら意識を持っていかれ倒れるだろう

本当のところは知らんが…今の模擬戦相手は戦闘の戦力としてここに居る。ランクB、なら“今の所は”この“武”は通じると判断した

Aランク以上はもっと強いのだろうか？

いや、管理局のランク厳選は戦闘員としての当てになるのだろうか？

…きつと違うな

ストラ

「あまり気にするな。大したことではないが魔力はごっそり持っていかれたようだからな…クリーンヒットには間違いないから勝者は君達で良い」

ストラがポンツとスバルの肩を小突く様子を見ると、継続の意志はないと判断したか

ストラ

「それに確認する為の模擬戦にルールだ。判ればそれで良いのさ」

スバル

「はっはあ…？」

ゆっくりと高町教導官が高度を下げながら

なのは

「確かにクリーンヒットだったから…勝者はスバルとティアナかな

？」

状況を見かねたなのは、地に足を着くとバリアジャケットを解除
… 模擬戦の終了を告げると集合を掛ける

俺に… 不自然な視線を向けて… だ

今の模擬戦を見て、FWの二人に対し、訓練もしている事もあつてか様になってきているとだいぶ良いデータも取れたやら指摘やらと、教官と訓練性との間のやりとりがハキハキしていた

メインは彼女達なので、俺はただ傍観者的にその様子を見ていただけだが…

今日の訓練は終了と言ってFW陣やシャーリーさんは隊舎の方へと戻って行った

…その間に、確か名前はティアナ・ランスターがこちらをギリッと見ていたような気もするが知ったことではない

彼女達を見送ると高町さんはこっちを向いた

なのは「さて……ストラさんには言いたい事、聞きたい事があるんだけど良いよね？」

O H A N A S H I

ストラ「答えられる範囲なら構いませんよ」

すると教導顔…しかも、真剣な雰囲気だ

なのは「どういうことですか？…さっきの立ち回りと動き方は魔導士ランクBか、それ以上に匹敵するものがあると私はそう判断した

んですけど」

それに防護服もなんで身に付けなかったんですか？と聞いてきた

ストラ「さて？前者は答えかねます。魔法に関しては素人ですから差し引かれたといったところでしょうね」

さも平然と答える

前もって考察した言語を並べる

別に間違っではないし、ストラにとってはランクなどどうでもいい事だった

そもそも魔導士ランクは位置が高ければ優遇される立場にもなるし有名になれば管理局の中のエースといった看板扱い。つまり周りからは羨ましがられる対象ともなりやすいし、将来出世、昇格にも影響もあって何かと悪い話ではない

だが、ストラにとってはそんなもの正直どうでもいい

世界や次元や、平穏な日々を持続させる平和というものの為に管理局に入った訳ではなく、無残な処置を取らなかつたクロノ・ハラオウンの一応の配慮からその礼も兼ねて勧誘から局入りしただけである
こんなでも処置はまともな方だと思っている

だが彼は“恩を売られる”というのがこの上なく嫌いな性質を持っていた

実は彼は…
かなりプライドが高い

それで多分あれだ。等価交換という奴だ

どうやら好意を真つすぐに受け取れない性格のようで、彼の大抵は

代わりにと…礼は礼で返し帳消しにする考え方を持っているのだ

本来は一見ぶっきらぼうで他人などどうでもいい柄の悪い性質に見えるのだが、内面は中々キチンとした考えを持っており以前の世界でのそれは、理解者からはその能力とかなりの評価を受けていた程でもある

今は前半は無ければ、上、下官どころか一般に対しても常識人並に対応している

故に本質などさっぱり見せていないストラを相手に、なのはが彼の内側の考えが読み取れる訳がなかった

非常に質の悪い隠しっぷりだが、自身の為でもある

以前は…とんでもない目にあっていたが今は、誰も俺の事は知らない。唯一クロノが気にしていたが、現在はこれ程都合が良い事はない

ストラが巧みに話し、きちんとした正当理由から引っぱりだす。想定内の事だった

ストラ「急な手続きの下で魔導士試験等は管理局に入った時にまとめてやりましたし、デバイスの使用なんてこれでもまだ二回目ですから」

つとついでに言うておく

ストラ「このデバイスは興味から試しに作った程度、一緒されても困るんですよ」

なのは「…えっ？」

平然と言う内容が急過ぎる

まだ二回目？…“デバイスを？”

…この人はなにを言っているの？そんな感覚だ

なのは「二回目って事は…今さっきのは？」

ストラ「今さっきので二回目。試験はぶっつけ本番でしたし、杖など使ったことありませんでしたから無下な結果になっただけですよ」

とにかくランクは取っておくよう提督からそう言われてましたので

それで杖というものが使いにくいと判ったからこの銃型ストレージデバイス“ハウンド”を作りまだマシな戦闘を可能にしたただけですからと言った

なのは「それでもその腕前は…。ストラさん…何か、やってた？」

ストラ「資料にはありませんが、狩猟が趣味な程度ですよ」

なのは「…なんだか珍しい趣味だね？」

彼の言う“狩猟”がいまいちよくわからなかったのだ

なのは「それに…ガジェットと交戦した事があるみたいだけど？」

ストラ「それはちょっとした“事故”です。その時は管理局の武装隊もいましたがAMF、アレの影響で管理局が遅れをとっていたようでしたから狩猟用のライフルで不意を突いたら撃破してしまった…程度ですよ？」

我ながら無理やりな半分嘘だ

まあ詳しくは書かれていないし、管理局が関われば色々ありますからとでも付け足した。管理局と言ってしまうえば調査は難しい

なのは「でも、これで二回目って…」

さっきの行動から万更嘘ではなさそうな気がするが、あの動体視力に反射神経、武術、射撃に対してのセンサーが異常に特化している気がしてならない

あまりにバランスが合わない…。 ストラさん、ひよっとしたら提督が絡む程の事情だから？

なのは「さっきのスバルの攻撃は…」

ストラ「乗せてきた力量に合わせて向こうの重心を引き込み和らげました。物理的なダメージだけなら少し痛かった程度ですよ」

なんて人だ…！
…この人それを模擬戦とはいえ、さも自然にこなしてしまったというの！？

ならこの人はやっぱり訳ありに間違いなかった

なのは（ミッドチルダでは珍しく体術に特化している。…けど）

推測が正しいならクロノ君の事情の線が高い。なら今は様子見が最善だと判断した

しかし魔法に関しては全く慣れていない…というか無謀過ぎる。多分本当の事を言っている…かな？

生憎だが魔力ダメージにまで考えが回っていなかったようだ

ストラ「後は、防護服の事でしたか。燃費が非常に悪いみたいですから。あっ自己責任が当たり前ですからお気になさらず」

なのは「でも、此処は機動六課です。防護服は身に付けて下さい。これは隊長命令です」

ストラ「…了解」

彼が不満そうだったが、頷いた

立場を弁えているのだろう

ストラ（面倒だな…）

バリアジャケットは非常に燃費が掛かる

あまり意味を成さない程度としか認識はないが、まあいいさ

一々付き纏われるより遙かにマシか

なのは「それじゃあ魔法に触れていない分、慣れない戦い方に戸惑っているという事だよね？」

ストラ「そうですね…まあさっきので粗方加減は判ってきましたよ」

一応実弾に切り替えられるのだが、魔力弾に慣れておくに越した事はない

元より…ミッドチルダでは質量兵器の危険視によって、物理的な兵器も減少…いやほぼ消失しているみたいだからな

実弾は使っても魔力を纏わせ非殺傷設定に留まらせるのがセオリーか

まあ、まだ実弾が使える分には有り難いが…

致命傷を外す腕くらいなら自信はあるんだがな？

なのは「けど、それでCランクかあ……」

ストラ「何かご不満でも？」

なのは「ううん、逆かな？なんでもないよ」「

いや…何か考えたな…

まあ大した事ではないだろうと、その場は気にしないことにした

なのは「今日はもう時間が時間だから訓練はおしまいなんだけど…明日も来れそう?」

ストラ「ええ、遅くなった分それなりに整理しましたから」

朝練から参加したいので間に合わせますよっと言ってきたのが決定打だった

なのは「うん!じゃあ待っているから」

お疲れさまでしたと告げると二人共、移動を始める

~~~~~

シャワーを浴びてから制服に着替え直し、自室へ戻ると同室の相方がこっちに気付く

すると缶を軽く投げる

ヴァイス「お疲れさん」

ストラ「ああ、お疲れ」

サンキューっと軽い口調で返すと缶のプルチックを開けて一口飲む

無糖、ミルク無しの独特の味わいが口の中に広がる

無論の事、珈琲だ

ヴァイス「少し遅いと思ったが、何かあったのか？」

ストラ「八神部隊長からの要望でね…訓練に参加してきたのさ」

ヴァイス「へえ…そりゃあ大変なことだ」

ヴァイス・グランゼニッケ

陸曹だが同室の相方でもあり、今のところタメで話す唯一の相手だ

ヴァイス「だけどお前さん。訓練するってことは前線に出るのか？」

ストラ「さあね。まっそうだった時はヴァイスが操縦するストームレイダーに乗り込む事になるんだろっが」

中々癖の有りそうなポジションだなっつとヴァイスは笑いながら言うてくる

それをフツ…と鼻で笑うかのように返すと缶の中身を飲み干し、室内から出ていこうとする

ヴァイス「どうした？」

ストラ「雑務をやらんと都合が悪くてね」

ヴァイス「今から？…それは地味にきついな」

既に21時をまわって、殆どが就寝に入りシフトが入れ替わっている頃だ

「そういう訳だから気にせず先に寝ててもいいぞ」と告げると、室内から出ていく

ヴァイス「…しょうがないか、酒はまたの機会だな」

パイロットが不謹慎な事を言っているが、その吐きには誰にも届かなかった

……  
……  
……

ストラ「……………」

カタカタカタカタ……

しばらくはこんなサイクルってところか

電子的キーボードみたいなパネルに器用な手つきで仕事を進めていく

明かりはそこだけ……  
ひっそりと、確かなテンポだけが静かに奏でていた



ストラ「……」

ただ黙りとタッチパネルに触れる

それが本来やるべき仕事というわけではない

既に仕事といった雑務は終えた

これは暇つぶしなのだ

検索機能というのは中々悪くない

仕事の中、ふと試しにストラ・イクザムと自身のNAMEを打ち込んでみると、合わさった文字やそれに近い検索結果が割り出される。自身の事に関してはただの一般的局員となんら変わり文字列だった。ただ、魔力値まで強調されてるみたいに表示されておりと書いてあり、その運用…試験の下手際まで載っていた。

…なるほど、魔法に発達した世界で管理局での魔力の見解とは重要な要素に入るらしい。

クラス分けなどされて部隊に入れられるランクも制限がある。…最もな所、魔法の資質を重要視される要因だ。

後、目についたものは希少能力といった個有能力。

こいつは稀にある個人の特殊能力のようなもので、使えるものもあれば使えない能力など…。その種類は幅がわからない程ある。

ストラ「…眼が、疼くな」

痒いという意味ではないし、疲れた訳ではない

切り替えるか…

ストラ（そういえば…）

元の世界に関係があるワードを他に打ち込んでみたらなにか出るの  
だろうか？

250

時刻は既に1時を回った頃

その事に興味が湧いてきた

クラウディアの局員が調べ、そこで止まった事であったが…生憎と  
最低限の情報をくれてやっただけのこと。

## 検索ワード

“非公式情報部” “改造種” “Nハンター” “イブリッド”  
と説明がない限り、捉えにくい何か意味合いのある関連キーワード  
なそれらを検索に掛ける…

…  
…  
…

ストラ（やっぱ…無理か？）

ひたすら関連しそうなキーワードを目で追うが、思っていたような  
類は出ない

代わりに、人工的に作られた“人造魔導士”  
これが気掛かりだった

文字通りなのだろう…

発達した人の手（技術）によって高い能力を持った魔導士を人工的に作り上げる

メディア、ニュースなどから批判的な意見からこういった存在は否定的にされてはいるが、…なるほど

ストラ（確かに…生み出す事自体は可能だろうな）

大体そういった領域ならば必要性や探求心は同じ人間ならずあるのがセオリーだ

素体や、エネルギーといったような類たぐい、十分な施設や資金

この辺りが特に揃い、当然ながらも医療や生態などに優秀なマッドサイエンティストも加わってさえいれば、例外を除き…生み出す事自体はそう難しいものではないはず

…人間は欲深く、知恵の回る生物だ

この世界は十分に実施可能な範囲で、研究さえされているならそういった類…既にそんな存在がいるかもしれない

いや、…撤回しよう

既に

“存在はしているのだ”

ストラ（少し、思い詰め過ぎたか？）

気分転換に検索キーワードを人名に固定することした

人の名前とは意外と面白い

逆に色々と関連ワードが多過ぎたり、意外性があるから暇潰しには持ってこいだったりもする

検索キーワード

人名“ライク・S・カノン”

ストラ「like？」

まあ…ムチャクチャ関係のないワードが多々あったと

その後、ナナシとかカキツバタやらと色んな文字で探してみるが一向にこれといったものはやはり出ない

そんな事も合つてのことが、だいぶ時間も頃合いになってきたので最後にしようかと思っていた時だ

検索キーワード

人名 “ギア・クロウ”

ストラ「…………なに？」

ガタツ！

咄嗟、ストラが思わずデスクよりに体重を掛けその様は目を疑った  
と言わんばかりの様子だ

関連ワード

「急に現れた黒き騎士！管理局のシグ姉も驚きの実力者  
ギア様！」

「管理局員約30名を峰打ちで全滅させた男 検索ワード：ギア・  
クロウ」

「ギア・クロウ 聖王教会へのテロ行為を未然に防いだ



一般功労者：」

「「なんとおー！？」思わず…同員はそう言わざるをえなかった  
検索ワード：ギア・クロウ」

その他検索ワード数

50数件程…

ストラ「あいつ…何してんだ？」

なんでこの世界にいるんだ？ということよりあまりの数の多さに突  
つ込みを入れたくなった程。思わず口が開いた

映像もすっかり残っている…

それらを元に最新情報を片っ端から回覧していくが、ニュースに上  
げられた内容のようで、二年ほど前にあった事柄らしい

その名前が堂々と表示され、ほっとく訳にはいかなかった

なにせ…

彼の名を持つその人物とは

俺の居た元の世界の住民にして、表、裏舞台で数々の功勞を上げた  
内一人の人物と写真にかたどった映像が全くの同一人物

ギア・クロウ…あの世界の戦場でその名を知らないものなどいない  
だろう

…さすがにこれ以上此処にいて見つかったら絞られるよな？

思わぬ朗報が入った。誰の悪戯か今は感謝してやろう

接触すれば大いに報復してやる。彼にとっての一つの愉しみが増えた事を喜んだ

時刻は4時をまわっていた

三日：経った頃か

新鮮な空気とまだ少し寒さがある中

森林に設定されたフィールドで、今日も朝練が続いていた

いつもの訓練とは若干変化がある

F W達の中に一人：上半身が白いTシャツに下半身は黒い長ジャージ型が良いせいか、腰に身につけたホルダーが似合っていた男性

彼：ストラは息切れして少しばてた様子のF W達を見るなり怪訝そうに問い掛けた

ストラ「大丈夫か？」

エリオ「っ はい…大丈夫です」

少年がしっくりくるエリオ・モンディアルが返事をした

たかが軽い運動程度にしか思ってなかったのだが、どうやらまだ身体作りの最中の子供には差が大きかったようだ

ヴィータ「お前らな…昨日今日から参加したこいつに負けてんなよ」

ストラ「…」

こいつ＝

スターズのヴィータ副隊長は威圧感というかなんというか…少々ガサツ…？

高町教導官の訓練を手伝うのはまだ先の事らしいのだが、時折様子を見に来ているらしい

身体はあれでも腕っぷしはバツチりだとか

「ギロツ」

ヴィータ「…何か言ったか？」

ストラ「いえ、…どうかなさいましたか？」

ヴィータ「ならいい…」

…感は鋭いようで

急に振り向くから内心でほんの少し驚いたよ

なのは「にやはは…それじゃあそろそろお昼だし、シャワー浴びてからお昼にしようか」

「「はいっ!!」」

ストラ（元気良いねえ…）

そんなFW達を見て少しだけ笑みを浮かべた後、デバイスの端末を開き本日の予定を確認しながら一人さっさと隊舎へ戻ろうと移動しようとする

なのは「あっ、ちょっと待って」

むっ？ なにか用があったか？

呼び止められて振り返り、教導官である高町なのはと視線が合う



…大抵彼女と話をする時なのだが、何故かニコツと先にそんな笑顔を見せる

彼にはそれがよく解らなかった

彼女が何故ここでそんな風に…  
活きの良さそうに振る舞うのが解らない

見かけはいつも活が掛かっているように見えるが……………

まあ…他人の事などどうでもいいか

彼女が近寄ると訊ねてきた

なのは「お昼、もし良かったら一緒にどうかなって」

……はあ？

…こいつは何を言ってるんだ？

ストラ「遠慮します」

以上の率直的な感想からキツパリと答えた

それを言うためだけにわざわざ聞いてくるなど…彼女の面倒見が目立つ中に加わるなど全く距離を取れない。では、大体そういう意図なんだと目に見える

悪いが興味がないし、それなら敷地の少し段層や屋上で背景を眺めながらいつも通りに暇を潰していたほうが遥かにマシ

ストラ「一人の方が気楽なんで」

なのは「あっあれ…」

「失礼しました」

一言だけ返すとその場を置いてさっさと戻って行ってしまった

あまりにも素っ気なかったので呆然と置いていかれてしまっていた  
りする

ヴィータ「あいつ…感じ悪いな」

なのは「ううん、多分都合が良くなかったんだよ。きっと」

ヴィータ「そうかあ？…あの様子は馴れ馴れしいのが御免だった様  
子じゃねえか」

なのは「そんなこと言っちゃダメだよ。ストラさんは前戦メンバー  
の分の雑務も半分以上兼任してもらっているんだから」

なのはの言い分に呆れかけていたヴィータが僅かに動揺した

ヴィータ「うっ…それはそうだけだよ」

スバル「えっ！？そうなんですか？」

それに驚いたのはスバルだけじゃなくFWメンバー全員だ

なのは「うん。そのおかげもあって私たちも訓練に集中出来るし…正直助かっているくらいだから」

ヴィータ「…やる事は早いんだけどな」

ため息をしたヴィータも手を借りた事があつたようで、しかし何処か気に食わない様子だった

とは言ってもヴィータが率直に言ったように好意を持っている様子には見えなかったのも確かにその通りだと…なのはは感じていた

キャロ「…ひよっとして、それで訓練に参加している時間帯がバラバラなんですか？」

とキャラロが言う

なのは「そうだね。まあしばらくはそんな感じが続くと思う」

ヴィータ「あの態度はなんとかしろよ」

いつの間にか話の大部分が彼を占めた話に。他愛もない話をしながら一同揃って移動している

そんな中

エリオ（でも…物凄く強い）

秘かにまだ待機モードにしていなかった相棒ストラダをギュッと握り締めポケットとしていそうなエリオの姿をキャラロが見る

キャラロ「エリオ君、どうかしたの？」

エリオ「あっ…うっん何でもないよキャラロ」

やや恥ずかしさを残しながらもその場を誤魔化した素振りを見せる

隣にいたキャロを見ていたのが疑問に思わせたらしい

今朝の訓練が始まる前の早朝の事だが、エリオは他のFW達より準備が早く待っている事が多い

先に訓練場に向かうのも良かったが、一人で行くのも気が淋しい。だけど今行くのは少し早いと思っていた

そう思っていた時

269

いつのまにかストラさんが隣に居た

正直エリオは意外だと思った

ストラさんが訓練に顔を覗かせるのは殆どの所、訓練の途中からだ

朝練にも参加はしても雑務の都合か遅れて参加する

そんな様子が続いていたから今朝はいつもとは違った朝を迎える事になった。たった数十分の出来事だけど

実はこの間に、簡単に手合せるといった事があった

突然それを言い出したのはあのストラさんからだ  
今暇か？訊ねられて：そんな事から武器を奮っただけの曖昧だが簡単にした手合せを行った

エリオとしても喜ばしい事だった

何せ、此処で毎日訓練するのも自分以外が女性だと少なからず控え目になってしまうそついう意識があった

だからこの誘いは単純に嬉しかった

しかし、エリオはFW達の中でいち早く知ってしまった

型の良い突きをあっさりと捌かれる。相手の構えは崩れない

どうやら攻撃を受けてくれるみたいで、エリオは幾度も挑戦する。しかし、自分自身もNGとってしまった程の隙を度々晒してしまう

「踏み込みはしっかりな」

一つ助言をすると、エリオを待つストラは軽くファイティングポーズを取り足でテンポを作る

落ち着け……。相手は素手だ。けれど……何処に隙がある？



最初から大きな壁にぶつかった……ストラさんには声を掛けるだけの余裕があっても此方にはそんな余裕はなかった

防ぎ、同じ構えに戻る。こんな状況ばかり作らされてしまい流石にその自覚も強くなる

これは相手の型を崩す手合わせだ……と

確かに、ストラさんが助言した踏み込みは重要だった

より大きく相手の万全を崩すのは特にタイマン戦で重宝する技術

逆に攻守を入れ替えたら……と、此处で明らかな差があった事を思い知らされる

ストラさんの体術は身体能力を強化しても、障壁を張っても一撃一つ一つが非常に重い

バリアブレイクはあつという間だった

だが、ストラさんの武器は素手。リーチや範囲からも格闘戦にも苦を要する

…これは正直精神的にきつい

魔法の優劣の差はあったはずなのに此処まで差があるとは…

だけどストラさんは悪くない動きだと…そう言っていた

なぜ、そう言いだしたのかはわからない

単純に誉められたのか貶されたのか…後者とは思えなかったが、その場では理解出来なかった

結局そこまでの事であつた

今はストラさんの事が凄く気になつ

お昼

前戦メンバーの殆どが昼食を皆で頂いている中、部隊長の八神はやはり一人部隊長室にて唸っていた

はやて「うーん…どないしようか」

新品同様の机に寝たたれるようなその様子は隊長というよりただの女の子だ

…ついでに補足を入れておくが、前にはあの人物の詳細データが映し出されている

取り敢えず…ということでもロングアーチに席を置いているのだが、事件が起こった時に彼を何処に置いておくか…

目の前のデータはなのはやシャリオが作成してくれたつい最近の新しい物

あの二人から情報管制や戦闘と共に十分こなせるだろうと太鼓判付きなのだが正直迷う…一度、シグナムにも意見を聞きたいので到着を待っている次第だ

しかし…クロノ提督が半場押しつけてきた辺り彼の事は気になっ  
てはいた

それは頭の片隅にといった程度にしか認識してなかったのだが

どうも彼は人付き合い…即ちコミュニケーションが上手く取れていないらしい

とはいっても堅い人らしいので仕事とプライベートがきっちり別れているだけ

なのでそれほどといった事ではないが…

ゆっくりと姿勢を直すと執筆を再開し始める

…

シグナム「失礼します」

頃合いにシグナムが室内にやってきた

ええタイミングや

はやて「急に呼びだしてごめんな」

今しがた執筆を終えて筆を缶へ戻す

シグナム「いえ、帰りの途中でしたので。それで…私に見てほしいものがあるとお聞きしましたが？」

はやて「そうや、シグナムの意見も聞きたくてな」

少女…説明中……

シグナム（ストラ・イクザム二等陸士…あの時の男、か）

訓練や模擬戦している男の映像を真剣な様子で見っていく

はやても所々に自分の見解を入れて粗方説明し終わると、喉が乾いたのか予め用意した飲料水を飲む

つと、ここでシグナムが映像の一部を巻き返す。

気になったのはスバルとティアナとの模擬戦だ

シグナム「この動きは…」

必要最低限の動きで相手の攻撃を躲す動作

この男は確かな技量と良い洞察力を持っている

彼を一言で表すなら

武人と見た

別にFW二人では話にならないというわけではない

寧ろ単純な魔力、魔法の差ならストラ二等陸士は明らかに分が悪い

これらを観た限りでは、このイクザムという男の魔力自体は彼女達  
…いやFW達と比べても、低い基準に当てはまってしまおう

しかし

男の意識は常に相手に有り

体術やその身体能力は非常に高く、実践にあれだけ綺麗にこなせる  
動きは古くからの武人、達人の成せる業だと私は見ていた

相当な鍛練や経験でも積まない限り、普通…魔導士相手ではその技  
量は全く活かせない

管理局では滅多に見ないタイプにして、魔導士としての才能や能力  
が優先されてしまっている現状から中々いないのだ

実はこの時、はやては苦笑とばかりに何も言っていないがシグナム  
に“スイッチ”が入ったと確信している

不適そうにもシグナムは嬉しそうに「フフフフ…」と吐いているの  
だ。これは後々ストラさんに南無…を思わざるをえない

はやては程々にな…とだけ言っておいた



確かに魔導士としての素質ではないが、熟練仕切った動きなのは明らか

テストロッサならどう認識するのだろうか？

はやて「それでライトニング副隊長としてはどやろ？」

既に結果が出ていそうだが頃合いに問い掛ける

当然ながら回答は早かった

シグナム「戦力としては問題なさそうです」

それに中々の処理能力も持っているので、どう回してもイクザム二等陸士ならこなせるでしょうとそう推進する

はやて「うん！シグナムも同じやな　そんなら：ストラさんには現場での情報や通信の中継、場合によっては前戦メンバーと一緒に作戦に参加してもらうことにするわ」

もちろんその位置は前戦メンバーとそう変わりはなく

彼のデバイスは射撃型ということから支援も可能なはずだし、思った以上に彼は万能に立ち回れるはずだとはやてはそう睨んでいた

だってそうだ

はやてだって彼のそのリプレイモニターを見れば、分かってしまうのだ。

明らかに“強い”

っと

以前の彼ならば、こんな糞面倒なお座り手作業もといデスクに居座つての作業など既に放置プレイを行使して、とつとと戦場へ出向いていただろう

それほど面倒な事だ。当初はあるところで得た教養を最初だけフルパワーで発揮し、飽きたら途中で部下に投げた

単純だが、首領という変人が寄越した大半が始末書なソレは一部屋だけで済む量じゃなかった

順を飛ばした待遇面の裏腹には、一般では耐えられないそんな酷な待遇であった

それでも半分以上は処理したんだ。感謝しろ

それも当初の話だが、今頃なら更に酷い事になっているはずだ

以来こういう事をやっていなかったが、管理局に入ってから書類を再び扱うようになった

この様子を“あいつら”が見たら、顔色を変えて「明日は首領がやってくる!？」とでも言われそうだな

…えらい嫌われ様だが首領はそういう奴だった

自称

この世のミステリー探求者にして

端からは

テメエの存在そのものが、ミステリーなあの糞詐欺師畜生変人変態野郎は他人任せにし、何処かへ姿を眩ますフリーダムだった。支部の一つを削る羽目になった以上プライバシーを探る時間は今頃復興事業に当てて忙しい事だろう

無論俺も自由人だが。縁はそれまで

…カタカタカタカタ

ストラ「……………」

カタカタカタカタ……

しかしもはやそれも関係ない

それに今やっているこれは仕事じゃないし……

カチッ

ストラ「これで良いか」

間違っても書類をやっている訳じゃない

お手製ストレージデバイス“ハウンド”のデータを少しいじっているだけだ

本日も訓練を終え、回された書類を始末した後だ。深夜をきつた暗い真夜中の中で一ヶ所だけ虚しく光る

既に：何日目の夜だろうか？

こんな誰もいない夜間に毎度デバイス調整に端末を利用しているが、密かに使用端末の経歴は残る。勿論利用後はちゃんとその記録は抹消している

管理局が管理不足、又は平和ボケしている気がしてならないが、これも私用の為

：まあ、ストラのやってる隠蔽はばれたところでそういう事をやっている事はいけない訳だが、中身は大した事じゃない

情報管理は習慣に近いから一目を避けるようになっていた。元々そういう組織にいたからでもあった

ストラ「…ふむ、便利なものだな」

片手でゆっくりとキーボードやマウスを巧みに使い、一時的にSL EEPモードにして直結させたデバイスに変更点を入れていく。時々視線が本へと移る…

メンテと出力調整つといった所だ

タッチパネルだと何かとやりにくいから機器をちょこっただけ借りて漸く目処がたっただけのこと

自分の武器の手入れぐらいは欠かさずチェックするのは当たり前だと思っっているからだ

コッコッコッ...

誰かの足音が響く

静けさに染まった廊下からだ

ストラ

(これは…ばれたか。 …しかもよりもよって)

次第に音主は此処の灯りに気付いたか中へ入ってくる

なのは「あれ?…ストラさん?」

この仕事場に入ってきたのは、まだ教導用の制服を着込んだ高町なのはだった

こちらを見かけたのならば、やはりというものの隣にやってくるのだが



やたら…足取りが早かった

なのは「こんな夜遅くになにをしているの？」

ストラ「今は…デバイスの手入れですね」

ちよっぴりばつの悪そうに視線を画面に戻す

一応上官からの注意だが、一人でいる時だけの有意義な時間を阻害されているのはなんだか気に入らない

なのは「ダメだよ。休める時にはちゃんと休まない」と

ストラ「いつもの事ですから気になさらないで下さい」

素直に従って撒いておけば良かったと…この一件後渋々思った

なのは「それでもしっかり寝ないと体に良くないよ」

ストラ「わかりました。気が向いたら寝ることにします。ですから高町さんはもうお休みください」

なのは「全然分かってないじゃないですか!？」

単純に引っ掛かるかと思いきや、そう簡単にはいかない

確かに寝ると言ったが、気が向いたらだ。つまり俺の都合次第

高町さんはガミガミと用は早く寝ると言ってくる

倍返しのなツッコミに、段々めんどくさくなってきた

ストラ「チツ……」

なのは「!」  
いま、舌打ちした!」

全く聞き入る気はないと観たのか  
彼女の顔つきが、なんだか妙に鋭くなった

彼もまた、なんとかする一手を考える

深夜の勝手が効きやすい時間帯はそれだけ自身にとって有意義なものとなる

特に情報など、局の仕事と同時間では調べにくい

なんとかして身を退いてもらいたかった

ストラ「気のせいですから気になさらずお休み下さい。ちゃんと寝ますから」

とはいえ、こんな事ぐらいしか思いつかなかった

なのは「…うん、分かった」

ストラ（おっ？）

意外な事にも渋々しながらそう返してもらえたのが意外だった

ストラは心の中で（フツ…勝った…！）と舞い上がった

なのは「じゃあストラさんが部屋に戻って休んだら私も休む」

ストラ「…」

見事にパクられた

パクるなど言い返そうとしたが、それを言っても仕方がない

寧ろ言い訳にされる可能性もあるわけで、戻れやら早く寝なよと一々指図されて話し掛けられる辺りとにかく鬱陶しい事この上なかった

側の席によいしょっと座り始めるとどうやら本気で有言実行に移したみたいだ

だが甘い

その程度で「はい分かりましたよ自室に戻ります」などと、俺は断じて言わない

ストラ「わかりました。…お好きになさって下さい」

結果

根比べ

……

……

……

意外だった

無愛想だが、キッチリと仕事をこなす彼はてつきり仕事人そのもの

かと思っていた

だが今はどうだろうか？

少なくとも上記の人には全く当てはまってないもう1つの顔を晒している

少しだけ不機嫌そうだが、ストラさんは前の複数のモニターに釘付けなので彼からは振り向かない限り見えないが、なのはが後ろで驚きと感心、そして疑問混じりになっている事には気付かないだろう

なのは「…ひょっとして、それ毎日やっていたの？」

ストラ「ノーコメントです」

一応返事はしてくれるが本当に無愛想

電子パネルに切り替えて一定の時間が経つ毎に画面が次々と切り替わる

中身はほんの些細な記事や事件、誰かの書き込みなど…複数のモニターを操りながらすぐにその画面が切り替わる

大抵が解決した事件の事ばかり開かれているが、なのはには解せない

かった

なのは「ねえ、何を調べているの？」

ストラ「今は興味が湧くものですかね」

こんな様子である

何を考えているのか、それともからかっているのかさっぱりわからない

なのは「それ…楽しいの？」

ストラ「ええ。世間離れでしたし。でなきゃ管理局のつまらない仕事なんてやってませんから」

また一つ、画面を切り替えながら吐いた

つとストラがため息をつく

ストラ（こいつ…五月蠅いな）

今のストラにとって彼女が鬱陶しい事この上ない

だが、なのはからしてみれば今のその言い様はひどいものだ

なのは「むう…じゃあストラさんはなんで管理局に入ったんですか  
」

その場の温度が少しばかり上がったような気がする

いや…

彼女に、ほんの少しだけお熱が入っただけだ

ストラ「……………」

なのは（あっ…あれ??）

さっきまで大雑把でも何かしら返答をしてくれたのに今度は黙って  
しまった



何か気まずい雰囲気を漂わす室内は、しんと静かになり…いつものまにかタッチパネルを操作するストラのその手も止まっている

ストラ「少なくとも…手を貸す事が恩返しだからな」

なのは「…へっ？」

ストラ「ああ…気にすんな。正直糞面倒な話、だが…俺がそうでもしなきゃ気が済まない。ただ、それだけ」

とは言われても、気になるところだ

…あれ？

初めて聞いたかもしれない

比較的、丁寧な仕事人が第一印象な彼にしては今のその口振りに変わった違和感を覚える

いや、違和感というのは敬語の方だ。今の少しタメになった言い様の方が、なんだか「彼らしさ」があった

……気になる

なのは「ところで…なんで敬語で話すんですか？」

ストラ「むっ？」

少しだけ目蓋がピクリと動く

その様子は、意表を突かれたか自覚をしていたからなのか…ほんのちよつとだけの変化があった

ストラ「公私混同は避けているつもりなので…」

なのは「でも公私混同って今やっているよね？施設の端末使っているし」

ストラ「……………」

うん？

……………自滅したか？！

素で躲すつもりだったが、最もなところを突かれるとは思わなかった

そういえば……………この人は一応教導官だった（マテ）

訓練の最中もだったが、意外と細かいところまで気を配っているだけの事はある

いやなに……………“後ろを見たら”巧く躲す算段が思いつかなくてね……………

なのは「ねえ、どうして？」

思考に耽っている間にも、煽るようにどづして？っと思いついてくる

目と目がしっかりと合う

まるでリスのように潤んだ目で大きくと、

ジト〜っとな…

ストラ「…上官に敬語は当たり前です」

不自然に視線を横へ逸らすと、苦し紛れに階級を持ち上げた

なのは「私は気にしないよ」

ストラ「私が気にするんです」

なのは「じゃあ隊長命令。普通に話して」

権限も用途がおかしいぞ!?

ストラ「お断わりします。そうまでして従わなければならない理由が私にはありません」

なのは「……どうして？」

マジでしつこい……！

これでは調べ事も満足に出来やしない

だから、言葉を選ぶ気も起きなかった

ストラ「他人ですから」

なのは「！」

それを聞いたらいかにも聞きたくなさそうな表情をされる

哀しみがあるように

だが知ったことではなかった

決して間違いじゃないのだから

端末を切ると席を立ち、制服を整えると一人扉まで移動する

ストラ「…ちゃんと部屋に戻りますから、高町さんも早く寝てください」

なのは「……………」

部屋から出る間に再び視線があっただが、そんな良い様子ではない

のは目に見えた

まあ当然だろう

然るべき所は親しみをもって接してきたのにも関わらず、彼は蹴っていたのだ

それはわかっている。だが、彼はそこで素直に頷ける性格は持つちやあいないし疑い深いし頭も良い

それに他人に助けてもらおう程弱かった覚えはないし、寧ろ一人でもいろんな修羅場を乗り越えてきた

そう、色々体験した…

だから解ってしまったのだ

彼に安心の出来る場所など生涯恐らくない

それは何故か？

…彼は既に理解してしまっている

彼は人間という生物を知り過ぎたのだ

だから今此処に居るといふ結果まで出てしまっている

だけど事がどうあれそんな人間という生物に興味を持った



だから気を許せる相手以外には距離を置きたいのだ

彼女は、悪くはない

少しだけぼうつと惚けていたが、冴えない顔は次第に戻る

なのは「うん。でも、心配してくれるんだから…良い人なんだよね」

他人行儀なのは、まだ信頼されていないから距離を開けられているのか

はたまた彼の事を知らな過ぎるのか…でも、

ああいう言い方はするも、嫌な人じゃない  
そう思ってしまった

まあ…こんな夜遅くまで起きていた彼が悪いのだが、眠気のカケラ  
もなさそうだったのは確かだった

なのは「うん、頑張ろう」

ちょこっとだけなのはに気合いが入った

珍しくしっかりと寝入りしてみると、すぐにわかった

過去を振り返った夢でも視ているのだと…

その世界は狩猟を中心とされ、それに伴った独自の発展が広がった

世界

様々な災禍に抵抗する為や、様々な手段を持って人は生き長らえて  
いるという生に実直する姿勢は何とも勇ましい

…だが、そんな彼らのライフスタイルにも多少の亀裂はあるものだ

人類同士の醜い争いもそれに含まれる

当然というのも変な話だが…あの世界にもある

夢なのか走馬灯のように見える一種の奇怪な幻想でも視ているのか

まあ…どうでもいいや

しかし懐かしさがある

人為的に変えさせられた人間が危険視され、その結果：彼らは歴史の中へと閉ざされた

彼らだって何もしなかった訳じゃない

人間と比べれば数は少ないし生殖力が恵まれている訳じゃない

それでは対して危険視される覚えもないのだが、ただの人間より優れた部分もある

単純なのは身体能力だ

総称は何通りもあつたが、ただの人と比べれば彼らはそれに飛び出ており特に戦闘へ特化していた

しかし能力は高いが生殖は劣化していた彼ら

次第に人間はその力を恐れ、ふとした事から一騒動が起こり…

彼らは絶滅種となつた

…どちらかといえば、世界に阻まれたと観ても良いんだがな…

感性ではそう思った

けどそうなるとも思ったからただで“やられてやる気もなかった”

ストラモクラウディアに関わる前は、その戦場のど真ん中で一人最後まで奮起していた

その時の光景が明晰夢にでもなっているような感じだ

いや…おそろくそうなんだが、

なんとも…

~~~~~

ストラ「なんとも…心臓を閻魔双刃でぶっ刺された感覚だな」

ヴァイス「よくわからんが、いきなりおぞましいことを言うなよ」

早々に吐いた感想に手頃な大きさのマグカップを片手にヴァイスが突っ込む

起床の第一声が心臓を何かにぶっ刺された感覚だと寝言でも普通そんなことは誰も言いはしない。強いるなら「眠い」「やら」「おはよう」

がベターなところだ

ヴァイス「珍しく寝てたから起こさなかったが、お前…朝練は？」

朝と言えどヴァイスが言うとおりに早朝のFW達が訓練する時刻からは1時間程経っている

ストラ「デバイスの2ndリミッター解除の試験日だと聞いていたからな…」

ヴァイス「ああ、なるほど。てっきりサボりかと思ってたわ」

二段ベッドの下段にて目覚めの悪い頭を覚ますように掻いているストラをからかうようにヴァイスは言っている

起き上がると周りをキョロキョロと何かを探していた

ストラ「そっぴゃあ…お前ってさ、…出勤要請が出ない限り暇なの？」

ヴァイス「いや、そういうわけじゃねえけど…ってそれ、昨日のサラミじゃねえか？」

ストラ「放置した分、乾燥してんな…‥‥‥‥‥むぐ、」

部屋の端に移動すると窓岸の壁からそつと外を覗く。皿に盛られた食物を片手に二指だけで呑気に摘んで食っていくその様子は、落ち着きがあるが雑だ

欠伸を立てながらまた窓から外を見やる。やる気なさそうな素振り
は、仕事をしている時の彼とはまるで別人

六課の中でこれを知っているのはヴァイスくらいなもんだろう

ヴァイス「不衛生だぞ」

ストラ「お前もさつき食つてただろ？」

フツと笑われると、ばれたか…と返してやる

別にただ注意をした訳ではなく、繋ぎ程度のしょうもないただの会
話だ

ヴァイス「しかしまあ起きたかと思えば、…朝からそんなんじゃあ
折角の良い晴れ日和な一日が、ろくな日にならないだろうが」

自分で言っておきながら、最もな事だたとヴァイスは我ながら思った

言いたいことを言ったからヴァイスは満足しているのかとストラは
そう捉えると再び外を観る

ストラ「……まっ、目が疼くからそうなんだろっな」

最後のサラミをパクリと平らげる

今日も蒼そらは快天なり

~~~~~

男の身支度など早いものだ

あっという間にいつもの仕事人になると、まだ訓練しているである

う訓練場へ移動する

だが、いつもの訓練着ではなくキチリと締まった制服だ

これには訳がある

後で八神部隊長の付き添いで、この世界にやってきてから何度か耳にした“聖王教会”へ行く事になっているのだ

いわゆる護衛を兼ねるのだが、おそらくそれだけじゃない

護衛はただの名義で、本命は…個人的な事柄から俺に用があるのか？…まあ、あくまで考察だ

思い当たる節はあるのだが…流石にそれはないと思いつ返す。しかしならばわからん…突然の事で良ければ一緒にきてくれへんか？と言われたのだ

妙な気もするが、部隊長の要望だ。損はしないから了解しただけ

意図がわからないがほぼ一方的な通信だった為に聞く前に切られた時は啞然としたものだ

訓練場に着くと、まず始めに目に入ったのは数日前にしつこくまとわり付いてきてた教導官の高町なのはがバリアジャケットを身に付けた状態で訓練に組み入っていた

実はあれからというものの、日が経つ毎に現在進行形でますますひどい事になった

彼女は事有る毎に当初以上に厚かましくなったのだ

同室の同僚であるヴァイスからはニヤニヤしながら進展でもあったのか？とからかわれるわ…男女問わず妙な視線も受けるし…

嫌ってくれて良いのだが、今の視線は何か違う。直感的だが何か違うのだ

それに、お陰様で最近は室内で読書するハメに……

本を読むのは嫌いじゃないが、日にちが経つとやはり飽きがくる

気ままに散策やネットを利用するのが一番良いのだが、案の定彼女と遭遇しやすい。夜遅くまで仕事をしているからだ

…いかな。あれこれ考えに耽っている間に朝練も終盤に入ったよ  
うだった

ストラ（あれだな。確か…シュートイベーションって言ったな）

訓練に参加はしても時々だ

だが大抵の訓練話は教官殿が一方的に、喋り始め…半強制的に繋げてくるので全く知らない訳じゃない。やり方をみれば曖昧でも何なのかはわからなくはなかった

フィニッシュといわんばかりにエリオとストラードが空中に浮いているその教官に目がけ一直線に突っ込む

その攻撃に早く気がついたようだったが、なのはは…防御に入った

ストラ（教導…ねえ）

ほんの僅かな間ではあったが…ストラもそれには気がついた。あの教官は確かに微笑んだ

煙と障壁で見にくいが衝撃にエリオが落下…いや着地した、対する  
なのは浮いている状態を維持していた

すると本人がバリアジャケットの胸辺りを軽く触れる

少し黒くなったケ所があるが障壁を貫いたらしいが…まあいいか

「Mission Complete」

独特な機械音がそう告げると、嬉しそうな歓声がFW達から聞こえたのだった

ストラ「しかし焦げ臭い」

その束の間にストラはすぐに愚痴った

スバルのスケートが原因だ

煙やばちばちと音が鳴り始めるから良くない音だ。不都合が起きたんだろう

案の定、スバルの近くにいた彼女達はすぐに気がついたが…

道中…、朝から晩までみつちりと訓練をしているせいかデバイスも結構ガタがきている。また新型やらとそんな話を聞いた

まあ、それだけ上達してきているんだろうなと他人事のように適当に返事を返していたが、不意に話題が変わった

何故か？…俺がこうして一緒にいることが珍しいらしい

ストラ（…おかしいな？何故怒られる？）

道中、一同揃って隊舎に戻る中…隣でガミガミ言っている高町さんに、怒られるというより文句を言われていた

なのは「待っていたのに…」

ストラ「そう言われましても…本日は八神部隊長との付き添いで聖王教会へ行かないといけませんから」

なのは「…でも、最近来ても訓練する時間が少ないじゃないですか」  
ストラ「これでも忙しいものですから」

ええ、いそがしくなりましたよ。夜中に貴女が見回るせいで、“色々”出来なくなりましたから

なのは「えと…じゃあ八神部隊長に相談しようか？」  
ストラ「いえ、そこまでするほどでもないですから」

つと此処で前にいたスバルが話しに滑り込むように入ってくる

スバル「でも、ストラさんの射撃テクニックは相当なレベルだってティアナが言っていました」

ティアナ「こっころら、スバル！」

慌てたようにティアナが突っ掛かるがスバルは楽しそうだ

なのは「へえ…」

スバル「どうやったらあんなに素早く対応して、的確に撃ち抜けるかってそりゃあもう部屋で毎日熱心に研究を…」

あつ…ティアナ、真っ赤になっちゃった  
byなのは



ストラ（いや……違うな）

…確信を持っているからはっきりしておくが、この娘の好意的な印象は周りにだけだ

…時折視線が合うとふいつと別を見る

その様子を言葉で例えるなら、“あんななんか絶対に負けないんだから！”と…この辺りならまだ思わせてくれる

当然だ、こつちの勝手だしそんなフレンドリーになつた覚えはない。ライバル的な表現ではなくもつと酷くした方。そう、ドロドロで最低な人という方向である模擬戦から続いている

あんなのは認めないって感じだった。そつちの意味合いで対抗心を燃やされている

ランスターの様子にナカジマが気になつて仕方ないのだろう…さりげなく双方を交互に見ていたがそれはバレバレだった

エリオ「それに凄く強いですし」

はあ…確か…、エリオだったな？赤少年まで話に加わってくる

ストラ「別にそう言われる程大した事じゃない。…それに観た限りですが、ランスターは指揮も上手いと思いますし…至って優秀では？」

なのは「確かに…そうだよな。

ねえティアナ、指揮官訓練受

けてみる？」

ティアナ「いいえ！私は今の訓練に精一杯ですから！」

そんなやり取りの間を見ると巧く逸らせたようで気が楽だ

隊舎の前までやってくると一台の車がちょうど視界に入ってくる

ティアナ「あれって」

良性の黒いスポーツカーといったところだが、FW達は凄い物を見たような感想だ

生憎ストラには、あれがそうか？とまるで価値観がわかっていないようだった

車の上の部分が窓までフルオープンといった所だろう。中には二人が、ドライバーは初顔だが内一人は八神部隊長だ

キャロ「フェイトさん！、八神部隊長！」

ストラ（！？）

はやて「ちょうどええタイミングやな。フェイト隊長、この人がイ

クザム二等陸士や」

そう指すとなんと複雑な気分だ

その容姿はさらりと長いロングヘアに金髪、スタイルも良い。どこかのモデルとかを思わせるが、生憎ストラ自身は女を意識しない性質だった

寧ろ彼女を見て、全く別人の事を考えていた

フェイト「お会いするのは初めてだね」

はやて「あっそやったの？」

ストラ「えっ？あっ…はい」

ポーカーフェイスでその揺らぎを見られる事はないが、ストラはこの世界へやってきて初めて本当に驚いた

ストラ「私も名前は知っておりましたが、面識がありませんでしたから…。確かフェイト・T・ハラオウン執務官デスタロツサでしたね？」

御挨拶に伺えなくて申し訳ありません…。と、礼儀に沿って簡単に自己紹介に入った

フェイト「あっ、そんなに畏まらなくても良いよ？」

それは私も同じだからと言うと微笑んだ

それをじいつと見ていたが見惚れた訳ではない

はやて「ははあ… さては見惚れてんか？表情が変わらへんし、意外にムツツリやなあ」

それを聞き、なぜか高町さんが後ろで反応（！）したのに真っ先に気がついたのはキャロ、後にスバルにティアナ

ストラ「まあ、そうかもしれませんね」

…と適当に言っただが、はやての早違いである

あまり時間を置いておく訳にもいかず、少しの会話の後に便乗する事になった

車内に落ち着くと前の二人はこれから向かう場所についての会話を始めた

主旨が飛んでいるので、話を聞きながら黙りと外を眺める事にした  
あまり関心が沸かないのも一つの理由だ

個人的には何故部隊長と一緒に聖王教会へ行かねばならんのか

“ヤツは”確かにそこに居ただろうが、それは二年程前の話。…流石に関わりはないはずだが

フェイト「信頼出来る上司って感じ？」

はやて「うーん仕事や能力は凄いんやけど、あまり上司って感じはせえへんな」

どっちかって言うと、お姉ちゃんって感じやな

はやてが言うとフェイトが「そっか」と答えた

はやて「まあレリックの仕事が一段落ち着いたらちゃんと紹介するよ。きっとフェイトちゃんやなのはちゃん、きっと気が合うよ」

顔は見えないが、まるで自分の姉のように自慢気に楽しそうに話す

フェイト「楽しみにしているよ」

はやて「んで、ストラさんにはこれから会ってもらおうかなって思ってるんで」

ストラ「分かりましたが…会談でしたらお邪魔になるのでは？」

はやて「そんなことあらへんよ」

そう言うと、何やら腕を組み始めた。うんうんと何に納得しているのかはわからないが満足しているらしい

はやて「教会本部なら見学にはちょうどええかなって思ってた」

フェイト「見学？」

それにはフェイトが疑問を持った

運転しながらだが、思わず声に出したといったところ

はやて「うん。ストラさんは、あのクロノ君が六課に増員として送  
つてくれたんやけど…。」

フェイト「どうかしたの？」

困った様子なのでフェイトが聞いてみる  
が、助け船を出すことにした

ストラ「あの…私事なので…ご説明致しますが？」

はやて「うん、…ごめんな」

フェイト「？」

そこまで言うとストラは悟った

正直自分の事は嘘っぱちなのでどうでもいいのだが、薄々感付かれ  
ているかもしれない…。と。まあ、最低限の肩書きと振りぐらいはあ  
った方がいいだろう

とはいえ、だいたいこの世界にも馴染んできたので簡単な糸口から話  
す事にした

…  
…  
…

フェイト「そうだったんだ」

車内で一人納得したように相づちを取るフェイトに部隊長であるはやても些細に理解したようだった

フェイト「でも、それだと苦労したんじゃない？」

ストラ「ある意味…強力な後ろ楯がありましたから」

フェイトとはやて、二人揃って苦笑した

粗方の事情を聞いた上で、半場強制力も掛かって結構際どいものが多いからだ

しかしストラとしては…あまり嬉しいものではなかった

はやて「なんかそんな行き当たりばったりだと、あの人と似てるかな…？」

フェイト「あの人？」

はやて「そつ、ギアさんの事や」

ストラ「！」



フェイトは頷き、後ろにいるから一人にはわからないがストラは視点がはやてにすぐ動いた

フェイト「そういえば、私は話を聞いたただけなんだけど…確か魔導士じゃないのにS・ランク相当の実力者に認定された人だよな？」

はやて「うん。シグナムも後押ししたんよ」

と、ここで話についていけないと思ったかはやてがストラに説明する

はやて「あつギアさんって人はちょっとした事件から知り合ったんやけど中々親しみが良くええ人で…。今は聖王教会の騎士をやってるんだけど…これから会うカリムの側近の方なんよ」

フェイト「信頼できる人なんだね」

はやてがいうやらその通りなんだろう。フェイトはそう思った

ストラ「…頼りになる騎士ですか」

だがストラは少し考え方が違うようだった

はやて「どちらかというの良いお兄ちゃんって感じかな。独自の流派も持っているみたいで、…確か我なんとか流だったかな？」

フェイト「シグナムも言ってた。…なんだっけ？フッフ（笑）」

ストラ「…ふっ」

彼もフェイトに続き思わず吐く

ストラ「…我身流ですよ」

はやて&フェイト

「えっ？」

いや、確かそれだ

だが、何故答える事が出来た？何故それを彼が知っているのかわからなかった

少しは話題になったものだが、彼…ギアという人の事など基本的なデータ以外、本当に詳しい詳細は局内では何故かあまり伝わっていない

世間が解る事は魔法に携わず、強者としての評価を受けている事

教会内なら多少はわかっているだろうが、ここでストラが言ってしまっているのは何かおかしいのだ

ストラ「確かに、その手の使い手ならば限定した空戦も可能みたいですし、アレの質なら此処でも遅れは取らないでしょうに」

フエイト「えっ、えっと…ストラさん？」

しかもそんな彼女達の思考を斜め上を通り過ぎるかのように、続けて話します。何か含みのあるその言語は先程とはガラリと変わり、…まるでそれを“知っている”と肯定しているようなものだ

しかし、まるで言葉にその場を支配する圧力があつた

それはあれだ。集会や議論の場などで言語が何よりも重大性を秘める独占力や説得力のあるような重圧に近い

はやて（なっなんなんや？…この人？）

当然、フェイトだってそう思った

今の彼は全くの別人という印象しか湧かないのだ

ストラ「気が向いたら、お話ししますよ」

まるで、彼女達の思考を読んでいたかのように都合を通す

そんな車内の雰囲気

スライドしていく外を見る彼の横顔を写した窓は

邪険に見えそうな笑みが浮かび上がっていた

~~~~~

立派な宮殿のとある執務室では様々と仕事を進め、今は筆を手に収めていた

そこに一本の通信もとい、空間モニターが清爽で金髪のこれまた美人とも言える女性の前に現れる

モニターに映っていたのは茶髪で短髪、それと修道院にありそうな服装だろうか？

「騎士カリム、騎士はやてに付き添いの方一名がいらっしやいました」

カリム「早かったのね。私の部屋に来てもらってちょうだい」

「はい」

カリム「それからお茶を四つ、ファーストリーの良いところをミルクと砂糖付きで、それと騎士ギアも呼んで下さい」

「畏まりました」

失礼のない手際で通信は切られ、カリムは筆を止め「よし」と言うと来訪者を待つ

まもない頃にノックの音が響く

カリム「どうぞ」

入ってきたのはマントを纏ったはやて一人だけだった

はやて「カリム！久しぶりや」

カリム「はやて！いらっしやい」

嬉しさが第一の久々の再会だった

シャツハ「あの、ですから私が持ちますから」

「やりたいんだから気にすんなって」

先程、カリムのモニター越しの相手をしたシャツハ・ヌエラは廊下を移動している中、渋々と隣の男性に対していう

シャツハ「ギアさん？それは私のお仕事ですから」

ギア「たまには良いだろ」

シャツハ「毎回やってるじゃないですか」

ギア「そうか？まあこれくらいで気にすんなって」

平然とシャツハの申し出を断る

シャツハはその様子にため息混じりで「まったく…」「っと片手で頭を支えた

カリムの執務室に辿り着くまで、シャツハが何度も仕事を取らないで下さいと注意する

が、全く気に留める様子はない

いや…寧ろ急に黙ってしまった

何故だかわからない。しかし…その顔つきは奇妙そうで珍しく真面目な面だった

通路の一角を曲がればカリムの執務室はすぐそこ

その一本の通路に前から歩いてくる局員を見かけた

一人の局員の男性だ

シャツハは見覚えがある

ついさっき、はやてと一緒にやってきた付き添いの局員だ

シャツハ「どうかなさいましたか？」

ストラ「待機してましたが、八神部隊長に呼ばれましたので」

シャツハ「そうでしたか、では、こちらへ」

ストラ「了解です」

そう返事をするシャツハが扉を開けて中へ移動する

その僅かな間に、騎士服の男性と局服の男性の視線があった

ギア「へっ？…えっ！？」

ストラと視線が合うと彼はほんの少し驚きの面に変わる

ストラ「…何か？」

ギア「あっいや悪い。何でもないから」

ストラ「…そうですか。では…、お先に失礼する」

何事も気にしなかった様子で中に入る

はやてとカリムに軽く御辞儀をするとシャツハが後押しし、ギアが中へ入ると早速はやての目に掛かった

はやて「まだ茶事に凝っていたんか？」

ギア「はやてが来るって聞いたからな」

はやてとギアがニカツと笑うとカリムが微笑えましく席へどうぞと案内かける

いつのまにかシャツハは退室し三人は三角形みたいに集まりはやてと間際の良い位置にストラはつつ立っている

カリム「それで、そちらの方が…」

はやて「さっき話した通り六課のロングアーチスタッフのイクザム二等陸士や。階級はそれやけど、中々ええ仕事をしてくれとんのよ」

ギア「ストラ・イクザム？」

ストラ「…」

ギア「…はやて、ちょいまって」

はやて「どないしたん？」

ギア「…」

ストラ「…」

ギアがストラをじつと睨みそれに時間を留める

対してストラも同様

この間に双方で頭の中の情報を処理しているのだ

いわば互いが互いを探り合っているということ

ギア「スト “ライク” ザム…。まさかと思ってたが……お前 “ライク” だろ？」

表情からでは素晴らしくポーカーフェイスを演じるストラ、しかし…その身のこなしでギアという男はある程度、いや…ほぼ確信がついていた

ストラ「ご想像に、好きな呼べ名でどうぞ」

ギア「いや……そうかわかった。ライク、後にしようか」

今は上官の大事な交流だ。自重した方が良かったが、再び独り言のように「そうか…」と吐く

あまり聞かれたくない事情になった為に、早いところカリムの用件を聞いて早々にトンスラが妥当なところ

彼はそう考えていた

はやて「別にうちの事なら気にせんでもええで？そやる、カリム？」

カリム「えっ？…ええ、大事な話は終えてますから…せっかくですし、お席へどうぞ。ストラさんも良ければお話を聞かせてもらえませんか？」

ギア（げっ！？マジか?!）

そう思いながらも茶や菓子をテーブルに置き、一歩二歩下がりがカリムの隣に留まると明らかに困ったような顔つきになるギア

ストラ「いえ、お構い無く」

対して席へ座ろうとはせずテーブルと間合いのやや下がった良い位置に立ち入る

それはあくまでも下っぱですよと主張しているようにも見えた

大変困ったシチュエーションである

カリム『はやて、…』

はやて『詳しいことは解らへんけど…二人は知り合いみたいやね』

それで二人に隠しての念話

カリムはストラの事を全く知らないから半場戸惑いがちだが、はやては両者を多少は知っている。無論はやても何が何だかまいちわからない

はつきりしている事はストラをライクと呼ぶギア本人が、彼に対して何処か慌ただしい事だ

ギア「これじゃ收拾がつかないな」

ストラ「貴方が撒いた種ですから」

目を瞑りながらさも当然のように吐く（言葉のトゲで刺してるが…）

ギア「つか、お前さ…、その口調はらしくないから普通に話せよ」

ストラ「これでも、貴方と違ってこういった立場の作法位は弁えていますから」

ギア「それは嫌味か？お前程の超絶英雄伝並みのパフォーマンスな
んで張れる奴なんてそうはいねえだろ？」

ここでカリムとはやてがまたまた困惑する

意味深だ

彼らの会話で少なくとも関わりがあったということに引っ掛かるが、
知り合いということの間違いはないだろう

この間にもはやてとカリムの間で念話での考察会が開かれつつ様子を
伺っていたりする

ストラ「はて？仮にも英名ある聖王教会の騎士である貴方にそう持
ち上げられましても、私みたいな“たかが一般管理局員”などにそ
れは愚問では？」

クスツと微笑しつつ、

あくまでも平然と対応してくる彼に対して

ギアに悪寒が走った

中々本性を晒さない奴に対し、その内自然と焦らされてくる衝動は珍しく嫌なものだった

その悪寒は本質をある程度理解しているからだ

だが、今更止まることはなく。寧ろ逆手に取って色々とボロを明かさせる方が後々都合が良いし、感情的にはそうしたい。しかし相変わらず…いや、それ以上にも増して質が悪くなった

そもそも“こいつ”の存在自体が、想定外なんだ…

ギア「それはミッドチルダという世界での話の事で…、…つかお前は一体“どうやって”こっちに来れたんだよ。そう…通常“有り得ない”」

ストラ「…それはお答え出来かねませんね」

今度は（　　）といった様子で悩ましげな反応をするストラ

それを聞くとギアは軽くストラに対し軽く睨む

嫌みつたらしい奴だ

疑心を蓄める一言には十分だったから…ならば口封じも兼ねた圧力を掛けていく

はやて（？、……なんで？それくらいなら…）

だってそれは…先程はやてやフェイトに話したことを言ってしまうばいい事なのに、彼はそれすら隠し…さも目を瞑りながらフツ…と余裕があるかのように口元を緩ませている

…想像以上になにかあるのだろうか？

端からやり取りを伺っていたはやて、それにカリムの頭の中は好奇心で一杯だった

双方の事情も詳細も表向きではなんら問題ないが、裏を持ち、まだらで此方でははっきりしていなかったからだ

ギアさんの事は多少の注目を浴びた人であるが、彼はこのミッドチルダ…ううん、この魔法を使う世界では極めて特殊でよくわからない力を使った異常な接近戦の達人だったからだ

はやて（ギアさんの拳動はストラさんに対して明らかに動揺していた…。そのストラさんは我身流うちゅうのを知っているようだった。…何処で知ったん？）

はやてやカリムが知らない事は散々とある

今もギアが話の主導権を握っているようではぐらかされていた。少なからず、此処で問い掛けてる数々の質問の意図は、既に食い違っているようにも思える

カリム（おかしい…。ここまでギアさんが取り乱しているなんて…）

カリムが思った。まさにその通りだった

ギア「成る程な…根本的なところでは、管理局に従事している訳でもないということか」

いかな…ギアも悟った

カリム「…」

ギア「だから偽る…いや、違うか、お前ならもっと堂々としているよな、…何故だ？」

目を見開くと腕を組む

睨み付けながらも内心は誤ったと。場が無言なのは彼からの返答を聞きたいからだ

フッ

ストラ「私を知る貴方の者ならばおわかりでしょうに…」

ギア「…あ？」

ストラから笑みが再び浮き出る
だが今度の笑みは、

ストラ「しかしながら感心しないな。おそらく大戦を鎮圧させた事から英雄とでも無駄に称えられただろう好敵手ともある者がナニをも迂闊過ぎる。ああ迂闊過ぎた」

ギア「…それでその言い様はなんだよ？」

やっぱキタよ…！

余計な一言の第一手

現状。ギアにとってはそういう言い様はかなり不味い

実際、隠し事をしているのは此方も同じ…奴の言葉のそれはおそらく先ほどまでの逆襲

開いたという事はリスクを測っていたかはわからんが、此処ではとりあえず問題ないと思っただか

経歴的には本当の事実にとどり着く事はないが、それは知る者がいないという前提条件。奴がいる事でそれが壊される

俺は込み入った事情で此処に居る。しかし此処にいる為にはある情報
報の隠蔽工作をする必要があった

仮にも公務員に近い立場や権限があるこんな所でだ。管理局が知らない偽り事 確実にこういう事は探る 疑惑有りに発展する

存在が有り得ない目の前のこいつの登場で、完璧だった工作がばれ
てしまうかもしれない

こいつは手順を誤ったな…

はやての反応がやけに薄いと思っただら、成る程：確固たる足場があるわけか…

ライクと呼べばはやては当然疑問にも思うだろうが、この様子では
…恐らくこいつ（ストラ）は余程良い足場を持っているのか？

つか誰だ支援者…誰がこいつを拾った…

ギア「お前…六課所属だよな？…：…階級は一等陸佐辺りか？？」

ストラ「いえ、数ヶ月前管理局に入局したばかりの二等陸士であります。聖王教会の騎士殿」

ギア「…おい、嘔吐くな」

はやて「…えっ？」

ストラ「嘘は言っていない。ただ、そう思うのなら調べれば良い。

…その分、面倒事ととばかりを受けるのは私ではなく貴方に間違いないですね」

ギア「…は？」

マジかよ…

なら今のこいつの結局の行動と事実とは、こいつにとって決して根本的にはマズい事に繋がる訳ではない？

…どんな状況なんだよ？

例え管理局がこいつのソレを知ったところで旨い話はあるかもしれないが、話がややこしくなるだけでロストロギアを所有した訳でもないし時空犯罪を起こした訳でもない。所詮彼らの掌中外の話になる…よな？

ギア（なんだこれ？訳が解らなくなってきたやがった！？）

更にだが、…寧ろ奴が探られるのも不味いよな？

……こいつが俺を知っている以上下手に出来ないし、相当めんどろな事になるぞ……

しかし、事実さえ知ってしまえば……それこそ互いに良くないという事だけは判るはず

だが、なんだ？解せない

奴は正規ルートか、懐柔せざるをえない状況下からちゃんとした手続きの下に管理局にいるんだろうが……

どの辺りが関わっているのか現状ではわからん。……こいつは明らかに分が悪かった

じれったいといった空気が散漫な中、いよいよギアの堪忍袋が切れそうだ

そんな空気の中、重い空気を裂く前触れにいち早く気がつく

カリム「変…ですね？」

意外すぎるところからそう響いた

ストラ「騎士カリムは、今の会話から騎士ギアと私の事をどう捉えていますか？」

それを何故ですか？とかそういう聞き方ではなく、いきなり本題を持ち込む…そんな返し方からはやてとギアが怪訝な反応だった

カリム「先程までの話はともかく、よく互いを知っているお知り合いの方…ですよね？どういった関係でしょうか？」

ストラ「敵対関係です」

ギア「さらっと言つなよ！つか仲間だろ？！」

ストラ（それ、…同意になるんだが？）

ストラ「では、好敵手にしておきましょうか。…そのギア・C・Kは…」

皮肉な事に、彼とは縁がありましたからね…とぼやく

ストラ「先に言っておきますが…私は管理局上層部との密談、そこから賠償代わりに主に入局（生活の保証）を等を受け入れ対価に承諾を飲んだ身の者です。…という前提の話になりますのでお察し頂ければお互いにとって幸いかと思われます」

はやて「ちょ！なんやそれ？ 私はそんな話聞いておれへんよ!？」

ストラ「そういう取り引きでしたので、調査をしたければどうぞご自由に…但し既に無かった話となっておりますので、責任は自己負担でどうぞ」

はやて「どういう事？ ストラさん…ちゃんと説明してな」

ギア（要は探れば管理局のお偉いさん方からいらぬ反感しか買わないだけって事か）

口止めされてるから話を遠回しにぼかし利益と不利益の差を垂らす事で、はやてやカリムに害がないように気遣うと

カリム「教会側としても管理局とは協力関係で在りたいので…わかりました。ですが貴方はそれで良いのですか？」

それにはやては気づいてなさそうだが、カリムは察したようだ

ストラ「構いません。……私がそれに巻き込まれる直前は名も知らない未開の管理外世界でそのギアを相手に殺しあい　　してましたから」

ギア「……………ナニ？」

カリム「そうでしたか」

それを聞いて納得をしたが、やはりいまひとつなご様子

ストラ「何か？」

カリム「いいえ、確か騎士ギアは騎士はやてと同じ第7&8管理外世界“チキユウ”出身者だと仰られておりましたので」

ギア（ぎくうっ！！？）

はやて「あれ？そやったの？…なんだ、意外な接点があつたんやね」

ギア「いや、アハハハハハハハハハ…」

少しばかり“過ぎた苦笑い”をする彼は、流石に心の底から笑えなくなつた

さっきのは関わりを同意させるため！？

誘導尋問かよ！？

これはライクの罠か！

ストラ「…へえ」

そんな中、奴だけ冴えているように見えた

錯覚だと思いたい。周りはニツコリだが（本心から笑ってない）、奴は（ストラ）ニヤリといわんばかりな…明らかに意味を示した反応だ

こいつ…、絶対に前もって調べてたな！？

管理局にいるんだ。ちょっととした事で俺の名前でも聞けば、当然、独自に調査はするだろう

否、“非公式情報部”の人間でもあった奴が、そんな美味しい…もとい、疑心な中身を調べ挙げないはずがない

ギア（英治の奴め、…いい加減な仕事をするから！）

これまでに何度か探られる傾向は幾度もあったが、本来…ギアという男はここまで言い様に引つ掻き回されるような人間ではない

寧ろ非常に優秀で、特に一部のカテゴリー内に定めた戦闘レベルは非常にハイレベルであり、彼の良い性格を含めたった数年勤めただけで同じ教会騎士からは常に敬意が表れている

仮にも…聖王教会騎士団の魔導騎士にして管理局本局の理事官でもあるカリム・グラシアがシャツハ・ヌエラ以外にも側近に置いている程信頼を寄せている人物だ

当然、シャツハ同様ボディガードみたいに彼女の周辺の警護や細かい雑務もこなせるどころか、危険性の高い任務やカリムの代わりに執務もある程度こなせる芸当まで備えている

カリムの人の良さからあまり過去の事を問われなくどうしようもない状況下だったので気にかからなかった彼だが…突然彼が現れた以上、今まで通りにはいかないだろう

カリム『はやて…』

はやて『うん、わかってる。…そんな訳あらへんよ』

ストラ（疑われてもおかしくはねえ…よな）

というか…んな訳で仮にも優秀な上官を誤魔化しきれぬ訳がない既に前もって調べた経歴（情報）と奴の様子からボロは明確だし、つか…今こいつが何の目的か知らんが、その“何かがある”は大体察しがついていたりする

表は只のそれで閉めているようだが…それぞれの思考は、見掛けとは裏腹になっていた

カリム（あのギアさんが…、焦ってる？）

気になって仕方なかった

彼に問い掛けた経歴など問答不答だが、後の紹介と実際の実績は教会内では驚異を揺るがすものだった

しかし、きつかけには十分過ぎた程であって何せ彼を知る人物は…はやての部下

当の本人も驚いているのだ。知らなかつたと見ていい

カリム（偶然…？、それとも……）

ギアの事がある程度理解しているからこそ、彼の焦りは何に対してからなのかわからないが…なにか秘めているような気がする。必死な様子が伝わりかねない

現に今、顔を手で支えながら溜め息をつく

はやて「あまりええ関係やないんやな？」

ギア「いや…そういう訳でも…つか、はやてはこいつの事を知らな
さすぎるよ」

ストラ「……」

はやて「そないなことを言われても……」

カリム（でも、このお方…。騎士ギアを謀った）

そくだ。いまさっきの話の流れで考えるなら、明らかハメ技

その中にいつの間にか疑問を思っていた私も加わっていた事になる
さっき、管理外世界だろう場所では敵対関係と言ったがさすがそ
の場のノリで突っ込んだかのように騎士ギアに修正させる…

あれは本音に違いない

違う言葉に変えて同意を決定付けた内容：確かに彼らの関係は半々
と決して良くはないように見え、そして話は騎士ギアによって直ぐ
に別の話題…イクザム陸士の話へと切り替わっている

つまり攻守攻防の結果となる

カリム（イクザム陸士ですか…）

この方…何者なのでしょう？

すると突然の事だった

.....

機動六課のデバイスルームに揃ったFW+なのは他数名にもすぐそれに気がついた

赤みを光らせたモニターランプや各機械にアラートと鳴り響いているのだ。気がつかない訳がない

ティアナ「このアラートって!」

エリオ「一級警戒体勢!?!」

慌ただしいアラートはエリオのいうそれだった

状況を確認するために端末越しの相手とは、留守を預かるグリフィス・ロウラン、彼が出る

なのは「グリフィス君！」

グリフィス「はい！、教会本部から出動要請です！」

通信が開かれ、別の端末モニターからはやてが映る

はやて「なのは隊長！、フェイト隊長！、グリフィス君、こちらはやて！」

一同がはやてに視線を合わせた

はやて「教会騎士団調査部が追ってたレリックらしきものが見つかった。場所は山脈狭量地区、対象は山岳リニアレールで移動中」

なのは「まさか……」

推測がたったのか、驚愕に近いなのは様子にはやても察しがついた
はやて「そのまさかや。内部に侵入したガジェットに、先頭車両の
コントロールが奪われ取る。リニアレール内のガジェットは最低で
も30体」

大型や飛行タイプのガジェットが出てるかもしれへんと続けて想定
される展開図を一同に知らせる

はやて「いきなりのハードな初出勤や。なのはちゃん、フェイトち
ゃん、行けるか？」

フェイト「私はいつでも」

ここにはいないが、全く別の端末モニターからフェイトの返事が聞
こえた

車に乗っていたらしい

なのは「私も！」

なのはも続いた

すると今度はFW達に問い掛ける

はやて「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、皆もいけるか？」

FW達「はい！！」

威勢の良い返事が帰ってきた

はやて「よし、良い返事や。シフトはA3、グリフィス君は隊舎の指揮、リインは現場管制」

リイン「はい！」

グリフィス「はい！」

はやて「なのはちゃんとフェイトちゃんは現場の指揮。機動六課FW部隊出動や！」

全員「はい！！」

一段と強い返事が返ってくると直ぐ様、指示通りに動きだす

ヴァイスなんて既にヘリポートに配備した輸送機、ストームレイダーに乗り込んでおりスタッフ同様準備を整えていた

~~~~~

先の会話の後、視点を再び聖王教会へ戻す

シャツハ「騎士カリム、突然のところ申し訳ありません」

デジャブなタイミングにシャツハから通信が入る

カリム「どうかしたの？」

たった今シャツハに、はやてを六課まで送ってもらおうかと思って

ただ

シャツハ「また…あの付近からガジェットの出現を確認しました」

カリム&ギア「！」

モニターがカリムに寄り話中

ストラ（…なんの話だ？）

周りの反応は「またか」と思わせるような様子

はやて「カリム…また、ということとは…前々回から廃墟地区で迎撃した妙なガジェットの事やね？」

カリム「ええ…、現場では検証作業に当たっていた騎士や局員の方が迎撃態勢に切り替えるようですが…でも、このタイミングでまた出てくるなんて…」

はやて「うん…しもた。今回、シグナム達は六課の防衛力に回しているから」

ストラ（妙なガジェット？

いや、それより）

全く関与してないが、部隊としての活動に集中している部隊長が関わっているなら話が変わる

今のところ、ガジェットの出現するところにレリック有り

との見解が立てられているのにも関わらず、六課内でこれといった対応はおそらくなかったはず…

ストラ（所属してからは訓練続きだったと思うが…。なら出張を装い内密にガジェットの迎撃をしていたとでもいうのか…？）

だとすれば

“気がつかなかった”などと、俺とした事がなんて“不覚”だった

のだらう

こっそり周りの顔を伺う

…ふむ

ストラ（それで今回、二方面展開になった。列車はFWが実戦で使えるか小手調べ。片や廃墟指定地区は原因不明のガジェットが何らかの意図で出現と推測するのが妥当か）

カリム「シャツハ、現場の状況は？ガジェットはどれくらいの数が確認されてますか？」



シャツハ「はい。ガジェットは前回と同じルートを進行中。現場検証に留まった騎士がこれから迎撃へラインを上げて当たりますが、敵の数は前回より多めの計30体程確認したと報告がありました」

カリム「まあ…！それは騎士の皆さんは大丈夫なのですか？」

はやて「いやあかん！列車側と数は同じやけど前回同様なら廃墟側のガジェットの強さが桁外れのはずや！最低でもAAクラス辺りを10名くらいまわさないと全滅してしまうで」

ギア「だったら俺が行くしかないな」

はやて「ギアさん！？」

まあまあとはやてを宥めるつつカリムに良いかい？と聞き「ええ…お願いします。騎士ギア」つと答えたカリム

ギア「現場にいるのは教会の騎士、とはいっても少数だし対ガジェット戦に適応しているわけじゃないからさ…。あっシャツハ、輸送

機の手配は？」

シャツハ「オートパイロット式の方なら終えていますよ」

はやて「うっ…でもあそこに出るガジェット、Aクラス級の戦闘力があるって…」

懸念があるらしい

そりゃ肩書きから猛者扱いだがそついう仕事は教会ではなく此方が担当である

369

ギア「何度か交戦はしたんだ。流石に楽は出来ないが状況が状況だ。ちよいと狩ってくる…（ストラを見る）……お！」

なにこいつわざとらしいご様子

ギア「そうだお前がいた！もしもガジェットに組織的な絡みなら正直キツいが。…だからはやて、」

ギアがニヤリと笑うとそそくさとストラの隣まで来る

ここまで解りやすい行動に思わず溜め息を尽きそつだ

ギア

「こいつを貸してくれ」

はやて「へっ!？」

ストラ「……」

向きも同じ。右腕からだがかっしりとストラの右肩まで手を伸ばすとバンバンと二回程軽く叩き

ギア（手え貸せえ……。はやての機動六課としての名目も教会との友好関係繋げるにも文句ねえだろ？）

ストラ（疫病神め。てめえ…何処のグリフォンだ!？）

ぎりぎりぎりい…と微かに鳴るが、片や無神経保ったはやて護衛名目で此処にいる人。もう片や教会騎士の人との間で目に見えない衝突が火花を散らしていた

お陰様でこいつらの先程までの緊迫感が、何処かいづれに行ってしまったようだ

はやて「あの…ギアさん？」

飛んだ発言に少しばかり困った様子で尋ねるはやて

ギア「はやてはシャツハに送り届けてもらえば良いわけだし、増援としてこいつを寄越してくれたらはやても面子は立つし、なんとかもなるから」

おまけにこいつ呼ばわりかよ…

ムツと軽く目を細めるようにストラはそう思った

ストラ「私の魔導士ランクはCである以上面子にすらならないかと思われませんが？」

ギア「…今はへり下らないで質が良い人材が欲しい。巨龍戦以来だが、徐々にコンビ組もうぜ！」

ぎりぎりぎりぎりぎりい…

…面倒だ

ストラ「空耳か？組んだ覚えもありませんね」

ギア「……………」

ストラ」……………」

カリム（これは…）

はやて（仲…相当悪そうやな）

流石にはやてやカリムもそれが分かったようだ

ギア「まあ…はやて。とりあえずこいつ貸してくれ。サポートにまわってもらおう事にするからさ。…それならいいだろう？」

はやて「それはええけど…でも、ええの？それだったら六課で待機してるシグナムやヴィータの方がギアさんにとって助かるんじゃないっ？」

はやては敢えて二人の名を出してみた

ストラ「任務なんかよりもどうしても黙ってほしい事を言いたいか  
ら連れていきたいと言っているのですよ…。おお、こわいこわい  
ボソツ」

わざとらしく聞こえる程度の声主から、まさかの横槍だった

ギア「…意外と手強いガジェットなんだからフォローマジで頼むよ  
“ライク” ……なっ？なっ？」

物凄く粘着しているような気もするが、…むむっと、はやてが唸り、  
カリムが微笑

そもそも呼び名が違うだけでも聞きたい事が散々あるが今は置いて  
おくしかないだろう

カリム「ストラさん。大変かと思われませんが、私からもお願いしま  
す」

切実にカリムも押した

そつだ。今は機動六課部隊長としてスイッチを切り替えなければならぬ

あまり時間も掛けてはいられない

はやて「嫌かもしれへんけどこちらは管理局や。ストラさんは行くか？」

ストラ「貴女が総隊長です。ご指示とあらば行きますよ」

とは言うもののストラとしてはなんて面倒くさい…といった心境だったりする

はやて「ならFWの皆とは勝手が違っけどイクザム陸士も出撃や！任務はギアさんのバックアップ。彼の指揮通り動いてや。それと中継の管制はグリフィス君にも要請を出しておく。防衛ラインを突破されたらあかんよ」



ストラ「任務、了解しました」

ギア（“部隊長”の指示は素直に聞くのかよ…！）

へり下った様子もなく部隊長に敬礼すると、カリムに頭を下げてからギアの退室を待つ為に控える

なんて変わり身の早い…

などと思っていたら

ストラ「後でデータベースへのアクセス許可を下さい。過去の出撃ポイントから回覧可能なところを含め特に戦闘経歴の全部」

それと一瞬だが、睨みつけアイコンタクト

「援護がほしいなら装備もまわせ」

「…其の方が早いだろう？」

「はやて」えっとよくわからへんけど。…全部だと時間が間に合わんよっ」

ストラ「倍速して見ます。問題はありません」

ギアは確信した

はやてはライクの能力の高さを間違いなく侮っている……と

ギア「成る程なあ。

使える訳だよ」

はやて「どうかしたん？」

ギア「いや、ともかくありがとな。はやてがこっちに来てくれてて助かったよ」

はやて「その代わりお仕事頼むんやけどな」

ギア「そだな。…ならばはやてに助言しとくよ」

はやて「はい？」

ギア「困った時はとりあえずこいつに頼るといい」

ストラ（……）

黙ってほしいと主張している傾向はあるのにも関わらず、こっちの都合はお構い無しか

とりあえず

ストラ「救援向かわないのですか？」

ギア「すぐ行く」

一礼すると早歩きでギアが退室し続きストラも部屋を出ると彼もまた一礼した後に扉を閉めた

カリム「思わぬ事が続きましたね…」

はやて「うん…。ストラさんの事は後でクロノ君にも聞いたたださなあかな」

カリム「はやても無理はしないようにね…。それでは外でシャツハに車で六課へ送るよう伝えてあります。裏口の方から向かって下さいね」

はやて「わかった。カリムもありがとな」

彼らの道中…

ギア「お前さ、お願いだからアレは止めような？」

ストラ「そいつはお前次第だ」

ドライバーはギア

クククツと笑いながらパトランプのサインを鳴らし、  
聖王教会の車が走る

ギア「…何処から？」

ストラ「名前から」

隣で端末を使いさっきの詳細データを展開しながら吐いた

つか倍速つておま…メチャクチャ速いぞ？普通に二桁逝ってるんじゃないか？

しかも何枚も映像展開して…端末の処理速度の方が間に合ってるんじゃない？…？

ギア「待て…最初からかよ」

ストラ「俺はそう紹介して貰っているんだが？だからお返し」

ギア「マジで質悪いから」

ストラ「あつそ」

ギア「はああ……とりあえずシートベルトはしておけよ？ 飛ばすからな！」

ストラ「……………あ？」

今更ながらに思う

車の免許を取るのに必要な時間というものがあるのにも関わらず、さも当たり前のように俺を乗せ、あつという間にヘリポートに到着した後、今は輸送機に乗り込み…現場へ移動しているこのすっ飛ばした工程に、俺は激しく突っ込みたかった

それだけ飛ばした。無駄にハンドルを切ったら多少ながらGが掛かった

今まで一番荒い運転に間違いなかった

速さには慣れている身でもあまり良いものではなかったとの感想ってやつだ

…まっ、良しさ

問題の現場の様子をモニターにて中継しているグリフィスと、現場で今もなお交戦している騎士も含めギアが現状について詳しい詳細や指示を出しているのがわかるから今は慎んでいるのだが



ギア「列車の方は？」

グリフィス「はい。目標ポイントへ到着し部隊が出撃。なのはさんとフェイトさんが合流、既にガジェットと交戦しています」

ギア「早いな…。いや、…流石少数エキスパート部隊だな」

グリフィス「お褒めいただき光栄です」

ギア「いやいや、つか…悪いな。偶々その場に居合わせていただけでそちらの人員を借りてしまった」

グリフィス「いえ、八神部隊長も彼だけしか回せなくて申し訳なさそうでした」

いやいや十分過ぎるって（笑）

ニカッと笑う。騎士にしては珍しくフレンドリーななりふりに、恐縮です…とグリフィスと言う

ギアに全く不安の様子がないのにも関わらず、グリフィスは彼とは真逆に申し訳なさど不安の顔色が真に見えていた

ストラにも話し掛けたグリフィスだが、彼は適当な相槌で反応がいまいちだった

ストラ（…グリフィスには悪い気がしてきた）

変な所で不器用にも曖昧さが見られた珍しい一面だがグリフィスとは良く業務についての話し相手でもある上にヴァイスとは違った意味での紳士。良い奴だと認識があったからこそ不覚にも思った

それでも面倒な事になるだけだから野郎の采配に任せる事にした

ギア「じゃあ俺は準備するよ。何か異常があったら、連絡宜しく！」

グリフィス「はい！任せてください」

モニターが一端切れるとオートパイロットに近くなったら呼び掛けてもらうようアラーム指示を出す

そして…

ギア「とりあえず戦闘後にでも時間作っておいてくれ」

ストラ「私情を後にまわすか、なら現場検証中に作るとしよう」

ギア「なるる、その方が自然か」

出発してから黙りが続く。無駄に緊迫感を装おう空気だが、彼らにとっては何て事がない

任務の事よりもそれぞれが別の思考に耽っており、またこの場にかいないすぐ近くにいる奴は無関係ではない。その事を思い返していた

奇妙な奇遇であろう。その時の最期を同じく思い返していたというのは

それだけに相手の存在を注意して時間を置く事で妥協した

ギア（しかし…ライクの言った通りなら、あの時から全く時間が進んでいないという事か）

それで掴み所のない実力が判るのなら、この“数年間”無駄ではないが、決してそうではない…直感が予想を組み立てていた

ストラと少し目が合ったが、作戦行動について特に言う事はなかった

寧ろなにか聞いておくか？

完全に放置気味だが、本人が何も聞かない辺り問題はないだろう

つか、あいつはなんか端末弄ってるし…どこことなく余裕の表れが明らかだ

ストラ（縁も…考えものだな）

ギア（今一度また共闘する日がやってくるとは…）

当人達がどう思っているかはともかくも明らかに双方共任務をついでにって感覚である

とはいえ貫禄だろう

成すべき事が判っている以上、問い掛けるような重要事項は特にこれといった事がない。防衛ラインを突破されない。敵戦力の無力化などは当然当たり前

如何に効率よく、そして状況に応じた迅速な対応をする。そこが本題

故に、撃破を目標にしている訳でもないが、大局を広い指揮官レベルの思考でいられる彼らだ

だからさ、仮に敵戦力を無力化しろなどとストラに指示を下してみろよ？

今更なに言ってるんだ？

と、馬鹿にされるだけ

これといった事がない。何をしようかと思いきや、ふと思いつく。ギアは持ってきた武装のチェックをし始める

ストラ「そいつは…元、俺の“ニーベリング”だな…？」

やや、間があつたが、不意に話し掛けるストラのその武器の名はH  
ボウガンと呼ばれる。狩猟が中心の世界での人が扱う武器

種類は多々あるが、Hボウガンは間接攻撃に非常に特化する。一発  
が非常に重い射撃武器

Rボウガンという軽量のボウガンがあるが：Hボウガンは設計上  
からとにかく重く分厚く攻撃力は高いが扱いの難しいのなんの

しかも固定意味を持つ名称のくせに彼らの居た世界では、稀に特定  
の型が決まっていない武器もある

ニベリングはHボウガンという系統に分類されるが、一般採用物  
ではない

だからこそストラが見間違える訳がなかった

ギア「ああ。魔法戦闘もやれないわけじゃないが：俺自身に魔力は  
全然ない。だからこいつを使ったり今は眼帯付けてんだが、眼帯に  
魔力を蓄えたりしてる」

ストラ「流石のデュアル・オブ・セイバーでも世界が違つと勝手も  
違つか」

ギア「そう言うなって、お前だって実際思うようににはいってないだろ?」

色々とな…

ストラ「何をだ?言うておくが、お前みたいに掛け持ちしているつもりも一々絡むつもりもないんだが」

ギア「…なんのことだよ?」

ストラ「ククク…」

怪しみに笑い、何処か確信があるのかはつきりした面持ち

上から目線にも見えかねん

こういつ時のこいつは直感的にめっぼう強い



ストラ「何ならこっそりと探ろうか？いや、今興味が湧いた。俺個人としては何故、ギア・C・Kがさも当然のようにミッドチルダに馴染んでいる？。交流のネットワークもありそうで、やけに焦るその様子を含め興味深い。真相だけに費やすのも悪くないな」

ギア「いや、そんなつまらない事に生を張らなくても…つか勘弁してくれ」

（ナナシ並みに、やな奴になった…）

ストラとしてもはやてや、カリム程ではないが気になってはいたよ  
うだ

だが、彼の性質上その言い様は遠回しに暇潰しにでもやるのかな？  
つとそんな感覚…しかし、諜報員の真似事以上にやってのける天才  
肌。そもそもこいつは「やりたいからやりたい様にやる」というの  
が行動原理のほずであり。その限度を知らない

やりたいからやるという行動に限度がないのはかなり質は悪い。特  
にこいつは天才肌というより天才に間違いなかった。そんなこいつ  
は徹底する程本気なのだ。良い意味でも悪い意味あって全く困った  
奴でもある

ストラ「ククク…」

ギア「頼むからマジで止めてくれ。…取り敢えず、作戦行動は分かっているよな？」

話を変えないと聞かれたくない事をストレートに言われてしまいそうだ。そう思い、大事な戦線に話題を変える

ストラ「当然だが具体的なプランは出しとけよ。寧ろ意見を聞いたのか？わざわざ指名した以上、何かあるんだろ？」

ギア「流石としか言い様がないな」

そこまでわかりなら、期待していいな

ストラ「当然だ。して、どうしてほしい？」

ギア「そうだな…、俺は先に出撃するが、ライクはまだここで待機して全体を把握してもらったほうがいいな。後手にはなるが最善策として必要に応じた行動を頼む」

変なガジェットとやらは、何をやらかす…？

ストラ「伏兵でも仕掛けていると考えか…。そんなに一癖あるのか？」

ギア「んー…まあな、そうなんだけど、一応な」

ストラ「…へえ」

こいつを知っているからこそ“わかる”

ストラ「伏兵。万が一に備え…ではなく“逆手を取る”って奴だな」

ギア「！」

どういう人間かというのを理解されていると、使いやすいがやりにくい

ギア「流石は“ハイブリット”って奴か」

ストラ「一々そこに絡むな。癢に触る」

ギア「そりゃ悪かったなつと…：そついや、中継は支障が出るだろ？  
グリフィスがやるからしなくても良いぞ」

ストラ「それは困るな。部隊長から直々の命に背く」

ギア「困るって…：あんな、現場中継しながら戦闘する気かてめえは  
…？」

ストラ「当然だ。が、序でに言わせてもらうが…：表立っての振  
る舞いは可能な限り避け、間接的な中継を優先させてもらう。だか  
ら裏方への干渉は秘密裏と徹底してもらおうとしよう」

ギア「グリフィスはやてから通信きた時も中継してるってか？  
…：待て、そもそもお前どやって援護する気だ？」

ギアの疑問はもつともだった

ギアからの指示は秘密に行くが、真つ向な戦闘力を明かさずに現場  
と近辺の情報を仕入れ六課に現場の情報を流す事になるはずだが難  
解を示す

だが、それが可能ならやってみようの方が良いともはつきりしていた

ストラ「ダミーのフェイクシルエットとかいう魔法を応用した擬似人物プログラムを用意してある。これで偽物は此処で待機しながら中継しているフリをさせ…俺は現場で動く」

成る程な…納得がいった

実態を知っている身としてこちらとしては使えるのならばライクの戦闘力を表立って目の当たりにさせる訳にはいかなかった。真相を知りたいはずのはやてにも知られるのも微妙なさじ加減。誰のずる賢い発想なのか知らないがストラ・イクザムという人物は二等陸士という立場だから六課に加わっている“戦力”

認識を履き違えているだろう管理局はそのままにしておいた方が悪い事だが当分ならば六課に取っても都合が良い

どこの試験官かは知らないがある意味感謝だ。明らかに認識を間違った評価である確信があった

現在のところ、六課に強力なカードが増えるのはこちらとしても幸

いか？

ギア「ばれたらランクの底上げに転属させられる可能性もあるからな」

ストラ「それだけ判つてりや段取りは要らんだろう」

そんな頃合いにオートパイロットからアナウンスがかかる

ギア「ありや、…それと実弾は俺が許可する。任務の都合上デバイスじゃきついだろ？けど、今回はニーベリングを持っていくが良いか？」

ストラ「だからそれはお前の物だよ」

ギア「あのな、遺品の役目も果たせない以上良い使い手に使ってもらえたほうが“こいつらも”幸せだろ？」

ニーベリングを指すように掲げ、「ギア・C・K、ちよっくら行ってくる！」とハッチまで移動

んじゃ っと言いながら、へらへら笑いながらも降下しようとする

ストラ「おい……装備は？」

ギア「あっいけね。もう1つのケースはそっちだwww。必要だろう？言われた通り折角持ってきてやったんだから使えよ？」

ストラ「なに……？」

ギアはそのまま普通にハッチから降下

出撃というよりただの落下が正しい彼の戦いが始まった

ストラ「もう一つ」って……ああこれが「

それは椅子の下にあった

奴にしては妙だったがただ静かに開けてみる



カチャ…

ストラ（星砕きだと！？おまつ…邪装継承者なら…  
“ごつちを”  
持っていていけよ！？）

やられた。まさか修復されてたとは…

一杯食わされた

読みを外すとはこの事が

ガタンツ！

ストラはため息混じりに中身を強引に引っ張がす

備品類が床に転がる

弾はマガジン式か…全部持っていくか

手慣れた手つきであつという間に装備を整えると、ハウンドにカートリッジを打ち込んで“フェイクシルエツト”を発動

シルエツトはデコイみたいな用法になるが魔力反応もぴったり、衝撃を受けない限り消されたりはしない

戦闘状況の音をオートパイロット側で出し、操っているフリをさせながら姿だけを見せる。これならばれないだろう

さて…いくか

ギア「こちら聖王教会教会騎士団所属のギア・C・Kクロウ！前戦の騎士達へ、前方はこちらが引き受ける！一度ラインを下げ、態勢を立て直せ」

高度もかなりあったのにも関わらず、平然と着地すると常人では想像もつかない高速の足取りはまさに疾風ハヤテの如く

幸いにも位置が近かったのか、すぐに現場で応戦していた騎士の姿が見えた

騎士「了解！騎士ギア、応援感謝致します」

その様子には嬉しさがある

通常、たった一人の参戦など戦力的にたかが知れているが、騎士の間でもギアという人物は有名なのかも知れない

それだけ彼が出てきてくれた事に期待が掛かっているともしえる

ずば抜けたスピードは空戦魔導士にも劣らず、あっという間に彼らの防衛ラインを越えて最前線へすぐに到達

地上と空中にガジェットが居合わせて見事な隊列と陣形を取って騎士と交戦していたが、彼が来てから途端の事だ

ガッ！！

空中で三機一組の陣形を取っていたガジェットの内、二機が簡単に吹き飛び

ギア「っっしやああ！！」「」

ギアの所在に気がついた地上のガジェットが迎撃態勢に入る

ギアは空のガジェットへ抑制を掛けるようにニーベリングの属性弾で次々と弾膜をばらまくと一旦ボウガンを背中の子にまわす

入れ代わりとばかり、腰に備えた双剣が素早く両手に納まると

地上のガジェット達が陣形取った中へと入り込んだかと思えば

ガジェットが爆散した

「流石はギア・クロウだ。AMFによる妨害も無意味に等しい君は此処では特に厄介な奴だよ」

最前戦より少し離れた森林地帯の中に、一人端末を弄っている男はボソリと吐く

顔をバイザーで隠し、頭髪は見事というほど純髪だと思わせる黒体型もスマートで、両腰に通常のライフルより型は良く、やや大きめの銃が二丁…いや、内の二丁は右肩に担いでいる

「まっ、奴との戦闘データならばスカリエツティも喜ぶ。“暇潰し”にはちょうど良いからお兄さんは一向に構わないけどな」

本来、こんな人気のない場所にて交戦している彼らに対し、誰の耳にも届く事なくそんな事を言ってしまうのは明らかに犯人だ

どう遊んでやるのかな？と不敵な笑みを浮かべていると、その男の視線の前にすらりと空間モニターが現れる

名を呼んだらなんとやら

タイミングの良い奴だ。彼はそう思った

「やあ、我が友よ。首尾はどうかな？」

「やあ我が悪友よ。これから英雄と遊ぶつもりさ」

モニターに移るのは青髪と人には珍しい金色の眼  
そして白い白衣を身に付けた男

管理局でも次元広域にまで指名手配されている犯罪者

“ジェイル・スカリエツィ”という者だ

スカリエツィ

「レリックは管理局に持っていかれてしまったが、中々有益なデータが入ったからね」

「その割には御機嫌は良さそうだな」

スカリエツィ

「中々良いサンプルがいたからさ」

うっすらと喜ばしいのが目に見える

少し嫌な意味でのお熱の入り方だが、バイザーの男は決して嫌気はなかった

「そりゃ良かったな。ああ、帰りにクラナガンの大都市に寄るから明日までに迎えをくれないか？」

スカリエツィ

「わかった、手配しよう。ついでに買い物頼まれてくれないかな？」

「元よりそのつもりだ」

そんなゆとりこもった会話の内に確実に戦力を削られているのにも関わらず、気にも掛けない様子だった

そんな所ある意味似た者同士だろう

「まっ、これから9機使うから楽しみにしてな」

スカリエッティ

「ああ、楽しみだよ。非常に興味深いテストだ。気質によって対応型のガジェットを意のままに動かす操統術とは、ただ攻撃、制圧と指示を与えそれによってAIが勝手に行動するものとは訳が違うからね」

魔力反応に掛からない気質というチカラでガラクタが一変し闘争でも錯覚させる機動性

それ相応な空間認識能力に指揮官としての能力等々、必要されるスキルが多いにも関わらず使い熟す君は、まさに天才だよ



スカリエツティは

“確かにそう言った”

「スカリエツティともあろう者が…、世紀の大天才にそう言われる程ではないけどな」

スカリエツティ

「そうかな？自己に対し、君はだいぶ過小評価していると思うのだが？」

「そいつは違うな」

はっきりと否定する

腕を組むとただ、最前戦だけを見る

やけに印象的

思わず圧力感を感じるぐらいの合間

「この発達した世界。武芸者としての見解ならば俺など大した程でもない」

故に俺は古過ぎた古人さ…と吐く

スカリエッティ

「その古人の適応力には、私でさえも驚かされるんだがね。太古の人間とは偉人と聞いた事があるが、君なら納得だ。十分に該当するよ」

「そりゃどーも。だが、上には上がいるのは確か。

それに」

「魔力とはまた違ったその理論を理解した上で、装置を作り出した天才にそう言われてもな」

バイザーを指しながら彼は笑い、もう片手でXと刻まれた銃を前方へ  
そう…

かの、便利な玩具の道を示すと共に

改造型玩具ガジェットのモノアイが怪しく光る

「如何に優れた戦士であろうと、一人は一人だ。真に統率された連携に選る兵法は、例えエースでもわからなくなるものだと管理局にはご理解して頂きたいものだ」

スカリエツティ

「私は手並みを拝見させてもらおうとするよ」

ふっと緩ませると端末モニターは消える

漸く、こいつらの出番だな

男のバイザーには、ガジェットから送られる戦場の背景が小さく照らされ口答が意味を為すか判らないが、彼は指示を出す

「玩具を隠すなら玩具の中。1小隊は奴らの防衛ラインへ、埋伏で狙う。残り2小隊はあちらさんの大黒柱、万丈な豪傑のお相手をしてもらおう…そんなところが妥当かな」

モノアイが再び光る

所詮はガジェットなので、颯爽とした…とは言い難いが、カタカタと人形の如く起動する

主から命あるじを受けたガジェット達は各機それぞれが移動

「よもやお前とて、物量戦が分からん訳ではあるまい？  
…ドンドルマの英雄よ」

確かにそう呟いた男の口調は軽々しさはない、独特な風格、威厳、威圧とそれは歴戦を修羅の強さで貫いた者だと

モニター越し、スカリエッツィは笑みを浮かべていたが、アジトの方で彼の側に端末モニターが開かれる

「あのままやらせてもよろしいのですか？」

スカリエッツィ

「ウーノか。ああ、構わないさ。彼は私達にとって、良き理解者だ」

ウーノと呼ばれた女性だが、端から見れば秘書と言った印象を受ける

それは違いないだろう。先程もスカリエッツィに列車での戦闘報告もしていたし、従者的な印象も受ける

ウーノ「それはよく存じております。ですが、万が一という事も。…妹達が心配しています」

スカリエッツィ

「なに、彼なら心配いらさないさ」

不敵に笑い、現在地を移したのか…モニター越しの“彼は”余裕満面  
寧ろ現場をこっそりと楽しんでいる

それもそのはずだ

彼自身が戦闘をするわけではないし、姿を晒すような真似もしないしかもだ。センサー自体を遮断する小型装置も遮断している。基本、魔力反応ばかりに捉われる管理局のセンサー（索敵）にはまず引っ掛からない

一般の人には有る微量の魔力も、どういう訳か彼自身に微量の魔力すらない、珍しい人間である。生体反応だつて隠せる自信がある

特に後者についてはスカリエッティや彼の組織の一員が、身を持って知っている

それこそ、ピンポイントで映像が“偶々映る”方がまだ高い発見確率になるだろう

スカリエッティ

「ああそうだ。明日までにクラナガンへ迎えを寄越してほしいそうだ」

ここまで余裕綽々な様子はそれ程気に掛ける事ではないのだろうか

全ては創造主の命のままに

ウーノ「わかりました。では、手の空いた妹達に通達しておきます」

ウーノはそれだけ言った

流石はエース

あの疾風迅雷の黒い天使でさえも驚愕な顔つきにだって変わるだろう

少なからず、防衛ラインでガジェットの進行を妨げ、単体で彼が交戦しているであろうそのポイントは

幾つものガジェットが真っ二つに割れたり、直撃を起こし機能停止にまで陥れられ、地に叩きつけられたりとスクラップ逝きになっていくのを見れば、思わずでも驚声くらいは上がったりはするもんだ

415

へり（輸送機）からの中継としてバックアップをしているフリ、もとい偽物…六課本拠地では歓声近い様子でシャリオや通信士スタッフが驚愕していたりする



まあ、そこは気にしなくてもいいだろう

教会騎士であるギアが次々とガジェットを叩いていられるのも今のうち

実際に手を下す男は、頃合くたいだと判断すると

かの手によって操られるガジェット達は

紐で動くマリオネットのように、同型とは違った動きを見せる

~~~~~

勿論、すぐに異変に気がついたのは彼

蹴り上げたガジェットの下下に目もくれず、一部のガジェットの動きが変わった

………つか、あれは……

ギア「げっ！きたか！」

ガジェット・ドローン

？型改からミサイルが発射された
避けようと移動した回避コースにもデジヤブなタイミングでミサイルが軌道を描いてくる

ギア「あぶね！！」

咄嗟にその機動力に修正を掛けてミサイルを乗り越える避け方になる

爆発したらヤバかった

騎士服とはいえ障壁も張れない人間がミサイルなんざくらったら、
解るだろ？

そもそもちゃんとした魔導騎士ではないので、肝心の騎士服に防御

能力があるのかもそれさえも怪しい上にミサイル自体に非殺傷設定
掛かっているとは考えにくい

仮に非殺傷なミサイルだったらなんとまあ……どんだけ敵に優しいハ
イスペック低コスト性のミサイルなんだ？と突っ込んでも良いはずだ

とりあえず（作者は）んな訳がねえだろ！？と……どちらかといえば
非殺傷で済ます為に、騎士服、防護服、通称バリアジャケットなど
と呼び方まであるのだからそっちの方に素ダメージを軽減する為の
作用（細工）があると勝手に見込んでる

つまり、負けを知らぬが凡先生ならわけないかもしれないが、ここ
はリアルに考えて見る

“木っ端微塵”も夢じゃない

つか、普通は死ぬ

魔導士ならば、障壁を張ったりまたは避けたりと…自衛するための手段が非常に使い勝手の良い所ばかりだが

そんな都合の良いスキルなど生憎持ち合わせちゃいないので意外かもしれないが、直撃を避けるという業については必死な事には違いない

何度か弾膜を張られたかのようにミサイルやレーザーが飛んでくるが、素早く回避行動を取ると敵機の攻撃は一定の誘導が掛かった後に攻撃が同士討ちのようになり自然と爆散するようになった

攻撃の密度がより一層深くなる

ギア「チツ!!」

少しばかりやりにくく…いや、「厄介なのが居るな…」とぼやく

おそらくアレだろう

彼の差す“アレ”とは、先程の犯人が撒いた布石
“玩具”の事

アレは前の戦闘にも現れた
今回は数が増えている

いつの間にか他のガジェット達の中に潜り込んでいた為に、気がつ
いたのは一手遅れた後だった

（動きが読まれてる）

僅かでも

ギアはそう感じた

とはいえ、あれらから直撃を貰うへまなどをする騎士ではない

一部のガジェットによる連携の取り方が巧いだけ

要は、見ていればわけないのだ

しかし、そのガジェット達からは、やたらな威圧感を覚える

どう例えたら良いのか？

熟練された動作を再現しているとも思えばいいのか？

とにかく

やりにくさだけは一級品

早いところこの辺りのガジェットを殲滅しないと不味い

ここでは足止めをされてしまっているという意味だ

ガジェットそのものが集まってきたのかやたら増えてきたし、流石に単体で目の前の今のガラクタを短時間で一掃するのは極めて困難

それどころか、反撃しに掛かる事も極めて減らされ

一部、防衛ラインへ向かっているガジェットも段々数が増えてきた

これではこの場で交戦する意味があるのかいよいよ怪しくなってきた
やがった

直感的にだが、そう思った

グリフィス「ギアさん、防衛ラインの騎士達の戦力が削られていきます」

ギア「あれ?...マジか?」

モニターには映らないがグリフィスからの音声だけの通信

連中（騎士達）には幾らかまだマシな態勢にさせたつもりだが、それは予想外な展開になったんだと

グリフィス「はい。ですから先程ライティング隊隊長のフェイトさんに応援を要請し、今そちらに向かっています」

ギア「そう?...まあ多分、その必要はないと思うけどな...!」

カチャ ガツガツガツ!

二ーベリングから三連射すると高く上昇しグレイズ

攻めを押さえ、回避だけに集中する

グリフィス「えっ?」

今のギアは困った様子など一つもなく、レーザーを躲し、寧ろ余裕溢れて平然とした様子だ

この事態でも、なんともなさそうな表情だと読み取れるだろう

グリフィスの方が怪訝になったのは言うまでもない

ギア「今回なら特に問題ないよ」

無論、隣の部隊長シートに座っていたはやても同様に聞いていたが、同じくして（えっ？…どういうこと？）
といった様子だった

当の本人は防衛ラインへ少しずつ向かうように上手く攻撃を避け、射撃したり武器を切り替えガジェットに気を込めた斬撃を飛ばす

直撃を貰ったガジェットが真っ二つになったのを確認すると、周囲
見渡す

たくさんのがジェットに包囲されているが、劣勢の表情どころか、
冷静になった様子

ギア（さてと、…そろそろ仕掛けてくれるはず）

アレほどの物を返したんだ。あいつが何もしないはずがない

あくまでも、表情には出さず、内面でクスリ笑ってやる

取り敢えず、憂さ晴らしに使うだろうな

んでもって、上手くいったら、“アレも”使う

極めて高い確立だ

何故なら、そういう状況下になるように謀った事

んで、使えば。…あいつが“所持している”事になる

そうなりゃ、こっちの事情もだいが変わるといつもの

仮に、使わない所で…

“ 在処は知っている ” 事には違いない

ギア（…一応探りは入れておかないとな）

ニ―ベリングに切り替える最中

ギアの胸元辺りで小さく「ジャラ…」という音が鳴る

それはペンダント

まるで、何かを捜しているかのようにペンダントは揺れ動く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1793s/>

ライク・クロニクル

2011年7月11日05時09分発行